



RECORD COLLECTION 2004



全国高等専門学校
テクノロジーパンナー
2004年夏
ISHIKAWA

概要

9項目、9ページあり

	ご挨拶 02ページ
	概要 1 03ページ
	概要 2 04ページ
	実施規程 05ページ
	所在地 06ページ
	応募状況 07ページ
	行程 08ページ
	妹島和世特別講演 09ページ
	本選 10ページ

ワークショップ部門

10項目、23ページあり

事項

△ ページ数

▼ □ 地域交流シンポジウムセッション

- 募集要項 12ページ
- 競技概要 14ページ
- 作品・記録 14~22ページ
- 講評 23ページ
- 総括 24ページ



▼ □ ものづくりワークショップセッション

- 募集要項 26ページ
- 競技概要 27ページ
- 作品・記録 28~31ページ
- 質疑応答 32~33ページ
- 総括 34ページ



設計競技部門

14項目、36ページあり

事項

△ ページ数

▼ □ 構造デザインコンペティションセッション

- 募集要項 36ページ
- 競技概要 37ページ
- 競技結果 38~39ページ
- 作品・記録 40~43ページ
- 競技風景 44~45ページ
- 総括 46ページ



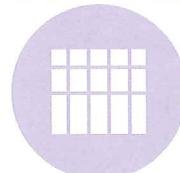
▼ □ 木造住宅デザインコンペティションセッション

- 募集要項 48ページ
- 競技概要 49ページ
- 作品 50~51ページ
- 記録 52~58ページ
- 講評 59~60ページ



▼ □ 複合住居デザインコンペティションセッション

- 募集要項 62ページ
- 競技概要 63ページ
- 作品・記録・講評 64~71ページ



01

contents

資料

2項目、2ページあり



ポスター・パンフレット
72ページ



事務局紹介
73ページ

記録集発行のご挨拶



17.1.11

全国高等専門学校デザインコンペティション実行委員会委員長

石川工業高等専門学校長 金岡 千嘉男

去る平成16年9月。記念すべき第1回デザコン。全国高等専門学校デザインコンペティション2004を当地で開催し、成功裏にこれを終えることができました。

全国高専デザコン2004は、「人が生きる生活環境を構成するための総合的技術」として「デザイン」の領域を根本的に捉え直すことを主眼としました。21世紀の教育が目指すもののひとつに『「知」の世紀をリードする創造性に富んだ人間の育成』が挙げられます。デザインを通じた独創的想像力と実践力に富む人材の育成、これこそが高専でしかできないものづくり教育のひとつと言っても過言ではありません。デザコンがその礎となることを祈念しています。

構造デザインセッションで文部科学大臣賞を獲得した豊田高専建築学科の作品はもちろん、木造住宅デザインセッション、複合住居デザインセッションの作品、そして、ワークショップ部門の2セッションの内容も、全国高専デザコンの名に値する高い水準でした。記録集の1ページ、1ページに、あの日の熱気が甦ります。学生諸君は、今日も明日も研鑽を積み、切磋琢磨し、新たなデザコンの足跡を刻んでください。

最後になりましたが、第1回デザコンの開催及びこの記録集の発行にあたり、多大なご尽力とご支援を賜りました文部科学省、津幡町、独立行政法人国立高等専門学校機構、各後援団体及び全ての皆様に対して、心からの感謝を申し上げます。

第2回デザコンは平成17年11月に開催されます。明石高専でお会いしましょう。

ご来場お礼



ting 02

文部科学大臣政務官
衆議院議員 駐 浩 様

津幡町長
村 隆一 様

高等専門学校連合会 会長
四ツ柳 隆夫 様

挨拶



津幡町商工会 会長
鍛治 秀雄 様

次年度開催主管校
明石高専校長 高 久晴 様

文部科学省高等教育局専門教育課
課長補佐 児島 昌樹 様

(独) 国立高等専門学校機構
事務局長 小山 五朗 様
企画課長 杉浦 利勝 様

謝辞

特に記して厚くお礼申し上げます。

津幡町産業建設部商工観光課
課長補佐 竹本 信幸 様

(独) 国立高等専門学校機構企画課
企画第一係長 樋口 幸一 様

主催

高等専門学校連合会

共催

津幡町

後援

文部科学省、石川県、(社)土木学会、(社)日本建築学会、津幡町商工会、(社)日本橋梁建設協会、(社)日本道路協会、石川県住宅供給公社、(財)石川県建築住宅総合センター、(社)石川県建設業協会、(社)石川県建築士会、(社)石川県建築士事務所協会、(社)石川県建築設計協同組合、(社)石川県木材工業技術協会、河北郡土建協同組合、石川工業高等専門学校教育後援会、石川工業高等専門学校同窓会、石川工業高等専門学校建築学科同窓会

協力

(株)別川製作所、(株)久世ベローズ工業所、(株)日本海コンサルタント、ヨシダ宣伝(株)、(株)エイ・シイ・ディ、(株)NTTファシリティーズ北陸営業本部、(株)表組、かわさき画材、カンド印刷(株)、(株)国土開発センター、(株)コスモサミット、(株)芝寿し、鈴木管工業(株)、(株)中島建築事務所、(株)東洋設計、ニッコー(株)、福島印刷(株)、(株)みづほ建築事務所、アパホテル(株)、(株)英光、(株)大林組金沢営業所、小松電子(株)、田中昭文堂印刷(株)、石川工業高等専門学校生活協同組合、石川工業高等専門学校同窓会、石川工業高等専門学校建築学科同窓会(ほおづえ会)、

特別協力

津幡町、津幡町商工会、(財)金沢コンベンションピューロー、(株)NTTドコモ北陸、石川工業高等専門学校教育後援会

目的

全国高等専門学校デザインコンペティションは、学生の日頃の教育成果を生かした生活環境関連のデザインや設計等を競うこと等により、高等専門学校が目指す、独創的想像力と実践力に富む人材の育成に寄与することを目的とします。

主旨

全国高等専門学校デザインコンペティション2004は、昭和52年に一部の高専の建築学科によって行われた建築教育における建築理論の実践プロセスについての研究交流シンポジウムがその始まりです。5年前からは建築教育の技能研鑽及び学生の設計技術向上を研究する全国高専建築シンポジウムとして開催されてきました。

そして平成16年度からは、環境都市工学系学科、土木・建設工学系学科及び建築学科を中心とした高専全体の取り組みとして、「人が生きる生活環境を構成するための総合的技術」として「デザイン」の領域を根本的に捉え直し、ここに「全国高等専門学校デザインコンペティション2004」を開催する運びとなりました。

03 overview

概要

これまで主に学校中心に行われてきた教育や学生の活動も、近年では地域のニーズを取り上げたテーマや、地域の中に活動の場を移した取り組み等として各地で行われ、地域社会での高専の評価が高まっています。そこで「高専デザイン2004」は、「I.ワークショップ部門」(2セッション)と「II.設計競技部門」(3セッション)の2部門(5セッション)から構成されています。

概要

「I.ワークショップ部門」の2セッションとして、「地域交流シンポジウム」セッションでは、各高専でのユニークかつ学生が主体的に取り組んだテーマについてポスター展示形式で発表頂き、高専における地域共同事業やまちづくり支援活動、ものづくり等について意見やアイディアを競い、地域に根ざしたシビック・デザインを構築していきます。併せて「ものづくりワークショップ」セッションでは、作業で間伐材によるベンチの制作を行い、学習意欲を育みます。

「II.設計競技部門」の3セッションとしては、ものづくり教育・共同研究に関わった知識と技術に裏打ちされた「デザイン」を競い、木製ブリッジの「構造デザインコンペティション」、木構造による住宅の「木造住宅デザインコンペティション」、コンクリート系複合機能住宅の「複合住居デザインコンペティション」という、3つのコンペティションを開催します。

また、我が国を代表する建築家(複合住居コンペ審査員長:妹島和世 慶應義塾大学理工学部・客員教授)による現代建築における建築施設計画学の動向及び最新技術・構法等についての講演も開催しました。

●ワークショップ部門の概要

ワークショップ部門は、各高専の学生間交流に主眼を置き、またものづくり教育に対する参加関係者の理解を深めるために「地域交流シンポジウム」と「ものづくりワークショップ」の2セッションを準備しています。「地域交流シンポジウム」セッションではパネルディスカッションを中心とし、「ものづくりワークショップ」セッションではベンチの実物制作を行います。

「地域交流シンポジウム」セッションの概要

テーマ：「まちづくりへのチャレンジ」

地域交流シンポジウムは、高等専門学校の学生等の発表・情報交換の場とすることを目的に開催します。

これまでには学校の中だけで行われてきた教育や学生活動も、近年では地域のニーズを取り上げたテーマや、地域の中に活動の場を移した取り組み等が各地で行われ、地域社会に高等専門学校の存在が認められ始めています。地域交流シンポジウムは、各校で行われているそうしたユニークな地域共同事業や公開事業等のうち、学生が主体的に取り組んだものを紹介し、高等専門学校における地域共同事業やまちづくり支援活動、ものづくり等について意見やアイデアを交換する場とし、地域に根ざした高専及び高専生のあり方を考えるきっかけになればと考えています。

地域交流シンポジウムは、ポスター展示とパネルディスカッションの2段階構成で実施します。

「ものづくりワークショップ」セッションの概要

テーマ：「座ってまちをみつける場所」

ものづくりワークショップは、デザインの構想からその実際的な制作過程における体験を通して、学生交流及び相互研鑽の場とすることを目的に開催します。

予め決められた部材を、切断し組み立てることによってベンチを制作します。部材は3種類用意され、間伐材が使用されます。時間の都合で部材の切り出しが各高専から提出されたリストに従って事前に準備してあります。

当日は、制作作品についてのプレゼンテーションと組み立て作業が各参加校ごとに行われ、デザインコンペティションとしてその過程も踏まえて、a. デザイン・アイデア、b. 技能・技術、c. 連携・連帯の各項目で審査が行われます。またこれらの作品は商店街に移され、実際に座ったり、さわったりできる市民審査も行われます。

●設計競技部門の概要

設計競技部門は、「総合的デザイン(設計)」をキーワードとしつつ、高等専門学校で技術教育を受ける学生の技術の向上とその外部評価を主たる目的とし、学生の相互理解と相互研鑽の場として開催します。今回は、広く建設系学科・環境都市系学科からの参加及び幅広い年齢層の参加も期待し、以下に示す3つのセッションを用意しました。

「構造デザインコンペティション」セッションの概要

テーマ：「ブリッジコンテスト」

建設構造における最も基本的な形の1つである、単純梁形式の構造体を設計・制作し、載荷試験により耐荷性能等を競うコンテストです。構造体そのものについては、梁・トラス・アーチなど構造デザインは自由な設計が出来るでしょう。また、構造形式に応じて材料の強度や特性等を実験・解析することで、自ら設計・制作した構造物がどのような性能を持てるか、自ら体得する機会となります。定められた条件の中での構造デザインの可能性を探ってください。

設計条件：スパンは100cmで、両端を固定しない単純梁形式の構造体を作成する。制作物の最大断面は縦15cm×横10cmの断面内におさめ、制作物の総重量は200g以下とする。スパン中央部での集中載荷とする。使用材料は木材のみとする。また、制作物については、予め構造実験や構造解析を行うなどし、耐荷性能についての予測値を明示する。

view #2 04

「木造住宅デザインコンペティション」セッションの概要

テーマ：「帰りたくなる家」

家は、全ての人間にとてなくてはならないものでしょう。しかし、現代の多くの家族は、会社や学校に住み、まるで家に通っている様相を感じることもあります。今や家は、家にいる人と、家のことは何もしない人の対立を示しているのでしょうか？そういう状況を克服・改善することも含めて、家族の皆が早く帰宅して生活を楽しむことの出来る「帰りたくなる家」を設計提案してください。

設計条件／募集要項にて指定。家族条件など／夫婦2人（ともに40歳）+小学4年生（男）+小学1年生（女）、部屋条件／寝室、子供部屋、居間的な空間、畳部屋、食事+キッチン、風呂、トイレ、洗面、収納、その他必要と思われる空間。駐車可能台数は、2台以上とする（その他立地条件あり）。

要 2

「複合住居デザインコンペティション」セッションの概要

テーマ：「まち暮らしを楽しむための複合住居」

中心商店街、旧市街地などかつては人が集いにぎわいにあふれた場所に活気を取り戻すことは、日本各地で大きな取り組みとなって今なお動いています。もう一度、街中へ人の暮らしを回復させるための、そしてもう一度、魅力あるまち暮らしを取り戻すための設計提案を期待します。

設計条件／敷地は各自で設定すること。ただし、敷地面積40m²程度（±10%）とする。法規もしくは条例上、3階建ての建物を建設することが可能な敷地とする。敷地は実際に存在する場所を想定すること。家族条件／各自で家族を設定すること。ただし、設計する建物内に必ず定住することを前提とすること。施設機能／住宅機能を有する施設とすること。複合させる機能は各自で設定すること。その他条件／主要構造はRC造3階建て。敷地は6m以上の道路に接していること。地下室は設けない。隣地境界線からの距離は0.5m以上とする。

目的

第1条 この規程は、全国高等専門学校デザインコンペティション（以下「デザコン」という。）の実施に関する必要な事項を定めることを目的とする。

デザコンの目的

第2条 デザコンは、学生の日頃の教育成果を生かした生活環境関連のデザインや設計等を競うこと等により、高等専門学校が目指す、独創的想像力と実践力に富む人材の育成に寄与することを目的とする。

委員会

第3条 デザコンを実施するため、連合会内に、全国高等専門学校デザインコンペティション実行委員会（以下「委員会」という。）を置く。

- 2 委員会は、全国高等専門学校デザインコンペティション（以下「デザコン」という。）に関する次の事項を審議し、決定する。
 - 一 開催地及び開催日時に関すること。
 - 二 企画、運営、広報及び連絡調整に関すること。
 - 三 財務に関すること。
 - 四 デザコン実施後の検証に関すること。
 - 五 その他、デザコンの実施に関し、重要な事項に関すること。
- 3 委員会に関し必要な事項は、別に定める。

委員会の構成

第4条 委員会に、別表に掲げる担当地区から1名ずつ選出した8名及び開催主管校の校長を委員として置く。

- 2 委員会に委員長を置き、委員長は開催主管校の校長とする。
- 3 委員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。
- 4 委員長が必要と認めたときは、委員会に委員以外の者を出席させることができる。

委員会の事務

第5条 デザコンに関する事務局は、開催主管校に置く。

開催

第6条 デザコンは年1回開催するものとする。

その他

第7条 この規程に定めるもののほか、必要な事項は、別に定める。

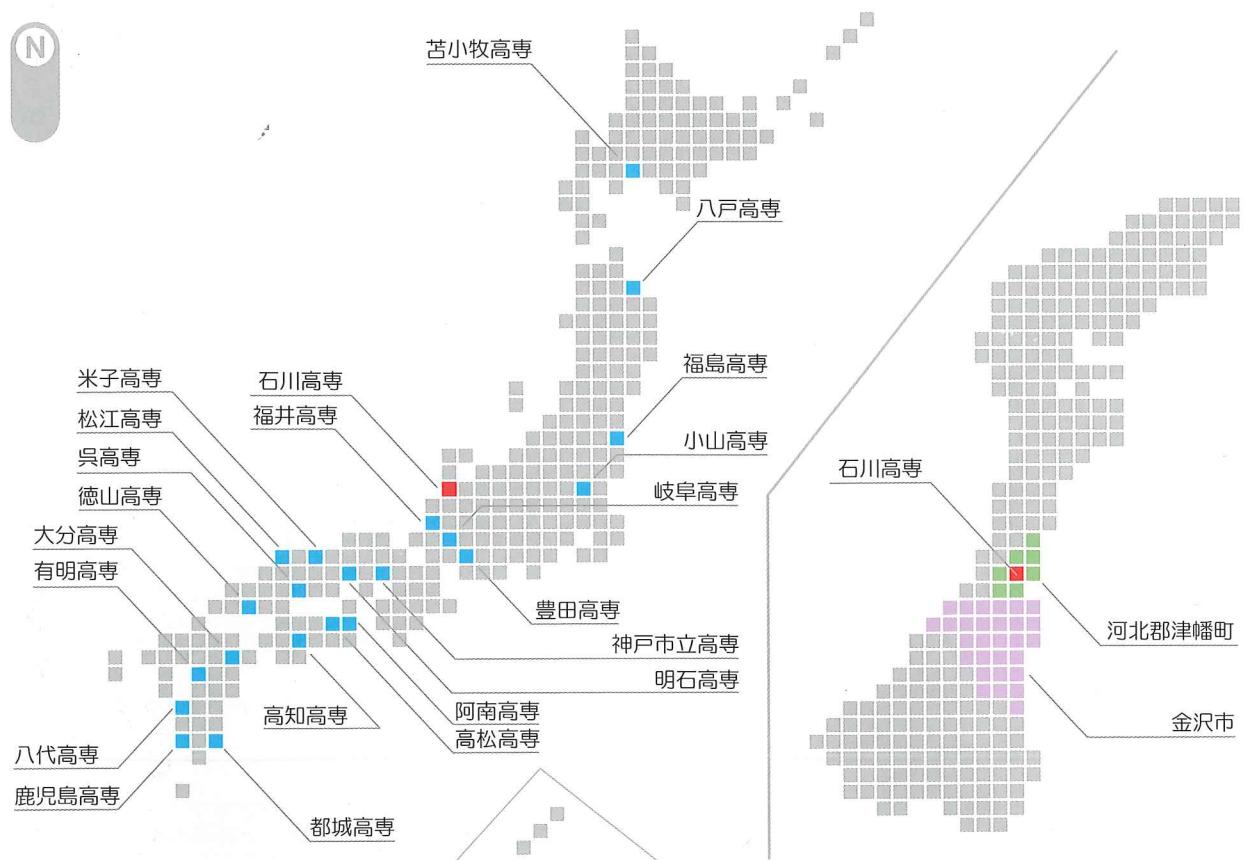
附則

この規程は、平成16年8月6日から実施する。

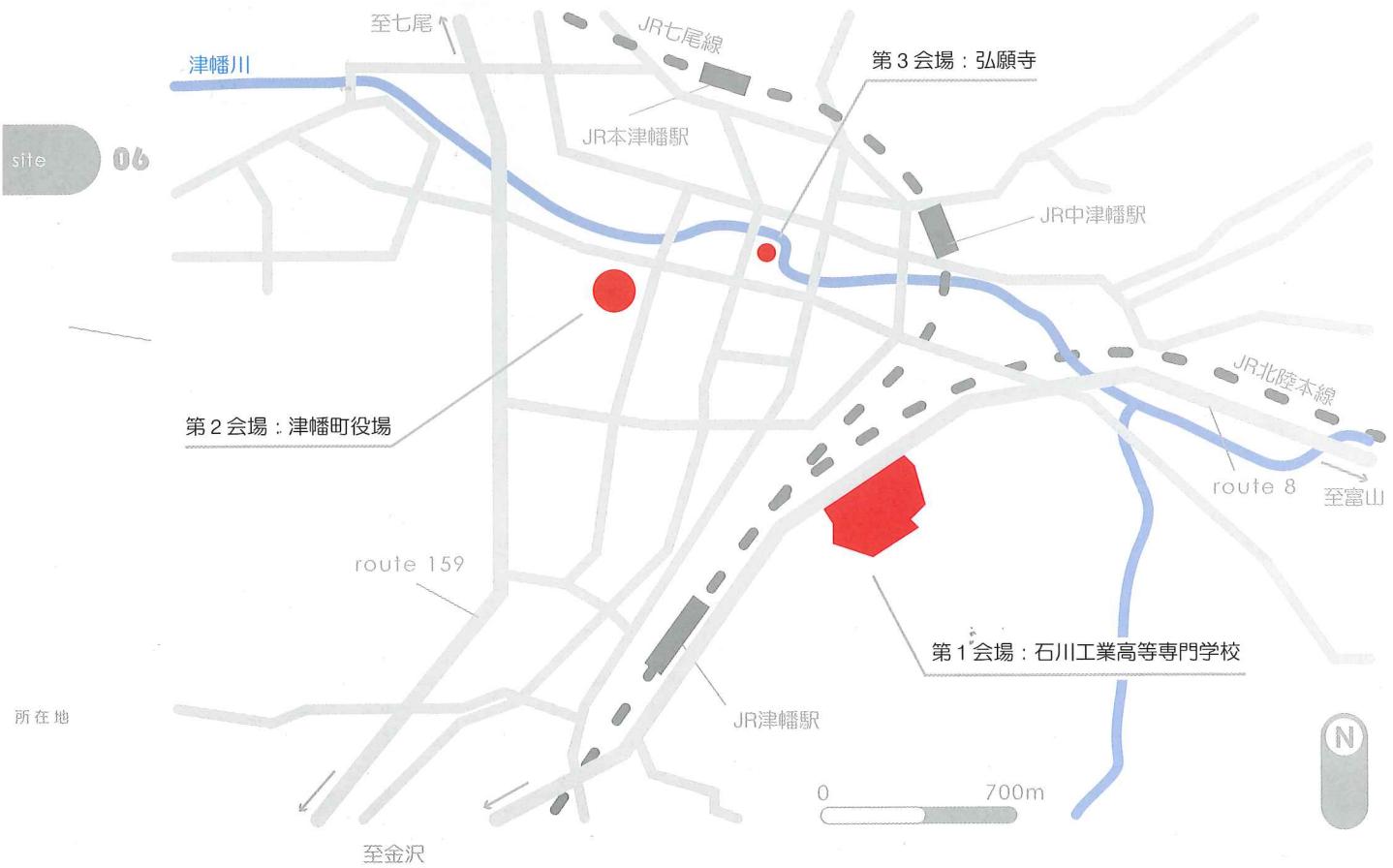
別表

担当地区	所 属 校
北海道	函館、苫小牧、釧路、旭川、札幌市立
東北	八戸、一関、宮城、仙台電波、秋田、鶴岡、福島
関東信越	茨城、小山、群馬、木更津、東京、長岡、長野、都立航空、東京都立、育英
東海北陸	富山、富山商船、石川、福井、岐阜、沼津、豊田、鈴鹿、鳥羽商船、金沢
近畿	舞鶴、明石、奈良、和歌山、大阪府立、神戸市立、近畿大学
中國	米子、松江、津山、広島商船、呉、徳山、宇部、大島商船
四国	阿南、高松、詫間電波、新居浜、弓削商船、高知
九州沖縄	久留米、有明、北九州、佐世保、八代、熊本電波、大分、都城、鹿児島、沖縄

立地（本選参加校）



会場



(予選応募数 → 本選参加数)

地区	高等専門学校名	学科・専攻科	セッション	ワークショップ		設計競技		
				地域交流シンポジウム	ものづくりワークショップ	構造デザインコンペティション	木造住宅デザインコンペティション	複合住居デザインコンペティション
北海道	釧路工業	建築学科						
	苫小牧工業	環境都市工学科			1 → 1			
	函館工業	環境都市工学科						
東北	八戸工業	建設環境工学科						
		専攻科			1 → 1			
	秋田工業	環境都市工学科						
	宮城工業	建築学科						
	福島工業	建設環境工学科						
関東信越		専攻科	1 → 1					
	長岡工業	環境都市工学科						
	小山工業	建築学科			1 → 1		10 → 0	
		専攻科	1 → 1				3 → 2	
	群馬工業	環境都市工学科						
東海北陸	長野工業	環境都市工学科						
	木更津工業	環境都市工学科						
	岐阜工業	環境都市工学科	1 → (1)		1 → 1			
		建築学科		1 → 1			4 → 0	
	豊田工業	環境都市工学科						
近畿	建 築 学 科	1 → 1			1 → 1	50 → 2	14 → 2	
	環境都市工学科	1 → (1)			1 → 1			
	石川工業	建築学科	3 → (2)*1	3 → 0	1 → 1	52 → 2	51 → 1	
		専攻科	2 → (2)	1 → 1	1 → 1		2 → 0	
	福井工業	環境都市工学科			1 → 1			
中国	和歌山工業	環境都市工学科						
	舞鶴工業	建設システム工学科						
	明石工業	都市システム工学科						
	大阪府立工業	建設工学科	2 → (1)*1	40 → 1	1 → 1	2 → 1	40 → 0	
	神戸市立工業	都市工学科			1 → 1			
四国	近畿大学工業	建設システム工学科						
	米子工業	建築学科	1 → 1	38 → 1	1 → 1	91 → 3	45 → 2	
		専攻科					4 → 0	
	松江工業	環境建設工学科			1 → 1			
	吳工業	環境都市工学科	1 → 1					
九州沖縄	建 築 学 科	1 → (1)	46 → 1	1 → 1	2 → 1	6 → 0		
	専攻科					2 → 1		
	徳山工業	土木建築工学科		15 → 1	1 → 1	3 → 1	3 → 0	
		専攻科	1 → 1					
	高松工業	建設環境工学科			1 → 1			
上記以外	阿南工業	建設システム工学科			1 → 1			
	高知工業	建設システム工学科			1 → 1			
	大分工業	土木工学科						
		専攻科	1 → (1)					
	有明工業	建築学科						
本選参加数合計	専攻科	1 → 1			1 → 1			
	八代工業	土木建築工学科	1 → (1)	2 → 1	1 → 1	1 → 1	1 → 0	
		専攻科					1 → 0	
	都城工業	建築学科				38 → 1		
		専攻科					2 → 0	
本選参加数合計	鹿児島工業	土木工学科			1 → 1			
	上記以外							
	予選参加選抜数合計	19 → (10) 9	146 → 7	21 → 21	239 → 12	188 → 8		
		9 (10) 高専	7 高専	19 高専	8 高専	5 高専		
		5 (6) 学科	6 学科	18 学科	12 名	8 名		
		4 (2) 専攻科	1 専攻科	3 専攻科	(8学科)	(3学科・2専攻科)		

* は事例紹介のみ

本選参加校計 22高専 (20学科・8専攻科)

07 ent cond

● 1日目：平成16年9月3日（金）

時 間	全 体 ・ 総 括	地域交流シンポジウム	ものづくりワークショップ	構造デザインコンペティション	木造住宅デザインコンペティション	複合住居デザインコンペティション	時 間
12:00	学校内準備	学校内準備 会場準備	学校内準備 会場準備	学校内準備 会場準備	学校内準備 会場準備	学校内準備 会場準備	12:00
13:00							13:00
14:00	学校受付 (視聴覚室前) ↑ 13:30～14:15				（石川工業高等専門学校 視聴覚室）		14:00
		開 会 式				←14:30～15:00	
15:00		（専攻科棟演習室） 移動	（専攻科棟空間認知室）	（視聴覚室） 説明会	（大会議室） 説明会	移動	15:00
16:00		説明会 シンポジウム打合せ	組立作業打合せ 相互プレゼンテーション	移動 競技打合せ	講評打合せ	プレゼンテーション打合せ (町役場)	16:00
17:00		（福祉センター）		会場下見 （福祉センター）	会場下見 （町役場）		17:00
18:00		移動・準備	準備	移動・準備	移動・準備	移動・準備	18:00
19:00		ウェルカム・ミニパーティー （石川高専 養高館：生活協同組合） 18:30～19:30					19:00

● 2日目：平成16年9月4日（土）

時 間	全 体 ・ 総 括	地域交流シンポジウム	ものづくりワークショップ	構造デザインコンペティション	木造住宅デザインコンペティション	複合住居デザインコンペティション	時 間
07:00			↓	組立作業準備			07:00
08:00		パネルディシカッショント準備		組立作業 1 (福祉センター 駐車場)			08:00
09:00				8:00～16:30		模型・図面展示 (街役場 町民ふれあいコーナー)	09:00
10:00		パネルディスカッショント (福祉センター 大ホール)			プレゼンテーション (町役場 大会議室)	8:30～12:00	10:00
11:00		10:00～12:30			9:15～10:45	14:30～18:30	
12:00	昼 食			審査 (町役場 大会議室)		審査準備（一時搬出）	11:00
13:00	企画会議 (町役場 応接室)	ポスター展示 (福祉センターロビー)	↓	組立作業 2 (午前の続き)	競技準備	プレゼンテーション (町役場 大会議室)	12:00
14:00		10:00～17:30			模型・図面展示 (街役場 町民ふれあいコーナー)	12:45～14:15	13:00
15:00					競技 (福祉センター 大ホール)	審査 (町役場 大会議室)	14:00
16:00	デザコン実行委員会 (町役場 大会議室)			14:00～16:20		表彰準備	15:00
17:00			↓	審査	審査	妹島氏講演会 (福祉センター 大ホール)	16:00
					閉会式 (津幡町福祉センター 大ホール)	↑ 16:30～17:15	17:00
18:00				17:30～18:30			18:00
					（学生同士の意見交換、希望者は灯ろう流しへ移動）		
19:00							19:00
					津幡町行事「灯ろう流し」見学（希望者）		
20:00	情報交換会						20:00

● 3日目：平成16年9月5日（日）

時 間	全 体 ・ 総 括	地域交流シンポジウム	ものづくりワークショップ	構造デザインコンペティション	木造住宅デザインコンペティション	複合住居デザインコンペティション	時 間
08:00			↓	シンポジウム準備	まちなかにベンチ配置	展示ブース準備	展示ブース準備
09:00	<雨天により中止>	まちなかシンポジウム (弘願寺)		<雨天により中止>			08:00
10:00	どまんなかフェスタ 〔津幡町商工会〕	9:00～11:00		作品ベンチによる スタンブラー 〔市民審査〕			09:00
11:00	(おやど商店街通り)			(おやど商店街通り)			10:00
12:00	石川高専吹奏楽部			10:00～13:00			11:00
13:00	石川高専紀友祭委/ゲーム 町長挨拶・表彰			作品ベンチ町民表彰			12:00
14:00							13:00
15:00	石川高専紀友祭委/スタンツ 商工会長挨拶・表彰			（審査時間重複） 石川高専ベンチ町民表彰			14:00
16:00							15:00
17:00				↓	作品ベンチ搬出		16:00

講師 妹島 和世
慶應義塾大学理工学部・客員教授 建築家



「最新作について」

妹島 和世（せじま かずよ） プロフィール

1956 茨城県に生まれる
1981 日本女子大学大学院 修了
1981 伊東豊雄建築設計事務所入所
1987 妹島和世建築設計事務所設立
1989 第6回吉岡賞
1992 新日本建築家協会新人賞'92
1992 商環境デザイン賞大賞
1994 '94商環境デザイン賞大賞
1995 アーキテクチャ・オブ・ザ・イヤー'94
シドニー現代美術館国際設計競技 最優秀賞

1995 西沢立衛 氏とSANAA設立
1996 第13回吉岡賞
1998 日本建築学会賞
1999 「サレルノ市旧市街再生計画」国際設計競技1等賞(SANAA)
「スタッドシアター」国際設計競技1等賞(SANAA)
2000 Erich Schelling 建築賞
2002 Arnold W. Brunner記念建築賞
Vincenzo Scamozzi建築賞
2004 ヴェニスピエンナーレ第9回国際建築展 金獅子賞
現在 慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科 客員教授

講演要旨

複合住居デザインコンペティション・セッションの審査員 妹島和世 先生による、近年のプロジェクト5作品について作品解説が行われました。東京郊外に計画された5人家族のための小住宅、スペインのバレンシア現代美術館の増改築計画案、アメリカのデトロイト近郊トレドに計画中のガラスのパビリオン計画、群馬県の鬼石町に計画された体育館とコミュニティホールを併設する多目的ホール計画、そして金沢21世紀美術館について、作品のコンセプトをはじめとして計画、構法、運営プログラムに至る幅広い視点から解説が行われました。

東京世田谷に計画された「梅林の家」では、30坪という狭小敷地に祖母、両親、子供2人の5人家族が住むための空間についての提案を中心に解説されました。施主によるワン・フロア型の居住空間希望に対して、敢えて小さな居室を多数用意することにより個性的な場所を楽しむ空間の提案について解説されました。

「バレンシア近代美術館増改築プロジェクト」では、既存2万m²の施設全体に新たに1万m²の空間を「スキン」と呼ぶ半透明な皮膜により覆い、既存美術館のセットバック空間と屋上空間を大きな広場として開放する提案について説明されました。スキンは、太陽光や風を適度に調整することで、夏は外気温より少し涼しく冬は少し暖かい、木陰のような空間をつくると説明がありました。

アメリカの「トレド美術館ガラスセンター」では、ガラスに関する企画展示、コレクション、ホットショップと呼ばれるガラス製作体験が可能な工房を含む三つの機能が複合したガラス・パビリオンの計画について説明がされました。パビリオン全体はガラスの壁面で自由に区画された部屋の集合体となっており、来館者が館内で催される様々なアクティビティをガラス壁面越しに透かし見ながら、透明と不透明の連続する空間の中を楽しむ提案について解説されました。

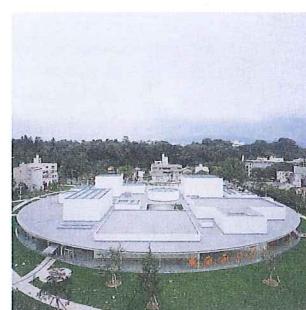
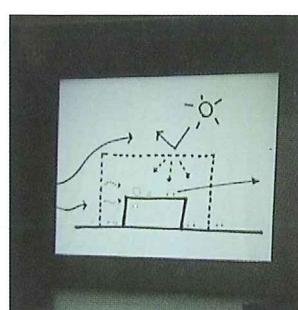
また群馬県鬼石町多目的ホール「（仮称）おにし屋内広場」においては、体育館と地域のコミュニティホールの複合施設設計案であり、体育館を半層分地下に埋めて全体のヴォリュームを低く抑えるとともに地上部分をガラスにより区画し、外からでも地域の活動が透かし見えるような施設設計について説明がありました。施設そのものはバラバラな配置にもかかわらず、曖昧な形でひとつにまとまっている計画として説明がありました。

最後に、石川県の「金沢21世紀美術館」では、コンセプト、ゾーニング、ロケーションそして美術展覧会の運営など多岐にわたる解説が行われました。交流館は子供スタジオ、カフェ、ライブラリー、貸しホールなど市民の活動をサポートする機能を有しています。一方、美術館は一般的な間仕切りにより多様な企画展示に対応する方法ではなく、自立した個々の展示スペースの組み合わせにより展覧会の性格を浮かび上がらせるという運用方法を採用した経緯について詳細な説明がありました。また幼稚園・小学校の跡地ということもあり、かつて植樹された記念樹をそのまま保存し活用するなどの外構計画上の工夫についても解説が行われました。

09

spec
lect

特別講



謝辞

妹島先生には、ご多忙の中、海外出張の日程を変更してまで、第1回デザコンの「複合住居デザインコンペティション審査員長」並びに「特別講演講師」をご快諾頂き、厚くお礼申し上げます。

また、この行事の直後に、ヴェニスピエンナーレ第9回国際建築展において、石川高専の地元に建てられた「金沢21世紀美術館」等で、西沢立衛先生と、展示部門最優秀賞の金獅子賞を受賞されたことも嬉しい報せでした。お慶び申し上げます。

平成16年9月4日 本選

第2会場：津幡町役場（津幡町行政センター・津幡町福祉センター）

至 第1会場（石川高専）
至 第3会場（弘願寺）

●津幡町福祉センター

- ①地域交流シンポジウムセッション
- ①構造デザインコンペティションセッション
- ①妹島和世 特別講演
- ①閉会式
- ②パネル展示（地域交流シンポジウム）
- ③本部

●正面駐車場

- ④ものづくりワークショップセッション

●津幡町行政センター

- 1 F (入口+町民ふれいあいコーナー)
- ⑤総合受付
- ⑥作品展示場
(木造住宅・複合住居デザインコンペティション)
- 2 F (大会議室)
- ⑦木造住宅デザインコンペティションセッション
- ⑦複合住居デザインコンペティションセッション



津幡町役場（津幡町行政センター・津幡町福祉センター）

地域交換
シンポジウム
セッション

sympc

地域交流シンポジウムセッション

ワークショップ部門

セッションの目的

高等専門学校の学生の発表、情報交換の場とします。全国の高等専門学校からの参加を広く募集します。

テーマ

「まちづくりへのチャレンジ」

これまで学校の中だけで行われてきた教育や学生活動も、近年では地域のニーズを取り上げたテーマや、地域の中に活動の場を移した取り組みなどが各地で行われ、地域社会に高等専門学校の存在が認められ始めています。地域交流シンポジウムは、各校で行われているそうしたユニークな地域共同事業や公開事業等のうち、学生が主体的に取り組んだものを紹介することで、高等専門学校における地域共同事業やまちづくり支援活動、ものづくり等について意見やアイデアを交換する場とし、地域に根差した専攻および高専生のありかたを考えるきっかけとなればと考えています。

地域交流シンポジウムは以下の2段階から構成されています。

●ポスター展示

各校における地域共同事業・まちづくり支援活動、公開事業、ものづくり教育等において学生が主体となった取り組みを紹介するポスターを制作、応募することで、デザコン会場でポスターセッション形式にて、参加者たちと自由な意見交換・情報交換を行います。

●パネルディスカッション

「まちづくりへのチャレンジ」をテーマとするパネルディスカッションを行います。応募ポスターの中から審査員長により数を選考します。選考された事例の代表学生は、活動内容等の紹介と、これから取り組み方等についてのアイデア・意見交換を行うパネラーとして起用します。

応募先

事務局 : 全国高等専門学校デザインコンペティション実行委員会事務局
連絡先 : 〒929-0392 石川県河北郡津幡町北中条タ1 石川工業高等専門学校 学生課学生係
e-mail : descom1@ishikawa-nct.ac.jp

応募資格

応募時点で高等専門学校に在籍する学生で、専攻科生等を含みます。

応募方法

テーマに関連した地域共同活動、まちづくり支援活動、公開事業等のうち、各校の特性を活かしたユニークな取り組みや、学生が主体となって取り組んだ内容のもの等を選び、学生の関わり方・当日の様子・成果などについてレポートしたポスターを作成するものとします。

用紙 : A2判（ヨコ使い）2枚（パネル不可）

内容 : 活動の内容、手法、学生の関わり方、当日の様子、成果など。写真等必要と思われる図面及び説明文。

提出方法 : 用紙裏面右上に所定の用紙に必要事項を記入の上貼り付け、期限までに事務局に持参（17時迄）または郵送（宅配便可）

審査員及び審査方法

審査員長 : 桜井康宏（福井大学大学院・教授）によりユニークで先進的な取り組みと思われる活動を数点選考し通知します。選考された事例の代表者は、シンポジウム当日、パネルディスカッションのパネラーとして発表・ディスカッションに参加します。

日程

募集要項・配布 : 平成16年4月19日(月)

質疑応答期間 : 平成16年4月19日(月)～5月7日(金)

質疑回答の公表・配布 : 平成16年5月14日(金)

ポスター締め切り : 平成16年7月13日(火)

本選 : 平成16年7月下旬

パネルディスカッション発表用梗概原稿締め切り : 平成16年8月下旬

その他

ポスター審査により、パネルディスカッションのパネラーに決定した事例の代表者は、8月下旬までに以下のものを準備・送付して下さい。

梗概 : パネルディスカッション用梗概集を作るための原稿（A4用紙2～6枚程度）。

提出方法 : 梗概原稿はA4用紙にプリントアウトしたものとデータ（FDまたはCD-Rに保存したもの）を期限までに事務局に持参または郵送（宅配便可）。

賞

優秀賞（石川高専校長賞）

7点

賞状 及び 副賞

佳作

若干数

*審査の結果、奨励賞を2点追加選出

1. 審査方法

応募されたポスターを、審査員長の審査により、優秀賞数点を選考します。選考された代表学生は、デザインコンペティション当日、「まちづくりへのチャレンジ」をテーマとする地域交流シンポジウムにおいて、パネルディスカッション形式にて活動内容等の紹介と、これから取り組み方等についてのアイデア・意見交換を行うパネラーとして起用します。

審査基準

審査の基準として、①学生が主体的に取り組んだ取り組みであること、②地域のニーズを取り上げたテーマであること、③テーマや取り組み手法、組織などがユニークかつ先進的であること、を評価項目とします。

2. 審査員

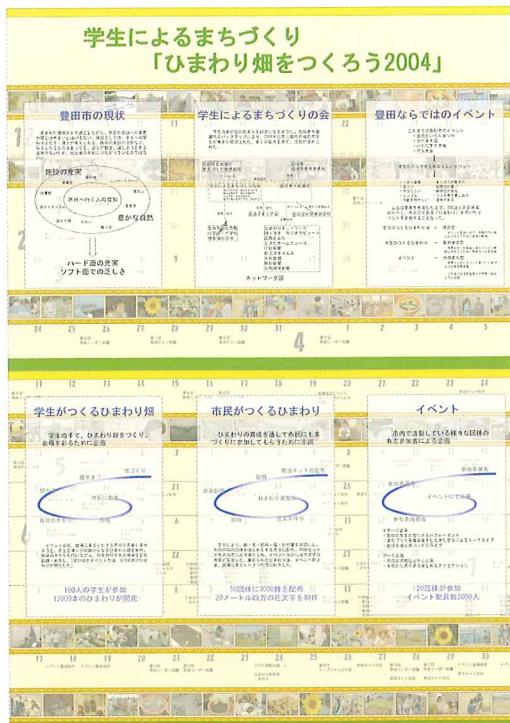
審査員長 桜井康宏 福井大学大学院 教授

3. 審査記録

候No	高専名	学科	ポスタータイトル	学生主体の取り組み	地域のニーズ	ユニークさ・先進性	合計得点	結果
10	豊田	建築	「ひまわり畑をつくろう2003」～豊田市域の大学生によるまちづくり事業～	10	7	8	25	優秀賞
16	徳山	専攻科	徳山高専夢広場	7	9	8	24	優秀賞
17	有明	専攻科	八女の力	7	9	8	24	優秀賞
02	小山	専攻科	わらの家	10	5	9	24	優秀賞
01	福島	専攻科	まちを探索すると見えてくるユニバーサルデザイン	7	8	7	22	優秀賞
13	米子	建築	再生寫眞	8	6	8	22	優秀賞
14	吳	環境都市工	高齢者と学生によるまちづくりin吳	6	9	7	22	優秀賞
06	石川	建築	シビックキャンパス・プロジェクト	5	8	7	20	奨励賞
12	明石	建築	加古川本町まちづくりなつかしい町は元気になる!!	6	8	6	20	奨励賞
09	岐阜	環境都市工	子供のための公園づくり	6	6	6	18	佳作
11	明石	建築	アートポートステーション西元町	8	6	4	18	佳作
18	八代	土木建築工	出町公園ワークショップ	6	7	5	18	佳作
05	石川	建築	里山の暮らし体験塾	6	5	6	17	佳作
15	吳	建築	高専祭作品共同制作企画	8	5	4	17	佳作
03	石川	環境都市工	北中条試験小流域における地下水の現地調査	5	6	5	16	佳作
04	石川	建築	建築ワークショップ2003	5	5	6	16	佳作
07	石川	専攻科	酪農倉庫から居住施設へ	5	6	5	16	佳作
08	石川	専攻科	旭日地区活性化計画	5	7	4	16	佳作
19	大分	専攻科	市民参加型歩道デザインについて — 別大国道を事例として —	5	6	5	16	佳作

ゲスト作品（教員による紹介）

石川高専 建築学科 おかしなお菓子な家づくりプロジェクト
高松高専 建設環境工学科 建設環境工学科における地域産官学連携の取り組み



「ひまわり畑をつくろう2004」
豊田工業高等専門学校 建築学科
5年 萩 昌幸



徳山高専夢広
徳山工業高等専門学校 専攻
2年 福岡



優秀賞作品 1



事例紹介

石川高専「シビックキャンパス・プロジェクト」
明石高専「加古川本町まちづくり なつかしい町は元気になる！！」

地域交流
シンポジウム
セッション

発表

小山高専「わらの家」
大橋文彦、河田昌隆、坂本英己、櫻井隆行、関原ひかり、永島隆行

豊田高専「ひまわり畑をつくろう2004」
鳴岡渚、安田素美、萩昌幸

徳山高専「徳山高専夢広場」
福岡光、深江忍

福島高専「まちを探索すると見えてくるユニバーサルデザイン」
西成田由、木下康之、小林佑季子

米子高専「再生寫眞」
大西元氣、角奈津子、池本早織、赤木亮介、荒木雄一、長井宏和

有明高専「八女の力」
入江碧

吳高専「高齢者と学生によるまちづくりin吳」
山田宏、渡辺まゆ、藤原通晴、道元佑美、御畠尚子、吉川寛子、和田美玲

パネリスト

審査員長	桜井 康宏	福井大学大学院・教授
コメントーター	照田 繁隆	石川県土木部・参事
	浅野 哲洋	社団法人 金沢青年会議所 地域創造室・室長
高専校長	天野 徹	徳山工業高等専門学校・校長
	亀井 伸雄	都城工業高等専門学校・校長

ひまわり畑をつくろう2004

豊田工業高等専門学校 建築学科 5年 萩昌幸 優秀

わたしたちの生活する豊田市は、自然に恵まれ、かつハード面にも恵まれながらも、市民の豊田への愛着や関心は大きいとは思えません。このようなハード面の充実に対するソフト面の不足は豊田だけではなく、いたるところに見受けられることではないと思います。豊田市民が豊田全体を誇れるよう、豊田市にはまちづくりについて新たな考えと流れが必要とされる時がきています。昨年の12月、豊田青年会議所より学生主体のまちづくり事業として学生の発想からイベントを作ろうと、学生によるまちづくりの会の発足が提案されました。学生は豊田市域の大学から参加し、豊田青年会議所の支えで会を発足、まちづくりとなるイベントの計画に取り組むこととなりました。会発足以降は学生と豊田青年会議所で話し合いを重ねました。

豊田青年会議所からいくつか方向性のポイントを受け、これに沿ったイベント案を具体的に考えていました。結果、豊田市花であるひまわりを利用したイベントが最終案としてあがりました。豊田市の中心市街地に市民が育てたひまわりを集め、人を呼び込もうというものです。つまり、わたしたちはまちづくりの手法として、何かを提供することによって楽しんでもらうという供型ではなく、市民が参加し、共にイベントを作ることで自分がまちづくりをしているという意識を持ってもらうという参加型スタイルが重要なのではないかと考えたのです。

そこで、今回のイベントに関しては提供型・事前参加型・当日参加型の3つを柱として企画していくこととなりました。まず提供型としてイベント会場に学生がひまわりを育て、会場に来る方の目を楽しませようというものを企画しました。次に、事前参加型として市民の方にひまわりを育ててもらい、そのひまわりをイベントに用いるというものを企画しました。そして、当日参加型としてこれら2つの企画の完成を祝い、市民の方のパフォーマンスにより盛り上げようというものを企画しました。

提供型のひまわり畑についてですが、豊田スタジアムより提供していただいた芝生広場に計12,000本、プランターにすると12,000鉢を学生が育てることとなりました。多いときには100人の学生が集まり、手入れをしました。その結果、7月31日には12,000本のひまわり畑が完成しました。これは今回のイベントの中でもっとも市民の方に協力を得たものです。市民の方に手軽にひまわりを作つてもうたために、育成キットを製作し配布しました。これには、ひまわりを育てることでイベントに参加してもらいたい、コミュニケーションをはかるとともに、まちづくりの意識を高めてもらおうという狙いがありました。そして7月31日のイベント当日には多くの方がひまわりを持って会場にきてくださり、結果として、縦横20メートルを超える大きな豊田市のマークを作ることができました。

何しろ、それまで面識のなかった学生と青年会議所の人たちとで何かを作ろうという取り組みは、豊田市では他に類のないことです。そして、私たちの成功させたいという強い気持ちが、活動していた半年間の、そして炎天下での作業の原動力なってきたと思います。

今回、まちに良いこと楽しいことを考え、まちづくりに参加したことは、私たちが豊田というまちを好きになる良いきっかけになったと思います。また、このイベントに様々な形で参加した市民の方にも印象深いものになったと思います。何より、市民に供する側としての体験だけでなく、私たち自身が本会を通じ、市内の大学生との繋がりを持つことができたことが大きな体験でした。わたしたち学生によるまちづくりの会は、今年の冬に豊田市駅前のイルミネーションの企画、来年の夏にはさらに大きな祭りを開いており、現在すでに活動を始めています。

- Q : 経費はどうになっているのですか？
A : 予算は主に豊田青年会議所からです。他に、豊田スタジアムなど企業協賛によっています。
Q : ひまわりを用いることでどんなことを提案しようとしたのですか？
A : 豊田市の花がひまわりなので、市民の人にひまわりについてもっと知ってもらって親しんでもらおうということが狙いであります。そして、学生がひまわりを作ることで、まちづくりについて考えてもらおうきっかけを作ろうということも考えています。
意見 : 豊田市はまちづくりについて、ハード以外のソフトの部分を学生に期待しているのかもしれませんですね。今後学生といっ在が、まちづくりや地域との交流にどのように関わっていくのかが楽しみですね。
Q : 今回発表していただいた活動をやってみてどんなことを感じましたか？ またこれからやっていく上で、何が必要だと思います
A : 自分にとって最も大きい体験は大学生たちとくさんの時間を過ごせたという事です。青年会議所、学生、高齢者など異なる立場の人といっしょに何かをやることでお互いをカバーし合い、ネットワークを使っていくことでまちづくりを浸透していくことができるということを実感しました。みんなが協力する力が大事ではないのかなと思いました。

record#1

16

記録 1

徳山高専夢広場は、徳山高専の教育・研究・文化活動に関する情報を発信し、併せて中心市街地の活性化に貢献するためのスペースです。本校でのこのような取り組みは、第1回目のチャレンジショップを引き継ぎ、現在の徳山高専夢広場で第2回目となります。この夢広場には次の役割があります。つまり、地域の方に徳山高専の中身・成果を知ってもらいたい学校の評価を知つてもらう、そして評価し・評価されることによって地域の方や学生自身の、高専や地域に対するお互いの興味を高めるというものです。

まず、第1期の夢広場は学生が主体的に計画・施工をし、2002年7月26日中心市街地の空き店舗となっていた旧SATY2階の一角に「チャレンジショップ高専夢広場」として完成しました。その設計コンセプトは、四角い箱を使用する者が自由に設置してその空間を使うというものです。これを組み合わせて様々な空間を構成していきます。運営する学生と技術指導の地元企業の方と綿密に打ち合わせをしていました。第2回目の今回は空き店舗1件を丸ごと使っての夢広場となっています。実際の運営については第2期の広場運営委員会を今年の1月に発足し、全委員18名のうち学生委員を9名採用し、本科の2年生から専攻科の2年生までを取り入れて週1回ほど会議を行い、様々な意見・アイディア・企画練り合わせなどを行っています。

この高専夢広場で地域交流というものを考えていくときに、地域交流の意義というものはどういうものかというのを3つの立場から考えてみました。まず「個人」ですが、この個人というのは本校学生や夢広場で活動する人たちのことです。この人たちにとって、夢広場での活動は、まず経験を積める、つまり情報を蓄積できるということがあります。次に人との繋がりを持てるというのがあって、これがネットワークの構築となっています。次にくる立場としては「地域」、地域住民の方たちでお客ということになります。そして最後の立場として「組織」、これは徳山高専など学校、地元の企業、商店などのことで、地域住民へのPR効果を狙える情報発信源として、地域の人たちに対しての宣伝になります。地域住民の思考・ニーズを探るということも、活動を通して少しなりとも触れることができるのではないかでしょう。

第1期の夢広場で行われた活動のひとつとして、建築設計演習という土木建築科の授業の課題発表会を行いました。約2週間ほどの期間、会場に作品と投票箱を展示し、見に来てくれた人々や発表会に参加した人たちに投票してもらったものがそのまま学生の評価に繋がります。この企画・事業の目的は、第1に現実的な問題への挑戦、第2に実際の利用者の評価を得るというところにあります。また、この企画は学生が共同で設計するというものであり、学生がコラボレーションを体験するというのも目的のひとつでした。しかし、商店街に対しては、いろいろ宣伝したのですが、商店街に働いている人たちの参加意識まで高めるには至らなかったのではないかと思います。

現在、第2期の夢広場における活動として、毎週金曜日の夕方5時半から1時間ほど、英語でフリートークをする場を設けています。学生や一般を問わず誰でも参加できますが、そこでは英語しか使ってはいけないというルールをつくり、みんなで英語に親しみながら英語力、英語コミュニケーション能力を高め、さらには異文化交流を深めるために参加しています。

現在の問題としては、宣伝が不足していることが挙げられ、広報活動の強化が目下の課題となっています。今後この夢広場が、各高専間のネットワーク拠点としても活用されるようになっていくことを願っています。

Q：日頃の管理運営はどのようにしているのですか？ 経費はどのようにになっているのですか？

A：第1期は学校内で人員を確保しました。第2期の今回は学外の人に専任をお願いしています。予算はかなりの部分を地域の方々や市と商工会が負担しています。そのうち、運営費とイベント経費を高専が負担しています。また、イベントごとに地域の企業や多様な競争的資金などを導入しています。

意見：地域に積極的に関わろうというところがすばらしいですね。産官学という3つの歯車がありますが、どこかで回り始めた1つの歯車が2つになり、3つになりて大きく発展していくことが大切なですね。

Q：今回発表していただいた活動をやってみてどんなことを感じましたか？ またこれからやっていく上で、何が必要だと思いますか？
A：企画では学生それぞれに役割分担があったのですが、ひとりひとりが役割を持って動けたと思います。今回の活動を通してみんなとの交流がさらに深まったことが一番の経験でした。また、企業の人から意見をいただけたことが良い体験でした。外部からの評価をもらうことで、ものづくりは自己満足ではないということがよく分かりました。

八女の力

有明工業高等専門学校 専攻科 1年 入江 碧 優秀賞

活動の中で、地域に関わることで自分たちが何か新しい発見をしたり、自分自身が変わっていきました。八女にはそういう不思議な力があるなあと、そう感じた1年間について発表します。

「まちぐみ」というのは「まちづくりについて考える組合」の略称で、有明高専都市デザイン研究室が学外活動するときに使う名称です。研究室という単位ではなく、個人の集合という単位での活動として現地に関わりたいという思いからこの名称で活動しています。

八女市は福岡県の南部に位置して、博多からは大体40kmの地点にあります。人口は4万人で、大体横ばいの状態です。そして活動の場である八女福島地区は17世紀に城下町として形成されました。居蔵と呼ばれる建物が中心となって町並みを形成しており、2年前に重要伝統的建築物群保存地区に選定されています。地元の住民によって町並み保存が始まり、多数のまちづくり団体が行政と連携しながら活動しています。

私たちが福島に出会ったのは5月に行ったフィールドワークでした。フィールドワークでは手すき和紙づくり体験とか町歩き、ヒアリング調査、住民のキーパーソンである中島氏に対してヒアリング調査などを行いました。そのフィールドワークのまとめ作業の中で、指導教員の「教えてもらったらお礼をすること」という言葉から現地に関わる作法を学びました。

その成果物というのが「八女すっぱだかMAP」という地図です。そして活動の転機となった「タカラノチズ2003」という企画、これによって住民からの活動の場を提供していただきましたことをきっかけに、私たちの活動内容はヒアリングなどの調査志向から実践志向へと変わりました。また、その活動の準備から実施、まとめ方に至るまでゼミ生が主体となって行ったことにより、これまでの指導教員が主導になっている体制からゼミ生主体の体制へ大きく変化しました。

「タカラノチズ2003」という企画を昨年の9月に行いました。これは八女の祭の中で、来場者の方に八女の町への思いを聞き取りし、それを皆の空間認識を集めた地図、「タカラノチズ2003」として作成しました。これは町への思いを集めて町の輪を育てようという企画でした。まちづくり活動を行っている人もそうでない人も、皆が一緒に巨大なタカラノチズをつくり、その作成の過程で八女福島の町についていろいろ話し合ったりしてもらおうのが狙いでいた。その外の企画として、ベンガラ塗り体験を行いました。これは自分たちの企画ではなかったのですが、八女にある八女市横町町家交流館というところが痛んでいたので壁や梁、柱、建具の隅々までベンガラ塗りを行いました。

活動を通じて、八女福島から建物のことやまちづくりのことについてももちろん学んだのですが、何よりも人の繋がりの大切さと、その繋がりができたことによる喜びを学べたことが一番勉強になったと思います。これは、まだ学生である自分たちに対して、真剣に耳を傾けてくれる八女の人们だったからこそ学べたのではないかと思います。これからも八女福島で活動していくますが、この活動がいつの日か、八女に暮らす人達の描く八女に近づくための一部になれたらと思っています。

Q：次に何をやっていこうと考えていますか？

A：「たかの地図」を作ることで、さらにいろんな人の空間認識を集めることをやっていきますが、回答してくれた人が自身がその行為を通して、まちについて考えるきっかけとなるような、そんなきっかけ作り続けていきたいと思っています。

Q：ヒアリング調査の中で、現地以外の人の意見にはどんなものがありましたか？

A：八女の好きな所として、白壁の町並みなど空間に関する意見が聞かれました。嫌いな所としては、近代化によって生じたひずみのようなものに対して指摘がありました。

Q：今回発表していただいた活動をやってみてどんなことを感じましたか？ またこれからやっていく上で、何が必要だと思いますか？

A：建築学科に入って、これまでにはものづくりを学んできましたが、まちづくりに関わったことで、ものより先に人の繋がりを作ることが大切だということがわかりました。

わらの家とは、わらを圧縮させたブロック（ストローベイル）を、レンガのように一つ一つ積み重ねて壁を作り、そこに屋はるという建築工法によって作られた家です。少し原始的な感じがしますが、この工法はわらを圧縮させる技術が発展したこよってできるようになったもので、まだ100年も経っていない新しい技術なのです。ガラスや鉄などの近未来的な素材で作る都市とは違った、ひとつのエコの未来形としての住宅を、地域の人や中学生に展示できたらと思い、文化祭での発表を目指企画に入りました。外国の雑誌でストローベイルハウスの写真を見て、そのかわった形態や建築工法に興味を持ったのをきっかけとして、みんなでディスカッションしながら作ることを決めました。栃木県益子町には日本で最初のストローベイルハウスがています。そこに見学に行き、設計者の武井貴志氏にもお話を伺うなどして計画を進めていきました。

まずメンバーで図面を作成して学校側に提出し、その後は地域に出て材料の収集を始めました。稻わらや麦わらを作っている人が蓄えとして持っているものを譲り受けるために農家の人たちと交渉した結果、たくさんのわらを譲ってもらえることになりました。ストローベイルのわらの上に土を塗り、土壁を作っていくのに使う粘土質の土や、屋根材として使う竹などをす地域の人たちから分けてもらいました。

文化祭発表の1ヶ月前から作業に取り掛かりました。仮設展示なので基礎はコンクリートブロックで作っています。ストローベイルはトラックで運びました。1年生から5年生まですべてが関わってペイルの積み上げ作業をやったのですが、これは結構い作業でした。慣れない材料ばかりでしたので、四苦八苦して積んだ結果デコボコに積み上がったのですが、結果として味わいある壁になりました。独立している壁があるのですが、独立壁だと倒れやすいためペーゴラを支えています。

わらの壁が積み終わった後に、小舞壁に土壁を塗るような感じで泥団子を作っていくのですが、これは全部人力で行いました。最近ではミキサーなどで搔き混ぜるのが普通ですが、ミキサーが土の粘着力によって壊れそうなので、20人ほどで毎日夜までと土練り作業を続け、泥だらけになりながら泥団子を作りました。この泥団子をわらにぶつけながら泥をしみ込ませていきまと乾燥するまで1週間ほどかかるので、ビニールシートで被ったりしながら土壁が乾くのを待ちます。土壁が乾いた後には仕上げ漆喰を塗っていきます。漆喰を塗ったあとに、内側に木の棒組みを作り、屋根をかけていきます。屋根は竹を半分に割りして互に重ねていて片流れの屋根にしました。内部は4畳半で真ん中に団炉裏がある、見た目が茶室のような空間になっています。内壁は漆喰仕上げを行わず、土の温もりが伝わるように土壁をそのまま残しました。基礎のコンクリートブロックを隠すためでコーティングしています。

文化祭当日は小中学生や大人の老人の方など本当にたくさん的人が見に来てくれました。わらブロックと、外に土を塗ったブロック、漆喰を塗ったわらブロックを周囲にたくさん置いて創作過程を一つ一つ説明しました。家の中もお客さんが入れるようになっていて、みんなで座りながら、雑談するような形でプレゼンテーションを行いました。子供たちにもわかりやすいよう一人一人に説明をしていました。

これは半年間学校に展示していたのですが、この場所に守衛室が建つということで壊さざるを得なくなり、3月に解体したですが、解体の最中にわらの中からねずみがたくさん出てきました。寒い冬をねずみたちがこの中で過ごしたということで、保も居住性も良い建物だったのだと思いました。

- Q：製作過程での農家の方との交流があったと思いますが、どんな反応が返っていましたか？
 A：文化祭ではただ作品に感心してくれたという感じでしたが、わらを貰いに行った時、農家の方との話の中で、藁ブロックベンチや子供のおもちゃなどユニバーサルな道具として使えるのではないかという話をしました。
 Q：これは外壁材なのか、それとも構造材として考えればよいのでしょうか？ 国土交通省の特認などで建設材料としての性が今後広がるのでしょうか教えてください。
 A：日本では外壁材ですね。軸組みがないと構造材としては認められないようです。
 Q：今回発表していただいた活動をやってみてどんなことを感じましたか？ またこれからやっていく上で、何が必要だと思います？
 A：他の皆さんの活動が参加型なのにに対し、自分たちの活動は学生主体で制作し、展示というかたちで地域の方と関わります魅力あるひとつの建物を建てることで周りの人を巻き込めるということを、建築の可能性として強く感じました。

まちを探索すると見えてくるユニバーサルデザイン

福島工業高等専門学校 専攻科 1年 西成田 由 優秀

ユニバーサルデザイン（以下「UD」）とは皆さんもご存知のように、誰にとっても優しいデザインの考え方です。既に多くの人に知られているバリアフリーとは、障害者のバリアを除くという障害者に対するデザインですが、UDとは誰にでも優しいデザインのことであり、具体的には身体の能力、性別、年齢、国籍、人種など全てをカバーしたデザインです。近年、UDは様々なにおいて求められているものの、その意味について知っている人がまだ少ないのが現状です。

いわき市でもUDに取り組み始めていますが、その考え方の普及や人材育成の強化が課題となっています。UDを推進し、住まい生活環境を形成していくために、利用者主体別に見たUDの課題の評価・制御を行い、今後のまちづくりのあり方を模索していく手法としてはまず、まち歩きの実施を行い、他者の目線でまち中を観察・体験します。第2にワークショップを行って感想意見の交換、ディスカッションを行い、環境点検マップを作成します。学生はまち歩きでは案内補助、ワークショップでは進行を担当しました。実際にまち歩きの実施を行うにあたり、利用したい対象地域を指定し、グループごとに利用主体別にまち中を自由に移動し、商店に入って商品を手にとって買い物をしたり、トイレに入ったりなど、様々な日頃まち中で行われる行動を取り、それらを観察・体験しました。いわき市本町通りはいわき市の中心街に位置し、コミュニティー道路として整備されています。両サイドに小売店が並んでいて、日頃は登下校の中高生や買い物客など多くの人が賑わっています。まち歩きで用いる者「の目線」として次のグループを設定しました。電動三輪車、高齢者疑似体験者、乳幼児同伴者、歩行者、自転車、車椅子の1つです。1つのグループに5～6人を割り当て、その中で学生1人が進行しながらまち歩きを行いました。体験地区内には甲斐ビルがあり、その周辺は美化整備されています。歩道については、コミュニティー道路として整備はされていましたが、非常に狭く、道路脇に雨水受けなど障害物があって、車椅子や電動三輪車、乳幼児同伴などには横断することが困難となっています。また、アクセス部分の問題としては、段差や入り口の大きさに問題があり、車椅子では入れないところがあります。特に段差問題は、車椅子だけでなく高齢者などにも問題となっています。建物内の問題としては、通常簡単に手の届く商品や非常電話エレベーターのボタンが、車椅子では届かないなどの問題点があります。

まち歩き終了後、ワークショップを行い、学生が主体となって自由に意見交換を行いました。グループごとに抽出された意見をまとめ、環境点検マップとして表し、利用主体別に色分けして表示しました。次に全体会を設け、班ごとに作成した環境点検マップとまち歩き時に撮影した写真を用いて発表会を行い、グループごとに出された環境点検マップのプラス評価・マイナス評価をまとめました。プラス評価として、通りが景観がいいです。通りはコミュニティー道路として整備されているために、通りから評価されたものと思われます。マイナス評価でも通りが全主体に支持されています。これはハード面からではなく、コミュニティー道路として整備されているにもかかわらず、放置自転車や立て看板など、通行を妨げる障害物があるという点でマイナス評価にされたのであります。これらソフト面を解決することが重要です。通り沿いの店舗がほとんどマイナス評価で挙がっていましたが、これは、ほとんどの店舗で入り口に段差があるなど、あまり車椅子や電動三輪車に優しいまちではなかったことが原因であると思います。

最後に利用主体別課題整理を行った結果、評価できる点、評価できない点が混在していることが分かりました。今後の課題としては、双方の調整付けにいかに取り組んでいくかが重要であると思われます。さらに、今回のワークショップを通して、者の理解の深まり、考え方、意見の広がりを見ることができました。今後はこの姿勢をどのようにしてまちづくりの中に取り組んでいくかが重要であると思います。

- Q：今後の発展として、次が必要だと考えていますか？
 A：現在、県がUDの推進を進めていて、地域の人たちにまずUDとはどういうものかを知ってもらってから、よりよいまちづくりをしていくという人材養成講座を進めています。これらを通して住民の意識が変わることが必要だと思う。
 Q：今回発表していただいた活動をやってみてどんなことを感じましたか？ またこれからやっていく上で、何が必要だと思います？
 A：日頃、人々が考えていることを社会に向けて広く言える場所があまりないと思いますが、今回いろいろな立場の人が意見のを聞いて、普段皆がまちに対して考えていることを知ることができました。今まで私はまちに対して全然目を向いていませんでしたが、今回の活動でまちを見る目が変わりました。まちに対する理解が深まってよかったです。

私たちはこの活動を通して、住民の皆さんにまちづくりについて、今まで気が付かなかった新たな問題点や、あるいは何か残したい大切なものを発見してほしいと考えています。

米子市旧加茂川地区、尾高町地区、寺町地区の3つの地区は歴史が古く、昔からの佇まいが残っている面白い地区です。この地区は、江戸時代に城下町の一角として形成され、海運業が栄えました。商都米子の中心的地区として発展していきましたが、昭和に入るとそれは徐々に衰退し始めています。まず駅前に中心地が移動したことにより、商業地としての基盤が弱体化していきました。しかし古くからの町の佇まいは残っていました。そして昭和30年代、高度経済成長により商業地の衰退、それによって人口の減少、高齢化が進み、空き家・空き地が増加していきます。それにより、町の姿が変容し、崩れ始めています。これを契機として、景観に対する取り組みが始まっています。平成16年に「街なみ環境整備事業」がスタートするなど、国の事業による整備計画が進む中、私たちはこれと平行して、修景のための町並み像を模索するために町並みの写真撮影と検討作業を始めました。

私たちははじめに町歩きマップを作成しました。町歩きマップとは住民の方々の関心が特に高かった地域の写真を撮ってマップにしたもので、1番の永田茶店は古い様式を残したお店です。2番の是樂菴舎は長屋を改造したギャラリーになっています。3番は岡本一銭屋側から永田茶店を見た通りの様子。4番は民家に入らせてもらったときの様子。5番は岡本一銭屋で、この地域の特徴的な建物ですが、側壁が町並みにそぐわないのが問題点となっています。6番、7番、8番はアパート、空き地、駐車場です。ここには古い町並みとの連続性・関係性が途絶えてしまっているところで、これも問題点として挙がっているところです。9番は長屋群、10番は寺の向かい側、11番は寺町の町並みで、この辺は地域の顔となる落ち着きのある通りとなっています。12番は地域住民の方のお話を聞いている場面の写真です。13番は寺町通り。14番の永瀬家はギャラリーとしても利用できるところです。15番は放置された長屋。16番の尾高町は今でも町並みがよく残っている、佇まいの残っている雰囲気のよい町です。17番の旧加茂川は白壁土蔵が今でも残っている地域です。こうして町歩きマップは完成しました。

次に、町歩きの中で特に印象に残ったものを「連続写真」としました。「連続写真」とは町歩きの中で現状を把握し、問題点を広角的視野で捉るために作成したものです。私たちは、現在まちづくり展などの企画を行っていますが、この中で町並み写真展というものを考えていて、「連続写真」や地元のアマチュア写真家などが撮影した過去の町の写真などの展示を考えています。「連続写真」の特性を活かして、町を広角的視野で検討することで、新たな問題点や残したいものが発見できるのではないかと思っています。そこで発見されたものを過去の町と比較する写真展を行って、これから町の姿の発見に繋げていければと思っています。写真展の会場は地域内に点在させて選びました。点在する会場を移動する間にその町歩きを楽しんでもらうということが狙いでいます。写真展当日は露店などを周辺に設け、会場の順路にはベンチを設置します。来訪者にアンケートも募ります。少しでも多くの人達と交流できるような企画となるようがんばっていきたいと思っています。私たちは、町の人にとって使いやすく住みやすいよい町になるよう、地域の人たちと共に写真展をはじめ、様々なまちづくりに関わっていこうとしています。

Q 次に何をやっていこうと考えていますか？

A 私は今4年生なので、来年もこの活動を継続してやっていくつもりです。市役所の方と一緒にワークショップをしましたが、連続写真を気に入ってくれて、市のまちづくり広報に掲載してもらえることになりました。11月にはまちづくり展（写真展）を開く予定です。

Q 今回発表していただいた活動をやってみてどんなことを感じましたか？ またこれからやっていく上で、何が必要だと思いますか？

A 年配の方々と接することで仲良くなり、地元の皆さんと繋がりができるということを感じました。愛着というか、繋がっているという気持ちが自分に出来たことが大きな体験です。

地域交
シンボジウム
セッション

高齢者と学生によるまちづくり in 呉

呉工業高等専門学校 専攻科 2年 山田 宏 優秀賞

「みんなを笑顔にしたい！！！」これが私たちの活動の合言葉となって、今まで様々な活動を行ってきました。活動は色々ありますが、今日紹介するのは高齢者へのパソコン指導です。平成9年に広島県北部の山間部の地域の高齢者にパソコンでの指導をしたことをきっかけとして、メールで交流が始まりました。

“わかってもらいたい”これは呉市に住んでいる高齢者の方々の思いです。1年前、高齢者の方々が呉をもっとよく知つてもらいたいということを仰っていたことから、私たちはそのおじいさん、おばあさんの期待に応えたいということになり、今回の活動を始めました。「一緒に考えませんか？」ということからチャレンジしようというわけで、呉市のまちづくり計画を踏まえたうえで、呉高専の学生と高齢者の方々が一緒になって呉の町をもっとよくしていく方策を考えるための、まちづくりワークショップを行いました。

活動のビジョンと目的を簡単に説明すると、呉に住む市民、呉市民が自分たちの町って今まで住んでいて気付かなかったけど、こんないいところあったのかという発見をしてもらうこと、そしてこここの町のこの部分をこうしたらもっとよくなるのではないかかなというのを提案していただき、それをビジョンとして打ち立てました。目的としては2つあって1つ目は呉市の魅力の発信と創造、2つ目は魅力が認知されるための仕組みづくりです。

活動としてはワークショップをメインに行ったわけですが、私たち学生は事前に勉強会を行いました。これによりワークショップの意義と目的を把握することができ、本番のワークショップはスムーズに行うことができました。

ワークショップでは3つにグループ分けをしました。ただの話し合いではつまらないということで、ワークショップ自体を「桃太郎の宝探し」、鬼退治ではなく「宝探し」というストーリーに仕立て、グループを「さる」、「きじ」、「いぬ」と設定しました。こういうことで、ただの硬い話し合いではなく、高齢者の方々にも楽しんでもらえるような工夫をしました。

第1回のワークショップでは主に3つ、今後呉市はどのような町にしたいか、そのために何を知っているのか、そしてそれを達成するためにどうすればいいのか、ということをまず話し合いました。それが終わった後に参加者の方にアンケートを実施し、第2回目のワークショップを開きました。2回目は1回目で行った内容を参考に、今度はまちづくりのゴール、これから呉市はどうあるべきというのを具体的に絞り込んで話し合ってきました。話し合いでいろいろな意見が出てきました。バラバラな意見をひとつ流れに持っていく、みんなが納得するような結果にしようということで、この「プロブレム・シーキング」という方法を用いました。平和が実感できる町、高齢者に優しい町、世代間の交流ができる町、これらのゴールを設定した上で、呉市にある山や川や建物、公園などの地物を実際に出して考えをまとめていきました。3つのゴールを視覚化するために学生がアイコンを作りし、後の地図づくりに発展させました。そして、私たちが分析を行ったデータをパンフレットとしてまとめました。ワークショップに参加してくださったお年寄りの方がいろいろな意見や気持ちを私たちに話してくださったので、それをまとめて文章にして載せることにしました。

まちづくりを考える上で住民参加という言葉がよく聞かれます。私たちが活動してきて、いろいろなことを思った中での自分の解釈ですが、住民参加というのはただ参加するだけではなく、みんなで楽しんでやることが大切です。また、終わってみて、自分もまちづくりに参加したのだと胸を張って言えることが大事だと思います。私たちはこれからも、呉市中心部以外でもワークショップを開催することを予定していますが、今後もこれを合言葉に、今回作ったパンフレットなどを積極的にまちづくりに役立てていこうと考えています。

Q まちづくりにどのように生かしていこうと考えていますか？

A 呉市は現在、市町村合併を進めています。瀬戸内の小さな島々も合併の対象となっているのですが、その中で豊島という所が積極的にまちづくりをしようとしており、呉市もその方向で動き出しています。私たちもそれに参加させてもらって、豊島のまちづくりを進めるためにワークショップを行い、地図を作り、課題を考えていきたいと思っています。

Q 今回発表していただいた活動をやってみてどんなことを感じましたか？ またこれからやっていく上で、何が必要だと思いますか？

A ワークショップで話を進め、結論が出る方向に進行していくことの難しさを実感しました。メンバーの中では当初、役割分担してはじめましたが、進めていく中で、役割を超えて協力しながらやったことで、みんなとそれまでよりもっと仲良くなれました。今後は学内でもっと人数を増やしていきたいと思います。学内でのPRをしてみんなに知ってもらって仲間を増やして、多くの人たちともっと楽しんでやっていきたいです。

記録

19 record



出町公園ワークショップ
八代工業高等専門学校 土木建築工学科
4年 角 雄太郎



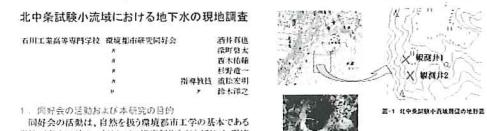
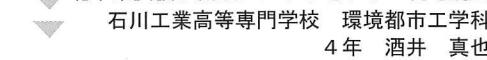
流域交渉ムンシヨウジウ



里山の暮らし体験塾
石川工業高等専門学校 建築学科
5年 平田 亮



高專祭作品共同製作企画
吳工業高等専門学校 建築学科
4年 原戸 愛子



1. 預算會的運動性與民主參與的目的

1. 同好会の活動および本研究の目的
同好会の活動は、自然を扱う環境都市工学の基本である現地調査や設計の一部としての模型製作などを通じて、環境

ンバー1人、当該学科の専攻科生2名と本科生12名である。現在、同好会の主要メンバーは津橋町の水・地盤環境を現地調査により把握して津橋町の環境保全に学生として寄与している。なお、活動の際には地盤工学を専門とする飯塚宏助教授と水工学を専門とする鈴木洋之助手の指導を受け

図-1は対象とした北中条試験小流域周辺の地形図である。本流域は竹で被われており、所々にバーベンジングが生じたと推測できる痕跡があった。また、この流域の末端上り下流部は畠地となっている。

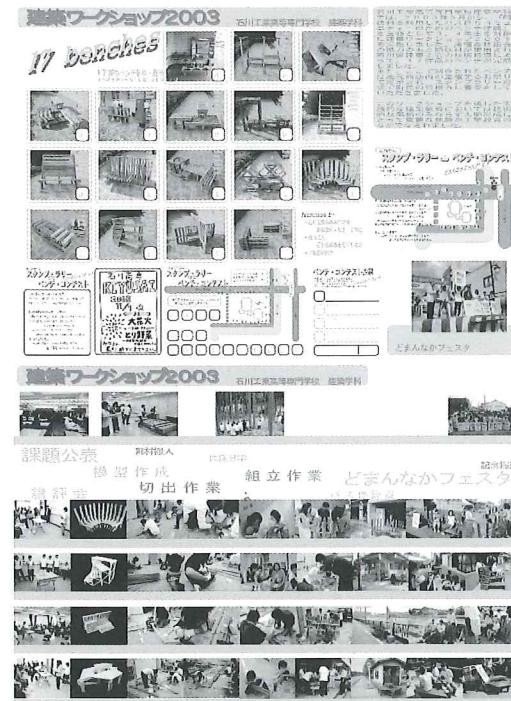
3. 調査方法
ハンドオーバーにより観測井を設置(写真-2)した後、自製の揚水器(写真-3)で地下水を探査した(写真-4)。
図-1に示した観測井1と観測井2はそれぞれ地表から約4m

4. 頸部結晶と分析
観測柱1では深度約3mで地下水面上に到達した。この間の土層の構成は主に砂より、粘土層は現れなかった。さらに恒温と強い悪臭を発する層が現れた。この層に採取された土を写真-5に示す。ここで採取された水の(CO₂)をバッケタテで調べたところ 700mg/l という高い値を得た。また、1μm
のカーボンコートしたカーバイドガラスを用いて、XRDによる

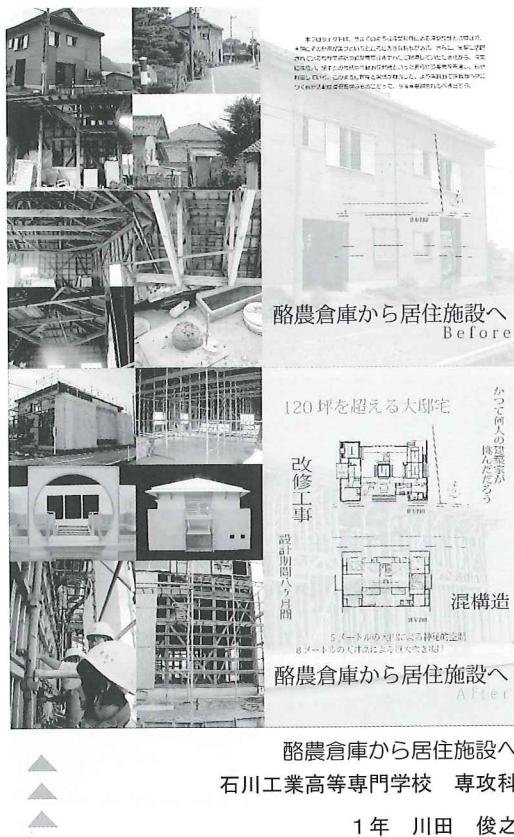
観測井2で採取された水は灰色で、硫黄と思われる臭いがあった。

5. 今後の予定
 規制井1では懸念のある土や水が存在し、水が高い COD を持つこと、規制井1と掘削井2では全く異なる性質の水が確認されたことなど、特異な性質を持つ土、地下水が北条試験小流域に存在することが予想される。
 今後は、規制井1に土と水を探査して両者の詳細な分析を行って、北条試験小流域における水質汚染の原因を明確化する。

ハビタント：持続率によって生存率が決まり、死因にはアリバの本数が及ぼす影響はない。有機物を含む水溶性

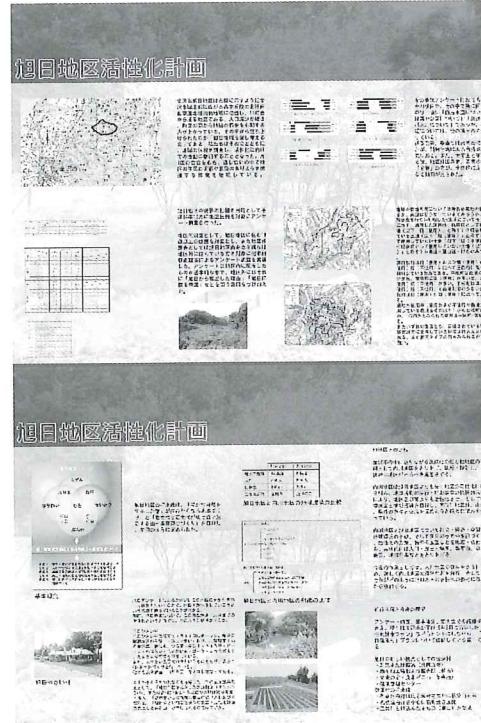


地域交流
シンポジウム
セッション



酪農倉庫から居住施設へ
石川工業高等専門学校 専攻科

1年 川田 俊之



旭日地区活性化
石川工業高等専門学校 専
2年 高見 重

市民参加型歩道デザインについて～別大国道を事例として～
大分工業高等専門学校 専攻科

1年 清水 嘉一

honorable
mentions #3

22



ゲスト作品

- ▼ 建設環境工学科における
地域産官連携の取り組み
- 高松工業高等専門学校
環境都市工学科
太田 貞次

建設環境工学科における地域産官連携の取り組み

高松工業高等専門学校 環境都市工学科 太田貞次

- ▼ おかしなお菓子
家づくりコンテ
石川工業高等専門
建築
船戸



照田：まず、本日は第1回目の全国高等専門学校デザインコンペティションを、当石川で開いていただいたことに感謝申し上げ、関係の皆様に敬意を表したいと思います。

ただいま、全国の高専の皆さんがまちづくりに関わっておられるという事例を、大変うれしく思い伺いました。近年、まちづくりやまちおこしが全国各地で大変な課題となっております。県や政令指定都市、地方中核都市などの大きな市はいいのですが、その他の市町村レベルとなると、まちづくりやまちおこしを考えるブレーンがないことが悩みです。これからも高専の皆さんのがそれぞれの地元で、そのブレーンとして活躍されることを期待しております。

いま、都市計画の分野では、まちづくり・まちおこし、景観、省資源、バリアフリーの4本柱がメインテーマとなっているのではないかと思います。従来はこれらに対し、行政が規制や助成をしてきたわけですが、近頃では市民レベルからまず声が上がって実質的な活動になり、行政と協力して行う事例が増えています。それどころか、市民からの働きかけがないと行政としても動けないという時代になっているのです。まちづくりに関わる立場として次の三者が考えられます。すなわち、第一に当事者、これは商店街、町内会、各協会、各種団体などで、目的意識や意欲はあるが手段がわからないという人たちです。第二にはプロ集団、これは建築士会やNPO法人などで、方法を持っている人たちです。そして第三に学生。これは問題を解決するエネルギーとアイデア、そしてひたむきさを持っている人たちです。私は、これからまちづくり・地域おこしは、これら3者の歯車がピタリと合った時にはじめて力を発揮できるのではないかと考えています。三者の歯車がうまく合うように、その仕組みを考えていきたいと思います。

浅野：学生たちのすばらしい発表を聞かせていただきましてありがとうございました。

金沢青年会議所も現在、金沢の8つの大学と1つの短期大学とともに活動しています。昨年は「学都金沢文化祭」という学生による文化祭という事業を開催しました。今年はその学生たちといっしょに「まち塾」というものを作り、地域の方と学生たちといっしょに交流イベントを準備しているところです。他には「市民交流広場」という形で朝市を学生といっしょにやったり、紙漉きや和傘塗りなどの体験を通して伝統工芸を地域の人に広く知ってもらう活動を進めています。

様々な分野の学生さんがいて、日々とても楽しく活動しているわけなのですが、その中で、彼らの活動に対して大学等の単位として認定してほしいという意見をよく聞きます。せっかく一所懸命にがんばっていただいているので、そのような制度ができればと考えています。また、学生さんだけではなく、ぜひ大学としてまちづくりに関わってほしいと思っています。現在、大学の教職員の方にも参加していただいて、学生さんたちといっしょにディスカッションをしたり、準備に汗を流したりしていただいている。

今後の課題としては、地域の方々をもっとたくさん取り込んでいきたいと考えています。もっといろいろな立場の人々を巻き込んで、まちづくり事業を行っていきたいと考えています。

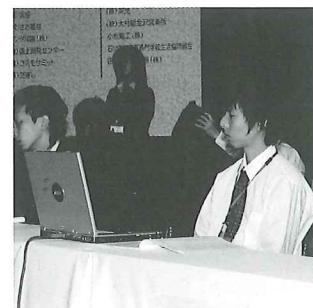
亀井：都城高専でも中心市街地の活性化をテーマとしてゼミなどで取り組んでいますが、継続が難しいですね。相手があつてのはなしもあり、提案したものがどれだけ受け入れてもらえるのかは、手続きや資金の問題、見通しの問題により計画倒れて終わってしまう危険性があります。ただ教育的な観点から言えば、若いうちからそういう場所に出て自分の目で見て、いろんな人の意見を聞いて計画を練り上げるという経験は非常に重要だと考えています。

できれば、地域貢献活動などを単位として認定できるように、あるいは組織として継続していくような仕掛けをぜひ作っていきたいと考えています。資金という面では研究費などの競争資金の獲得や組織、後援会、地元商工会などから頂くこともあります。いずれにしても高専がそこにある限り、大きな力を地域に還元することがこれからは必要だらうと思います。その意味で、今日こうしてさまざまな高専に取り組みを発表いただいたことは、非常に大きな勇気付けるとなると思います。自分たちだけではない、全国に共通する問題であることが認識できました。出来ること、出来ないことはありますが、こうした取り組みをまず教員や学生たちに伝えて、地域貢献を活性化する仕組みを考えていきたいと考えています。

天野：学生が地域と関わって地域を活性化するために何かやろうと考えた時に、最初は若い人が町の中で何かをやることだけでおそらく、まわりの人たちは未来に対して希望が持てるし、「こいつらのために何かしてやろう」と思ってくれるだろうと、そういう気持ちでスタートしたのですが、やってみるとそれだけではなく、学生諸君は我々が思っている以上に力があると感じました。さらに今日の発表を聞

いて、つくづく感じたのは、学生たちそれぞれがさらにビジョンを持っていて、単なるひとつの駒だけではなく、自分でまちづくりをコーディネートできる力があるのだということを感じました。特に、呉高専さんは聞いていてとても感激しましたが、そういうふうに若い人たちは非常に強い力を持っている、と感じます。

考えてみると、明治維新は若い人たちが引っ張ってきたわけですが、今の時代というのは若い人たちの方が情報を得やすいし、将来は非常に混沌とした状態ですから、みなさんが活躍できるところはたくさんあるのではないかと思います。そのためであれば、高専が他のいろんな教育機関と違う所がもしあるとするなら、みなさんが実際の場で活躍できるようになどだけのサポートができるか、それが高専のあるべき姿だと思っています。したがって、これからも思い切ってやっていただきたいと思いますし、私自身もみなさんが活躍できる場所、制度など必要と思われるものの確保、確立に最大限努めたいと思います。



本日は、全国高等専門学校デザインコンペティションということで、初めての機会に同席させていただきましてありがとうございます。

発表を聞いて、みなさん本当にユニークで、こちらの想像を遥かに超えてすごいことをやっていらっしゃるなと思いました。

現代の若者は、よく我々の世代から言わせれば元気がない、やる気がない、生きる力がないとか、待ち人間とか散々言われています。そこをどう鍛えるのかが、教師に求められていることだとされていますが、実はそうではなくて、そのようにさせているは社会であり、教師であり、親であるということ、ほんとうは学生諸君はいろんな力もヤル気も充分に持っているということを改めて感じました。

学生の皆さんに最後にもう2つほど聞きたかったのは、みなさんの活動を通して、建築やまちや地域をつくるということを本当に楽しいと思えたのかということ、そして、地域に出るということもある意味で自分探しの旅だと思うのですが、「自分はこうすることをしたいんだな」ということに一步近づくことができたのかということです。多分、そういうことに気がつきながら課題も気がついて、もっと楽しく、もっと自分のやりたいことをやるにはどうしたらいいのかということがまた見えてくれれば、学校生活も楽しくなるのだろうと思います。そういう議論をみなさんと一緒に、地域と一緒に我々もしなければいけないと思います。

今日のテーマは地域との交流ということですが、地域の活性化とか発展とか、まちづくりをどう進めるかというかたちで議論するというのもひとつのやり方ですが、我々学校にいる立場からは、学校教育をどうするのか、そのなかで地域との交流をどう位置づけるのかという観点で議論をしていく必要もあるわけです。むしろ、学校をより楽しく、意味あるものにするためにどうすればいいのかということを議論する形もあるのかなと思います。

いずれにしても、我々教師は、みなさんが自分探しをして、自分らしく生きる道を見つけることをサポートするのが仕事です。私は普段学生に、自分が見つかっていないのに卒業するな、社会に早く自分を置くなと言っています。本当の自分を見つけた上、それを買っててくれる会社をよく探しなさいと言っています。皆さんにもそんなふうにがんばってほしいと思います。

一方で、そのようにしてやりたいことを見つけても、残念ながらそれではなかなか食べていけない社会です。最近は日本でもうやく、いろんなベンチャーとかNPOとか、既存の企業ではない形態で自分のやりたいことをやっていくという形も出来つります。それもかなり厳しいことなので、本当に自分のやりたいことをやって食べていけるためにはどうしたらいいか。これか域づくり、まちづくりなのではないかと思います。今日は行政の方と青年会議所の方がいらっしゃっていますが、例えば市町村建築職をどんどん採用していただきたいですね。それだけのまちづくりのニーズはあるはずなので、学生諸君が自分のやりたいと見つけて、自分の住んでいる町で働くというような枠組みを作っていただきたいと思いますし、産業界もそういう学生を受け入れる仕組みを作っていただきたいと思います。

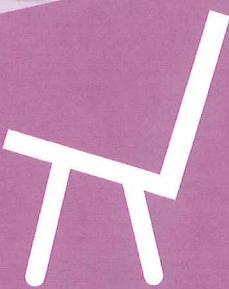
建設業界もこれからは、これまでのように建物をただ作るだけで儲けるのではなく、この人口減少、省エネ、省資源、環境を考えなければいけない時代に、みんなで知恵を出し合いながら古いものを守りつつまちを作っていくことが求められてくると思います。それでなおかつ食べていけるようにするためにどうすればよいのか、これもまちづくりの課題なんです。そういうことも、高専と産業界とお互いに知恵を出し合いながら目指していくことも必要ではないでしょうか。それがないと学生諸君も、せかくやりたいことを見つけても実現する道がなければ、がんばってもしようがないじゃないか、ということになってしまいます。そういう意味で、我々も、自ら考え本当にやりたいことに向かって頑張れる学生を育てつつ、そのような人材を活かせる社会をるように努力していかなくてはならないと思っています。

ワークショップ部門

ものづくり
ワークショッ
セッション

ものづくりワークショップセッション

25 works



セッションの目的

デザインの構想からその実際的な制作過程における体験を通した相互研鑽の場とします。

テーマ

「座ってまちをみつける場所（木製ベンチの制作）」

まちのなかに、友達とのまた恋人との関係を、夫婦や親子の関係を見つめ直すためのベンチを考えてみてください。そこが、年後に訪れた時、そういえばここから始まったんだなあと改めて思えるに相応しい場所となるような提案を期待します。

制作物の制限（間伐材料の規格および価格、接合方法などについては後日HP上で公開します）

規模 : 2m × 2m × 2m の枠に収まること。2人以上が同時に座れること。

強度 : 構造上、堅固で、使用上、安全であること。

価格 : 木材部材合計が、10,000円以下であること。

制作者 : 1校7名（不足者数は主管校から補助学生を補てんするので、6名以下の応募も可）

応募先

事務局 : 全国高等専門学校デザインコンペティション実行委員会事務局

連絡先 : ☎929-0392 石川県河北郡津幡町北中条タ1 石川工業高等専門学校 学生課学生係

e-mail : descom2@ishikawa-nct.ac.jp

応募資格

応募の時点で高等専門学校に在籍する学生で、専攻科生を含む（各高専1組、代表者1名）。

質疑応答

質疑は、e-mailのみで受け付けます。宛先は、上記事務局まで。電話による質疑は受け付けません。

応募方法

各高専で代表1組を選び、平成16年7月13日(火)までに参加学生を担当教員から事務局宛にe-mailにてご連絡ください。併せて完成予想模型およびコンセプト・シート、指定書類（別途指定）をご送付ください。

審査員及び審査方法

審査員長 : 鈴木時秀（津幡町・産業建設部長）により、当日実際に制作された作品を、審査委員による投票形式で審査を行います。また、本選とは別に津幡町商工会主催「どまんなかフェスタ」においても別途、津幡町民審査が行われます（雨天中止）

著作権・所有権等

提出された図面・制作内容および制作された作品の著作権・所有権は、主催者および主管校に帰属します。

賞

最優秀賞（石川高専校長賞） 1点 賞状 及び 副賞
佳作 若干数 賞状 及び 副賞

1. 審査方法・審査基準

- 各高専で代表1組を選出し、作品の構想を事務局に提出する。
- 本選では、作品の構想に従って、8:30から16:00までの7時間（うち30分は昼食時間）で、実際に作品を制作する。
- 1/5スケールのスタディ模型によって再現性を確認する。
(部材価格合計および制作物の大きさについては以下の表中に記する)。
- 各審査員は、制作品（ベンチ）、作業状況等を判断し、各評価項目により審査を実施する。
但し、自校の作品については投票しない（審査票回収時にチェックする）。
- 評価項目については、以下の3点を設定する。
 - デザイン・アイデア：作品そのものの良さ。
 - 技能・技術：組合せの巧みさ、構築物としての良さ。
 - 連携・連帯：チーム内での手際、効率の良さ。
- 各審査員は、評価項目についてそれぞれ上位3チームを選定し、順に3, 2, 1ポイントを加算する。
- 獲得ポイントを集計し、総合ポイントの最も高いものを最優秀賞とし、以下を佳作とする。

ものづくり
ワークショッピング
セッション

2. 審査員および審査団

審査員長	鈴木 時秀	津幡町 産業建設	部長
審査員	西川 賢治	米子高専 建築学科	講師
	吉村 公男	明石高専 建築学科	教授
	重松 宏明	石川高専 環境都市工学科	助教授
	柴田 良一	岐阜高専 建築学科	助教授
	富田 英夫	吳高専 建築学科	助手
	島袋 淳	徳山高専 土木建築工学科	助手
	森山 学	八代高専 土木建築工学科	講師
	菊池まさこ	明石高専 建築学科	3年
	小田 憲一	石川高専 専攻科	1年
	日比野未夢	岐阜高専 建築学科	3年
	鶴岡 洋一	吳高専 建築学科	5年
	田中 雅乃	徳山高専 土木建築工学科	2年
	出田 麻衣	八代高専 土木建築工学科	1年
	石原 裕太	米子高専 建築学科	3年
ゲスト審査員	盛 直昭	津幡森林組合	参事

3. 審査記録

審査結果

	明石高専	石川高専	岐阜高専	吳高専	徳山高専	八代高専	米子高専
部材価格合計(円)	9,000	9,800	9,800	10,000	10,000	9,300	9,700
作品の大きさ(mm)(WHD)	1,850 × 1,150 ×	1,500 × 720 ×	1,470 × 825 ×	1,980 × 820 ×	1,815 × 805 ×	1,490 × 800 ×	1,810 × 895 ×
a. デザイン	11	9	16	13	16	19	12
b. 技能	8	23	12	11	27	6	9
c. 連携	5	0	9	1	7	8	1
合計得点	24	32	37	25	50	33	22

27

regula
& res

入賞結果

最優秀賞（1点）

徳山高専

○田中雅乃、岡成信正、熊谷政男、田中智也、山下洋平、道源真詩（補助学生他1名：北川亮）

佳作：（6点）

岐阜高専

○日比野未夢、井口真吾、岩西愛、大西裕太郎、北山歩夢、佐藤静香、寺田達哉

石川高専

○小田憲一、小島徹也（補助学生他6名：牛島華織、笠桐伊代、永瀬亜衣、嶋崎由起、平畠直諒）

明石高専

○菊池まさこ、國居郁子、高橋有佳里（補助学生他4名：山森勇治、西村拓則、横井久美子、吉川准平）

米子高専

○石原裕太、石村悠造（補助学生他5名：坂江将太、斎藤由起、戸部美玲、宮脇加奈、森美葉子）

吳高専

○鶴岡洋一、石井正人、空久保未央、藤井ゆかり（補助学生他3名：金子香、寺井豊、橋本真奈）

八代高専

○出田麻衣、木ノ下好太、児玉静佳、ステュワート小百合、牧山博志、松村健太（補助学生他1名：福島秀哉）

■座ってまちをみつける場所



徳山高専 土木建築工科
代表者 3年 田中 貴
3年 岡成 伸
熊谷 仁
田中 道源
山下 晃

補助学生 石川高専 3年 北川



プレゼンテーション

発表者：田中(雅)

私たちは、誰でも知らない人とでも座ったり自然に会話ができたりするような、放課後の教室の雰囲気をヒントにしました。が和み、何か優しい気持ちになってその場にずっといたくなり、時間があっという間に過ぎてしまうようなベンチを作りたいと、たのでこのようなベンチを提案したいと思います。

工夫したところは、背もたれを 180° 回転できるように作ることによって、目線を変えられるという点です。もし、知らない人が座っているときに、真横に並んで座るのが気まずい場合は、双方が快適に座れるように、背もたれ回転させて別の方向を向くことが出来ます。

審査員長講評

このベンチの最大の特徴は背もたれが可動するということかと思います。このベンチを制作した学生たちは他人の視線を気にすることから背もたれを動かそうと考えたようですが、それはそれだけにとどまらず、このベンチが置かれた場所でその場所に見合った使い方ができるものになっています。

製作過程

winning
work

28



プレゼンテーション



話し合い・部材寸法確認



パツの組み立て作業



全体の組み立て作業



表面仕上げ



完成

最優秀賞作品



■ プレケツ



岐阜高専 建築学科
代表者 3年 日比野未夢
3年 井口 真吾
岩西 愛
大西裕太郎
北山 歩夢
佐藤 静香
寺田 達哉



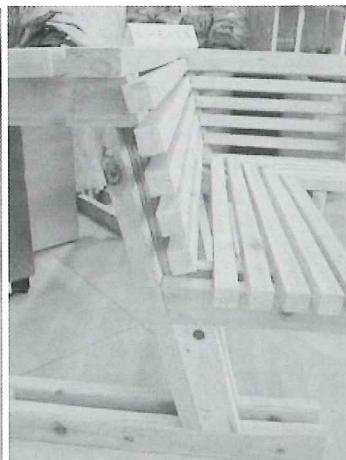
ものづくり
ワークショップ
セッション

発表者：日比野

プレゼンテーション

私たちの作品の名前はプレケツっていいます。ダサイ名前だと思われた方が多いと思うんですけど、私たちもそう思ってるし…でもこれには理由があります。“プレ”は準備期間や前段階という意味で、“ケツ”というのは決意とか決心という意味で、何かを決断するときにひと呼吸おけるような空間になればいいと思ってこのようにしました。あと、押したいポイントは形が結構普通な感じで、もし車がない時代とかにあってもそんなに大したことない感じで、今も大したことないという感じで、多分将来あっても大したことないという感じで…。けれども、大したことなくてもこのベンチはずっと町を見ていて町を知っていてというふうに、世代を超えて思い出が積み重なっているということを期待しています。

■いつもと違う角度で触れ合ってみたいと思いませんか



石川高専 専攻科
代表者 1年 小田 憲一
1年 小島 徹也
補助学生 石川高専 3年 牛島 華織
笠桐 伊代
嶋崎 由起
永瀬 亜衣
平畠 直諒



29
honorable
mention

発表者：小島

プレゼンテーション

このベンチを考えて工夫した点は、90度に曲げてL字にしたことです。また、下の座面だけではなく上方にも小さな子供や軽い人であれば座れるようにしました。なぜL字にしたかというと、いつものように隣り合ったり向かい合って座るだけではなく、斜めの方向から座って話をしたりするのも、変化があっていいと思ったからです。考える時に苦労したところはベンチの足の形です。簡単な構造にしたかったら足を真ん中につければいいけれど、デザインがダサかったので、斜めにしたのです。しかしそうすると座面と背もたれのところに角度ができ、それが接合するところで斜めに入ってしまい、苦肉の策でこのように足を横につけることにしたことです。

佳作作品

■ Bloom

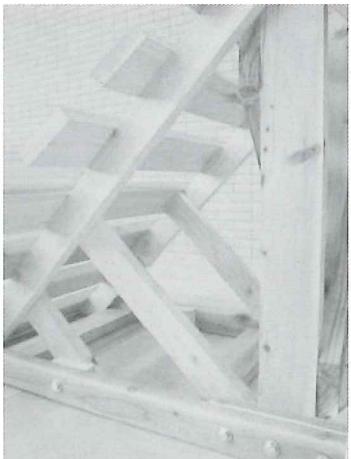


プレゼンテーション

発表者：菊池

私たちちはまず、人がたくさん集まるところにこのベンチを置こうと思いました。そのため、ベンチに腰掛ける人の規模や用応じてベンチを移動できるようにしたり、フラワーポットを置いてラックとしても使用できることなど、多くの人が利用したるよう工夫しました。このベンチを制作するにあたって一番考慮したことは、一つ一つのベンチを移動できるようにするヨイントが難しいことから、一体感が出なくなると思い、木の直線を利用して端部の角度を0度にすることで、きれいに連続性出るようにデザインしました。その他に、座面の高さを少し低めの410mmにしたことがあります。大人にはけっこう低いかとますが小さな子供でも座れるようにしました。

■ 上を向いて座ろう



プレゼンテーション

発表者：石原

僕らの友人、恋人、夫婦、親子の関係を見つめ直すベンチを考えた時に、まず印象について考えました。印象が強ければ必ず座って話をしたことなど忘れないと思います。忘れることがないということは思い出を作るということになり、友人、恋人など関係を強めて見つめ直すことができると思いました。このベンチは印象を強めるために額を上にしました。額を上にすることにより、屋には空や夜には星空を見ることができ、その印象が残りやすくなります。他に、悲しいときなど下を向いてうので、マイナスのイメージがあります。逆に自信があるときうれしいときは上を向くのでプラスのイメージがあります。なのでこのベンチは楽しくなければ相談の場となることを期待しています。この形の三角形は胴体の角度をかえるためにこの2つの1に設定したのと、2カ所の違う風景を見ることができることを考慮してこの形にしました。

■ベンチ～動き～



吳 高専 建築学科
代表者 5年 鶴岡 洋一
3年 石井 正人
4年 空久保未央
4年 藤井ゆかり

補助学生
石川高専 3年 金子 香豊
寺井 豊
橋本 真奈



ものづくり
ワークショップ
セッション

プレゼンテーション

発表者：鶴岡

まず人とコミュニケーションをとることを考え、例えば友達と話すときに向かい合って座って“最近どう？”っていう風に話すよりも、机の角とかに腰掛けで話したり、椅子の背もたれのところに腰掛けで話すことの方が多いと思うんですよ。ということで、友達とかと親しく話すときの座るカタチっていうのは案外ちゃんと椅子に座って話すよりも、ちょっとどこかに腰掛けで話したりすることの方がすごい会話が弾むんじゃないですか。そういうことを考えてここが座面でここが背もたれっていうのをあえて限定せずにこういう形でどこでも座れるというか、自分で座りたいカタチを探して、好きなところに座ってそこでコミュニケーションが生まれるのでないかというのがコンセプトです。

■雪吊り物語



八代高専 土木建築工学科
代表者 1年 出田 麻依
5年 木ノ下好太
1年 児玉 静佳
スチュワート小百合
5年 牧山 博志
4年 松村 健太

補助学生
石川高専 3年 福島 秀哉



31 honor
mentio

プレゼンテーション

発表者：出田

作品名は、雪吊り物語です。今回初めて石川で全国高等専門学校デザインコンペティションをするということで石川の伝統の雪吊りをモチーフにしてみました。雪吊りというのは雪が降ったときに雪が積もって枝が折れたりしないように工夫したものをいいます。形としては正四面体の頂点をカットした感じになります。なので3カ所に座ることができ、3方向を向いて座るので隣に座った人から自分はほとんど見れないっていうのと、それぞれが違う方向を向いて座るっていうことで違う街の風景を見ることができます。工夫したところは、できるだけ正四面体にこだわって考えを進めたところです。苦労するところは、垂直な部分が少ないので接合するときに大変なところです。

佳作作品

岐阜高専

- 米子高専 石原：決意する空間って言っていましたが、具体的にはどういう感じのことですか？
- 岐阜高専 日比野：例えば決意をするときって自分一人で考えたいときと、何も言ってもらえない人も聞いてほしいってありません？そういう周りにはバリアを張ってるけど二人に不思議な感覚が出来るのがプレケツなんですね
- 石川高専 小田：それをプロポーズとかに使うんですか？
- 岐阜高専 日比野：恋愛話がお好きで(笑) そうですね、片想いとかしてるときでも、そんなかつかつヒザがあたるとはずかしけどちょっと触るぐらいがときめいたりとか、または正面に向いて座っててもいいし、そういう多様性もポトなんです。
- 石川高専 福島：足の丸くなっているところは作れるんですか？
- 岐阜高専 日比野：ここもポイントの1つなんですけど、曲面が切れないからあえて私たちは、私たちのできる限界で曲面をやうということになって、ちょっとずつ長さを変えて段状にしていくって感じで作ります。これだけは、むっこしか、ウリがないからここを本気で削ってこれをきれいに死ぬ氣で作ろうって感じですね。
- 石川高専 福島：あと、ものすごい太った人が向かい合う感じで座ったとき、横に倒れないですか？
- 岐阜高専 日比野：それもウリなんですけど、倒れると思うじゃないですか、でも一応倒れないようになってるんですよ。なうかなと思いつつ、絶対にならないどこもポイントです。

石川高専

- 徳山高専 岡成：どのぐらいの重さに耐えれますか？
- 石川高専 小島：まだ構造計算とかしていなくてわからないけど、背もたれの部分ですか？座角の部分ですか？
- 徳山高専 岡成：両方です。
- 石川高専 小島：座角だったら座面の長さが60cmか70cmくらいでそんな大きくないので、4人ぐらい。でもこんな狭いスペースにはそんなに座れないと思うんで、4人ぐらいがちょうどいいかなと思います。
- 司会 山口：この90度という位置関係や視線関係について何か意見はありませんか？
- 岐阜高専 井口：どういうことからその斜めの位置関係にしたのですか？
- 石川高専 小島：ある恋愛心理学者が恋人同士は向き合ったり並ぶのではなく、斜めに座ることで親近感を持てると言いました90度にしたらいいかなと思いました。
- 米子高専 石村：90度の位置関係に座って触れ合うってどのようなことですか？
- 石川高専 小島：90度の位置関係は、ようはおしゃべりしたり…
- 米子高専 石村：近すぎると足がぶつかるのでは？
- 石川高専 小島：そんな時は離ればいいし、触れ合いたい人は近付けばいい。

明石高専

32

- 司会 山口：花を置いて飾ることに関して、思ったこと、意見などがあればおねがいします。
- 徳山高専 田中(智)：素晴らしいと思います。

米子高専

- 徳山高専 田中(智)：お年寄りが座るときはどうやって座るんですか？
- 米子高専 石原：角度が急なところだと危ないので、こちらの低いところに腰掛けるという感じになります。
- 司会 山口：普通ベンチは前を向いて座るものですが、これは上を向いて座るベンチですよね。そういうベンチにしたことや意見があればお願いします。
- 八代高専 木ノ下：普通じゃなくていいと思いました。あと、どこに置くんですか？
- 米子高専 石原：空や星空を見るということで公園とかに置こうと考えています。

徳山高専

呉 高専 鶴岡：回転するのは1人用のところだけですか？

徳山高専 田中(雅)：2人用のところも回転します。

石川高専 小島：このベンチは木で作るんですよね。回転するときに、すごく重くて回しにくいんじゃないかなと思ったんですがどうですか？また、回転した時に挟まれたりするという危険性はないのですか？

徳山高専 山下：このベンチと同じものを以前、実際に作ってみたんですけど、回転するときは重いと思ったんですが、ボルトがついているので、しっかり回せました。それと、挟まる危険性っていうのは実際座ってみて挟まる人はいなかつたので大丈夫だと思います。

ものづくり
ワークショッ
セッション

呉高専

岐阜高専 大西：腰かけるということですが、なぜその形にしたのですか？

呉 高専 鶴岡：自分の中で一番いい椅子は階段だと思ってて、階段にちょっと腰掛けて座るっていうのが理想だと思ったんですよ。木材の量とか大きさの制限とかでいかに多くの場所でいろんなところに座れるかということを考えて、あと三角形って構造的に安定するじゃないですか。そういうことを考えてこの形にしました。

司 会 山口：一番隅っこに座ったときに倒れたりとかしないですか？

呉 高専 鶴岡：すごい倒れそうじゃないですか、そしたら一人じゃ座りたくないから“反対側に誰か座ってよ”ってなるんです。

司 会 山口：そしたらお互いに反対向きになりませんか？

呉 高専 鶴岡：外側を向いて座りたいけど、せっかく反対側に座ってもらおうんだったら、お互いに内側向いて座っちゃって、そこで友達になっちゃいましたみたいな。そんな出会いが生まれて、すごい場ができるんじゃないかなと。

司 会 山口：じゃあ二人以上が定員ということですか？

呉 高専 鶴岡：そうです。

八代高専

石川高専 小田：上の三角形の枠の断面は斜めになっているんですか？

八代高専 出田：模型では、正確に作れてないんですけど上の三角形の枠と下の三角形の枠は平行です。

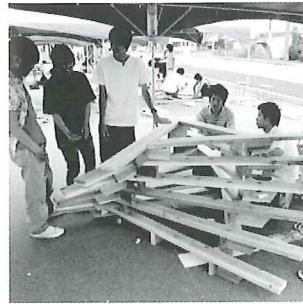
石川高専 小田：背もたれのところは斜めにカットしてあるんですか？

八代高専 出田：はい。

司 会 山口：呉高専と八代高専は三角形を基本としてオブジェに近い感じで作ったっていうのは、私的に何か似ている感じがするんですが、雪吊りをもとにして考えたこのベンチについて意見はありませんか？

呉 高専 鶴岡：自分の住んでるところとか地方ならではの発想が、その地方を満たしていくというのが自分の地域を生かした形ということでいいと思いました。

33
ques
an
answ



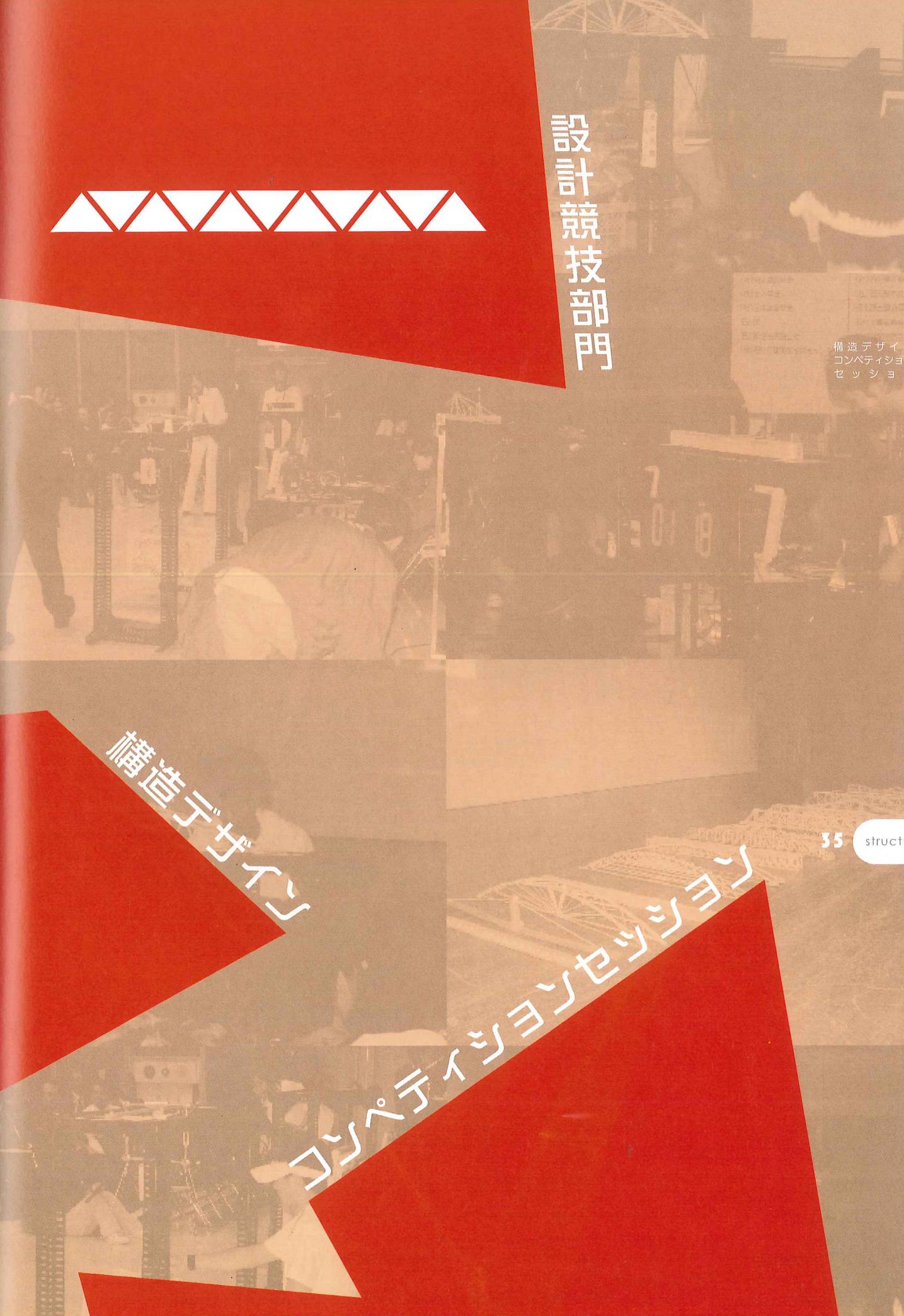
本日は、いろいろな作業のなかから見させて頂きました。そのなかで、徳山高専の学生が制作したベンチが最優秀賞となりました。

さて、私どもは、ベンチというのにごく自然に何気なく座るので、ベンチに対して特別に考えたことはございませんが、本は若い学生の皆さまのベンチ制作に対するエネルギー、デザイン、アイデアに素晴らしいものを感じました。しかし制作過程において、はたしてうまく重心がとれるのか、また自分の体重を支えられるのかと気にしていましたが、だんだん制作されていくにつれてこれらの疑問はなくなりました。いざ出来上がったものに座ってみると、自然に体が支えられ、座り心地がよい様に思いました。完成の時にはサンダーで熱心に磨いていましたので、手触りがすべすべしている、肌への感触もよく、木の温もりが伝わってきました。

ベンチのデザインに関しても、通常では存在しない三角形のベンチを制作してみたり、あるいは場所によって自由自在に変化するようなベンチもございました。また、通常座っているベンチに今度反対側から座る、あるいは中へ入ってお子さんと一緒にしまるというような形式のベンチもございました。そして花を飾ったり、あるいは夜になると電気がついてアベックで座る、など実際に使われる状況が思い浮かぶようなベンチもございました。

とても素晴らしいアイデアが多数実現されていたと思います。このような質の高いベンチ制作競技の審査員長として参加させて頂き、ありがとうございました。





設計競技部門

構造デザイ
コンペティショ
セッショ

構造デザイ

コンペティションセッション

35 structi

セッションの目的

高等専門学校の学生が競技形式のコンテストを通して、普段より学習している構造・材料・力学の学習成果を内外に示し、そして相互研鑽を行なう機会を提供することを目的とします。

テーマ

「ブリッジコンテスト」

建設構造における最も基本的な形の1つである、単純梁形式の構造体を設計・製作し、載荷試験により耐荷性能を競うコンテストを行います。構造体そのものについては、梁・トラス・アーチなど構造デザインは自由な設計ができるであろう。また、構造式に応じて材料の強度や特性などを実験・解析することで、自ら設計・製作した構造物がどのような性能を持てるか、自ら体得する機会となります。定められた条件の中での構造デザインの可能性を探って欲しい。

設計条件

構造形式

:両端を固定しない単純梁形式の構造体

スパン

:スパンは100cmとする（製作物はそれ以上の長さが必要）。

断面

:製作物の最大断面は縦15cm横10cmの断面内におさめること。

自重

:製作物の総重量は200g以下とする。

載荷条件

:スパン中央部での集中載荷とする。

支持条件

:両端において単純支持とする。支持部は15cm×15cmの平面とし、製作物の両端部をその上面に配置する。

使用材料

:木材のみとする。接合部は一般的の木工用接着剤で接着することを基本とするが、接合部のみには、金属など木材以外の材料の使用を認める。

構造解析

:製作物については、あらかじめ構造実験や構造解析を行うなどし、耐荷性能についての予測値を明示すること。

応募先

事務局

:全国高等専門学校デザインコンペティション実行委員会事務

連絡先

:〒929-0392 石川県河北郡津幡町北中条タ1 石川工業高等専門学校 学生課学生係

e-mail

:descom@ishikawa-nct.ac.jp

応募資格

応募時点で全国の高等専門学校に在籍する学生で、専攻科生等を含みます。（共同は可。只しこの審査の参加は代表者1名とす

質疑応答

質疑は、e-mailのみで受け付けます。宛先は、上記事務局まで。電話による質疑は受け付けません。

応募方法

用紙

:設計図面にプレゼンテーションを施し、A2判1枚に収めて提出（パネル不可）

図面内容

:平面図・立面図・写真等適宜必要と思われる図面及び耐荷予測値を含む説明文。

提出方法

:図面裏面右上に所定の用紙に必要事項を記入の上貼り付け、期限までに事務局に持参（17時迄）または郵送（宅配便可）。

審査員及び審査方法

参加各高専で参加学科および専攻科ごとに独自に予選を行い、学科および専攻科の代表チームを1組選出して下さい。各校指導教員は期限までに選出案を事務局に送付して下さい。

本選ではチームごとに製作物を持参し会場にて載荷実験を行います。製作物について自重、最大荷重、耐荷性能＝耐荷重／自重予測確度＝（耐荷予測値－実耐荷重）／実耐荷重、などの競技結果とデザインの独自性について審査を行います。

競技日程

募集要項・応募要項の公表・配布：平成16年4月19日（月）

質疑応答期間：平成16年4月19日（月）～5月7日（金）

質疑回答の公表・配布：平成16年5月14日（金）

各校代表作品提出期限：平成16年7月16日（金）（必着）

*一次審査を作品提出までの間に各校で行って下さい。

二次審査（最終審査）：平成16年9月4日（土）

賞

グランプリ

(文部科学大臣賞) 1点 賞状 及び 副賞

競技1位、2位、3位

(石川高専校長賞) 各1点 賞状 及び 副賞

アイデア賞

(石川高専校長賞) 1点 賞状 及び 副賞

佳作

若干数 賞状 及び 副賞

1. 競技手順

(1) 開始前

- ・2校ずつ1組となり、1組ずつ載荷競技を行なう。
- ・組み合わせは、載荷予測値を考慮して1日目（説明会時）に決定する。
- ・2日目（競技）の際に耐荷予測値を変更することは認めない（1kgf=9.8Nとする）。
- ・組ごとに作品を持って入場する（本選参加は1校1名のみ）。
- ・簡単なインタビュー（橋の特徴、予測耐荷重、工夫した点、苦労した点等）を行う。
- ・載荷台に作品を設置し、写真を撮影する（サポート学生を2名程度配置）。

(2) 開始後

- ・初期荷重をいくらに設定するか宣言させる（数値は1日目に聽取しており、変更は不可）。
- ・初期荷重分のおもりを乗せた載荷器具を設置。載荷器具の底と地面の距離は約500mmとする。
- ・10秒ごとに500gの整数倍のおもりを順次、載荷器具に乗せていく。時間の間隔と1回の荷重量は、予測耐荷重や参加者の意向等を参考に、審査員が決定する。
- ・作品橋が崩壊した時点で競技は終了する。崩壊した寸前の荷重を耐荷重とする。
- ・「崩壊」とは載荷用具の下端が接地した状態を言い、破断したか否かは問わない。例えば、たわみが500mmを超えた場合も崩壊したものとみなす。
- ・進行中に適宜休憩およびコメント等をはさむ（全体で240分以内）。

構造デザイン
コンペティション
セッション

2. 競技結果の確定

(1) 競技順位（石川高専校長賞）

- ・①自重、②最大荷重（＝耐荷重）、③耐荷性能（＝耐荷重/自重）、④予測確度＝（耐荷予測値-実耐荷重）/実耐荷重、の4項目（単位はg）とする。
- ・項目ごとの結果を次の表（様式は例）に埋め込み、順位を算定する（自重は軽い方が高位）。

高専名	予測値	自重	①順位	実耐荷重	②順位	耐荷性能	③順位	予測確度	④順位	順位計	総合順位
A高専											
B高専											
C高専											
⋮											

- ・各項目の順位計（①～④の和）により、総合順位を確定する。
- ・3位以内に同数値があった場合は最大荷重で、それも同じ場合は自重で順位を確定する。
- ・総合順位（順位計の数値の小さい順）により、競技1位、同2位、同3位を確定する。

(2) グランプリ（文部科学大臣賞）・アイデア賞（石川高専校長賞）

- ・各審査員が審査票に、技術点（10点満点：観点は合理性、技能、実現性）とアイデア点（10点満点：観点はデザイン、アイデア、ユニークさ）を記入し、投票する。
- ・技術点とアイデア点は相互に依存しない（技術点7点、アイデア点10点等も可）。
- ・競技の総合順位点として、1～8位の上から順に、10, 8, 6, 5, 4, 3, 2, 1点を付与。
- ・競技の自重順位点として、1～8位の上から順に、10, 8, 6, 5, 4, 3, 2, 1点を付与。
- ・作品ごとの合計点数をそれぞれ算出し、技術点の計と総合順位点の和が最高得点の作品にグランプリを、アイデア点の計と自重順位点の和が最高得点の作品にアイデア賞を、それぞれ贈呈する。
- ・2賞とも、満点は200点（＝持ち点10点×審査員19名+順位点10点）となる。
- ・合計点数が同じ場合は、審査員長が決定する。
- ・グランプリとアイデア賞は、閉会式で発表する。
- ・閉会式後に、審査員名を伏せた投票結果を作品ごとの得点結果がわかる形で公開する。

37 regula

3. 審査員および審査員団

審査員長 小堀 炳雄 金沢職人大学校 校長（金沢学院短期大学名誉学長 金沢大学名誉教授）

競技概要

副審査員長 西田 進 金沢工業大学 教授 環境・建築学部環境土木工学科

審査員	浦島 三郎	苫小牧高専	環境都市工学科	教授	石井 仁	吳高専	建築学科	講師
	丸岡 晃	八戸高専	建設環境工学科	講師	木村 一郎	松江高専	土木工学科	助教授
	松村光太郎	小山高専	建築学科	助手	原 隆	徳山高専	土木建築工学科	教授
	加藤 賢治	豊田高専	建築学科	教授	太田 貞次	高松高専	建設環境工学科	教授
	吉田 雅穂	福井高専	環境都市工学科	助教授	笹田 修司	阿南高専	建設システム工学科	助教授
	嵯峨 晃	神戸市立高専	都市工学科	教授	黒岩 哲夫	高知専	建設システム工学科	教授
	中川 肇	明石高専	建築学科	助手	上原 修一	有明高専	建築学科	教授
	稻田 柏二	米子高専	建築学科	助教授	岩坪 要	八代高専	土木建築工学科	講師
					内谷 保	鹿児島高専	土木工学科	教授

競技順位	作品番号	高専名	学科名	耐荷予測値(kg)	自重(g)	①順位
1位	12	呉	建築	43.0	156	2
2位	19	松江	環境建設工	20.0	116	1
3位	18	米子	建築	63.1	194	13
佳作	11	石川	建築	37.4	166	3
佳作	7	福井	環境都市工	16.2	168	4
グランプリ ・アイデア	21	豊田	建築	428.6	191	11
佳作	16	八戸	専攻科	100.0	189	9
佳作	8	高松	建設環境工	17.3	185	5
佳作	9	八代	土木建築工	20.0	195	15
佳作	4	鹿児島	土木工	12.0	185	5
佳作	10	石川	環境都市工	22.7	199	18
佳作	5	苫小牧	環境都市工	5.0	186	7
佳作	3	明石	建築	11.8	190	10
佳作	6	阿南	建設システム工	15.0	199	18
佳作	1	石川	専攻科	7.0	187	8
佳作	17	徳山	土木建築工	510.2	192	12
佳作	2	岐阜	環境都市工	1.0	194	13
佳作	13	有明	専攻科	44.0	197	17
佳作	20	神戸市立	都市工	128.0	200	21
佳作	14	高知	建設システム工	48.0	196	16
佳作	15	小山	建築	80.0	199	18

	実耐荷重 (kg)	②順位	耐荷性能 (C.P.)	③順位	予測確度(%)	④順位	順位計	総合 順位
	68.5	2	439.10	3	37.23%	5	12	1
	58.0	4	500.00	2	65.52%	12	19	2
	60.0	3	309.28	4	5.17%	2	22	3
	27.0	10	162.65	8	38.52%	6	27	4
	29.5	8	175.60	7	44.93%	9	28	5
	102.0	1	534.03	1	320.20%	16	29	6
	56.0	5	296.30	5	78.57%	13	32	7
	19.0	13	102.70	13	8.95%	3	34	8
	30.0	7	153.85	9	33.33%	4	35	9
	20.0	12	108.11	12	40.00%	7	36	10
	40.0	6	201.01	6	43.25%	8	38	11
	27.0	10	145.16	10	81.48%	14	41	12
	12.0	17	63.16	17	1.67%	1	45	13
	28.5	9	143.22	11	47.37%	10	48	14
	15.5	15	82.89	15	54.84%	11	49	15
	18.0	14	93.75	14	2734.44%	19	59	16
	9.0	18	46.39	19	88.89%	15	65	17
	9.5	18	48.22	18	363.16%	17	70	18
	14.0	16	70.00	16	814.29%	18	71	19
	0.0	20	0.00	20	-	20	76	20
	0.0	20	0.00	20	-	20	79	21

*グランプリ及びアイデア賞の審査結果はP. 43に掲載



◀◀◀ 作品番号1 darling
石川工業高等専門学校
専攻科 1年 樋本 梨紗 他



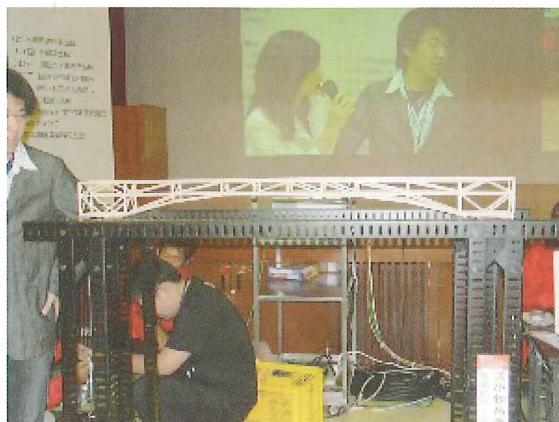
▶▶▶ 作品番号2 青山橋
岐阜工業高等専門学校
環境都市工学科 5年 野田 太門 他



◀◀◀ 作品番号3 (無題)
明石工業高等専門学校
建築学科 4年 長島 隆一 他



▶▶▶ 作品番号4 (無題)
鹿児島工業高等専門学校
土木工学科 5年 藤崎 幸一郎 他



◀◀◀ 作品番号5 (無題)
苫小牧工業高等専門学校
環境都市工学科 4年 菊池 康則 他



▶▶▶ 作品番号6 (無題)
阿南工業高等専門学校
環境システム工学科 5年 森 真也 他



作品番号8 (無題)
高松工業高等専門学校
建設環境工学科 4年 黒田 望 他

◀◀◀ 作品番号7 SENSE
福井工業高等専門学校
環境都市工学科 4年 加藤 俊介 他

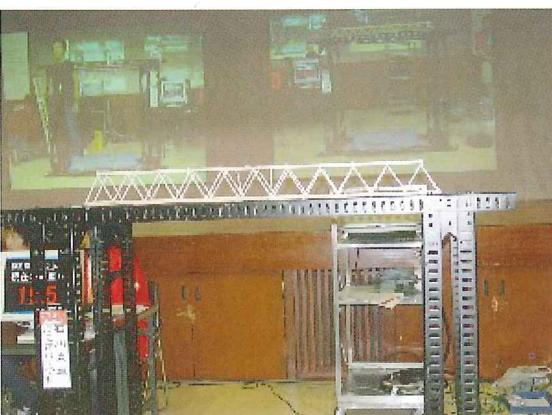


構造デザイン
コンペティション
セッション



作品番号10 Bridge 「CAU(カウ)」
石川工業高等専門学校
環境都市工学科 4年 ドアン・ウ・カン 他

◀◀◀ 作品番号9 もっこす大橋
八代工業高等専門学校
土木建築工学科 5年 山口 浩太郎 他



41 works record



作品番号12 U-18 呉代表
呉工業高等専門学校
建築学科 3年 龍野 友洋 他

◀◀◀ 作品番号11 (無題)
石川工業高等専門学校
建築学科 3年 島口 嵩史 他



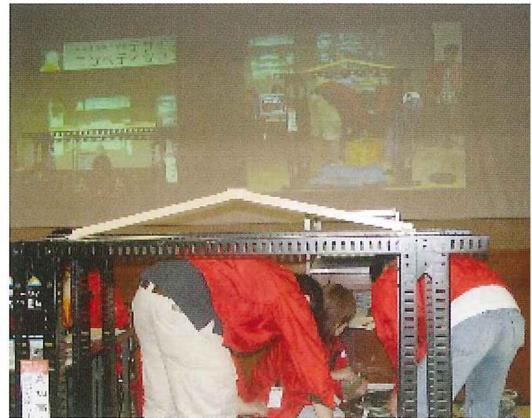
作品・記録

構造デザイン
コンペティション
セッション



作品番号14 (無題)
高知工業高等専門学校
建設システム工学科 5年 小笠原 康人 他

◀◀◀
作品番号13 有明に架ける橋
有明工業高等専門学校
専攻科 1年 舛岡 壮樹 他



作品番号16 八つ橋
八戸工業高等専門学校
専攻科 1年 北山 弘康 他

◀◀◀
作品番号15 猪八戒 of ジョイ・トイ
小山工業高等専門学校
建築学科 2年 柳田 晴哉 他



42



作品番号18 S.E.S
米子工業高等専門学校
建築学科 5年 荒木 優一 他

◀◀◀
作品番号17 カテナリー曲線を用いた、木製
徳山工業高等専門学校
土木建築工学科 5年 野村 尚稔 他



作品・記録 3



作品番号20 (無題)
神戸市立工業高等専門学校
都市工学科 4年 坂下 晃一 他

競技
2位

作品番号19 テトラクインテット
松江工業高等専門学校
環境建設工学科 3年 宮野 雅也 他



構造デザイン
コンペティション
セッション



作品番号21 Simplest ~Sunrise~
豊田工業高等専門学校
建築学科 5年 池田 大樹 他
グランプリ(文部科学大臣賞)・アイデア賞

審査結果

作品番号	高専名	学科名	グランプリ(文部科学大臣賞)				アイデア賞		
			総合順位点	審査員点	技術点	順位	自重順位点	審査員点	アイデア点
1	石川	専攻科	0	127	127	13	1	133	134
2	岐阜	環境都市工	0	107	107	19	0	119	119
3	明石	建築	0	127	127	13	0	141	141
4	鹿児島	土木工	0	126	126	15	3	133	136
5	苫小牧	環境都市工	0	135	135	10	2	127	129
6	阿南	建設システム工	0	139	139	9	0	123	123
7	福井	環境都市工	4	148	152	7	5	135	140
8	高松	建設環境工	1	128	129	11	4	137	141
9	八代	土木建築工	0	143	143	8	0	147	147
10	石川	環境都市工	0	154	154	5	0	126	126
11	石川	建築	5	123	128	11	6	127	133
12	吳	建築	10	167	177	2	8	152	160
13	有明	専攻科	0	113	113	18	0	129	129
14	高知	建設システム工	0	94	94	20	0	119	119
15	小山	建築	0	90	90	21	0	116	116
16	八戸	専攻科	2	151	153	6	0	151	151
17	徳山	土木建築工	0	121	121	16	0	135	135
18	米子	建築	6	157	163	3	0	159	159
19	松江	環境建設工	8	153	161	4	10	153	163
20	神戸市立	都市工	0	117	117	17	0	119	119
21	豊田	建築	3	179	182	1	0	166	166

構造デザイン
コンペティション
セッション

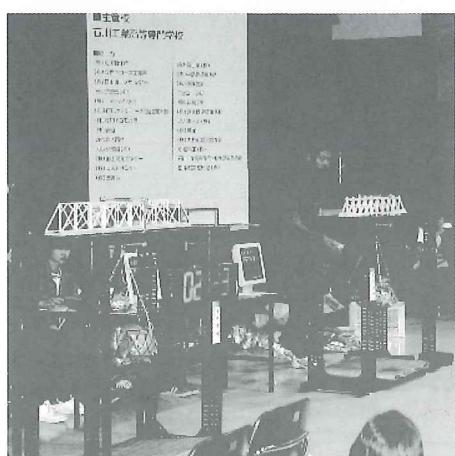


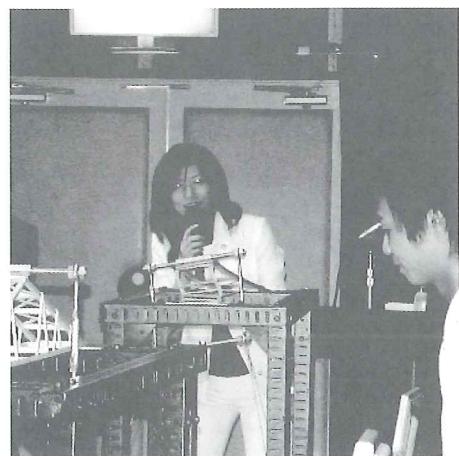
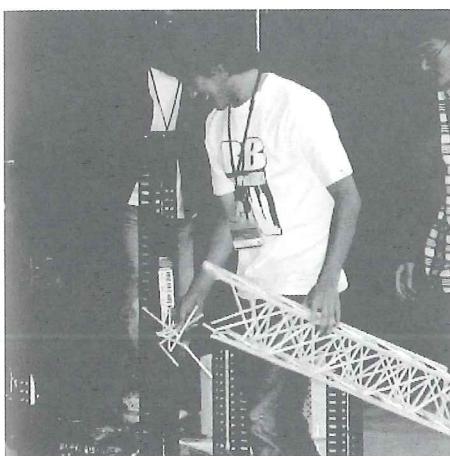
competition
scene

44



会場風景





橋造デザイン
コンペティション
セッション

45 compe
scen

私は、構造デザインの審査をいたしました。その中で、本日参加されました21チームの皆さん、それからグランプリとして文科学大臣賞を受賞されました豊田高専の皆様、本当におめでとうございました。

先ほど講演されました妹島先生は、金沢21世紀美術館の設計をされておりますが、私は、金沢の玄関口であります金沢駅東広に架けておりますガラスドーム、高さ31m、横60m、奥行き40数mの、ガラスを3,000枚使いましたガラスドームの設計及び監修をたしております。その中で、ガラスドームの、上の天井のところに丸い直径12mのリングがございますが、これは張弦材でございまして、テンションリングと言いまして、そのリングでガラスの天井を吊り上げて、押し上げているという構造になっております。このことを考えながら見ていました。是非行っていただければ、と思います。

今日、色々と皆さん方に作品を見せていただきました。私は常々、まちのデザイン、いわゆるパブリックデザインはこういう合に思っております。不特定多数の市民の皆さんのが「ああ、いいもんだな」と思っていただけます。それから長い期間において、10年じゃなしに、100年200年という長い期間において「あ、やっぱりいいもんだな」という具合に思って見ていただけます。これがパブリックデザインだと。建築も、土木の橋梁もトンネルも一緒にございます。デザインのみに走らない。そこが美術品と違うところであります。

今日、色々見せていただきました中で、やはり、技術的なことを審査員長として2、3申し上げておきたいと思います。

まず気がつきましたのは、この審査では推測荷重とそれから最後の耐荷力とのその差、比、これを問題にしておりますが、競レベルが高い水準になっていたことです。つまり、推測荷重を出すときには、力学的な力が、知識がなければなりません。また、それに実験をする必要があります。ここも非常に技術者として大事なことであります。これを推測し、いわゆる当てずっぽうに宝くじのように当てるわけでもございませんが、それと実際にかけてみた荷重との比を問題としている。これが高い精度だということは、非常に、やはり高専のレベルの高さを表現するものと、私は、非常に感心をいたしました。

それから2つめは、これは今後作品をお出しになる方に、私からちょっとアドバイスをいたします。荷重は中心のところで第点で載荷をいたしておりまして、このときには、トラスとか、ボックスガーターとかいろんなものを考えますときに、集中荷重をせます断面の、断面の全体構造と同時に、断面のところに補強をしてないと、その断面のところで変形をいたしまして、それがとで壊れます。全体を見ると同時にこの断面の荷重載荷点の補強、これをお忘れなく、今後おやりになったほうがよろしいんじゃないかと思います。

それから第3点目は、これは製作のときの技術でありますと、材料、それから接点の構造、接着剤、どうつなぐ、そういうことは、やはりこう見てますと、職人技だろうと思います。皆さんは技術者であると同時に、これからはやはり、職人ということを忘れない。ただ私、職人大学の校長をしていますので言うわけじゃありませんが、この大学校は建築系の職人の養成をいたしております。ぜひ皆さんも、職人ということ、つまり、現場を忘れるな、現場100回、必ず現場を見ながら設計をしていく。また工事もしていただきたいと。これが私の感想であります。

全体を見て、やはり豊田高専の作品はおわかりだと思いますけども、やはり構造的に、力学的に、美しい、整ったもの、これがやはり見た目もデザイン的にもすばらしいということあります。構造、アーチを使ったり、トラスを使ったり、また、先ほ言いましたようなテンション材、テンション構造と言いますけども、そういうハイブリッドの組み合わせを使う。そういう技術これがやはり最終的にはパブリックデザインで非常に美しいのではなかろうか、という具合に思いました。

最後になりましたけれども、この非常に素晴らしい競技会の、第一回を石川県でおやりになった石川高専の皆さん、ご苦労様でした。また今日は、馳文部科学大臣政務官がみて、私からお願いしたいと思っておりますのは、是非、このコンペティションを全国的に広げて、末永く、ひとつ文部科学省のご支援を、是非いただきたいということです。高専連合会長からも是非お伝えれば、私の喜ぶところでございます。

非常に簡単でございますが、講評を申し上げました。

本造住居デザイン
コンペティション
セッショ

47

wooden
house

設計競技品

木造在宅デザインコンペティションセッショ



セッションの目的

建築の原点である住宅設計を通じて、人間の生活環境への提案可能性を追求することを目的とします。
またテーマにおいては、幅広い年齢層からの参加を目標とします。

テーマ

「帰りたくなる家」

家は、全ての人間にとて無くてはならないものでしょう。しかし、現代の多くの家族は、会社や学校に住み、まるで家に迷っている様相を感じるごとも多々あります。今や家は、家にいる人と、家のことは何もしない人の対立を示しているのでしょうか？ そういう状況を克服・改善することも含めて、家族の皆が早く帰宅して生活を楽しむことの出来る「帰りたくなる家」を設計して欲しいと考えました。

設計条件

- 敷地条件：ニュータウンの一区画（石川県河北郡津幡町井上の荘）
13m×18mの長方形 短辺（13m）1辺のみ接道、前面道路幅員6m、道路方向を北とする。
- 家族条件：夫婦2人（共に40歳）+ 小学4年生（男）+ 小学1年生（女）
- 部屋条件：寝室、子供部屋、居間的な空間、畳部屋、食事+キッチン、風呂、トイレ、洗面、収納、その他必要と思われる空間。
駐車台数は、2台以上駐車可能とする。
- その他：第1種低層住居専用地域（建ぺい率50%、容積率80%）。垂直積雪量1.0m、全面道路からの離隔距離1階は3m、2階は1.5m（1階カーポートは除く）。隣地境界線からの距離1.5m以上（2階・1階）、高さ10m以下（建築物・工作物などの高さ）。外壁色は周辺の環境と調和したものとする、屋根勾配3.5/10以上・5/10以下、屋根材料色は黒色・ダークグレー等を基調色とする。敷地は電気・ガス等が整備された良好な状況である。

応募先

木造住居デザイン
コンペティション
セッショ

- 事務局：全国高等専門学校デザインコンペティション実行委員会事務局
連絡先：〒929-0392 石川県河北郡津幡町北中条タ1 石川工業高等専門学校 学生課学生係
e-mail：descom4@ishikawa-nct.ac.jp

応募資格

応募時点で高等専門学校に在籍する本科の個人学生（共同不可）。

質疑応答

質疑は、e-mailのみで受け付けます。宛先は、上記事務局まで。電話による質疑は受け付けません。

応募方法

- 用紙：A2判2枚（パネル不可）
図面内容：平面図・立面図・断面図・透視図・模型写真等必要と思われる図面及び説明文。
提出方法：図面裏面右上に所定の用紙に必要事項を記入の上貼り付け、期限までに事務局に持参（17時迄）または郵送（宅配可）。

審査員及び審査方法

各高専で、代表作品（学内選考45作品以内で1点の割合）を選出して下さい。担当教員は代表作品を期限までに事務局に送付下さい。なお本選参加者は1/50の模型を製作・持参し、本選会場にてプレゼンテーションを行います。本選審査員は、各参加から教員1名および学外から招聘するゲスト審査員2名からなる審査員団によって行います。
本選におけるプレゼンテーションおよび審査は、いずれも公開形式とします。

審査員長 熊谷 昌彦 米子工業高等専門学校 建築学科 教授
ゲスト審査員 山田 文代 (株)みづほ建築事務所 代表取締役社長
山中 省吾 オープンネット(株) 代表取締役社長

競技日程

- 募集要項・応募要項の公表・配布：平成16年4月19日（月）
質疑応答期間：平成16年4月19日（月）～5月7日（金）
質疑回答の公表・配布：平成16年5月14日（金）
締め切り（各校担当教員に提出）：平成16年7月13日（火）
各校代表作品提出期限：平成16年7月16日（金）必着
本選（二次審査）：平成16年9月4日（土）

賞

- 最優秀賞（高専連合会会長賞） 1点 賞状 及び 副賞
優秀賞（石川高専校長賞） 2点 賞状 及び 副賞
佳作 若干数 賞状 及び 副賞

1. 審査方法

予選（一次審査）

各高専の代表作品の選出は、7月13日（火）までに各校担当教員に提出された作品を対象に、参加校に所属する2名以上の教員で行う。学内応募45作品以内で1点の割合で、要項・設計条件を考慮の上、テーマに対する提案性のある応募作品を選考、選出することとする。以下、参加8高専における一次審査（予選）の審査員（代表2名）を紹介する。（一次審査応募作品総数239点）

豊田高専：藤谷 幸弘	建築学科 教授、	三島 雅博	建築学科 教授、	助教授、	他6名
石川高専：北田 幸彦	建築学科 教授、	畠 時男	環境都市工学科 教授、	教授、	他7名
明石高専：坂戸 省三	建築学科 教授、	八木 雅夫	建築学科 教授、	教授、	他4名
呉高専：藤井 健	建築学科 教授、	松野 一成	建築学科 教授、	助教授、	他2名
米子高専：片木 克男	建築学科 教授、	高増 佳子	建築学科 教授、	助教授、	他13名
徳山高専：木村 武馬	土木建築工学科 教授、	佐々木伸子	土木建築工学科 教授、	助手	
八代高専：斎藤 郁雄	土木建築工学科 教授、	磯田 節子	土木建築工学科 教授、	助教授、	他3名
都城高専：樋口 栄作	建築学科 教授、	林田 義伸	建築学科 教授、	教授、	他2名

本選（二次審査）

二次審査（本選）は各参加校から教員1名および学外から招聘するゲスト審査員2名からなる審査員団によって行う。プレゼンテーションおよび審査会は、いずれも公開形式とする。

- ・本選参加者1名につき、発表時間3分および審査員との質疑応答時間4分を設ける。
- ・質疑応答は、審査員各自、自由な観点で質問を行う。ただしプレゼンテーション、提案内容、図面表記など総合的に評価することとする。発表者全員のプレゼンテーションおよび質疑応答の後、1回目の投票を行う。審査員の持ち票は1人4票。
- ・得票を公表し、審査員団より各作品に関して講評を行う。この際審査員団は、投票した作品に対しては、どのような点で提案の具体性を評価したのか、また投票に至らなかった作品に対しては、どのような点で提案不足を感じたのかを述べる。
- ・この講評内容を踏まえて2回目の投票を行う。審査員の持ち票は1人2票。最終的な投票結果を踏まえて審査を行い、その上で審査員長が評価を取りまとめ最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作若干数を決定する。

公平性を配慮し、本選および審査会中は、発表者の高専名や学年等を伏せて審査を行う。なお審査投票基準は、課題テーマである『帰りたくなる家』に対する提案性およびその具体性とする。

* また当日の限られた時間内での審査をより充実させるため、事前に予選通過作品に関する資料（事前資料は応募図面2枚の縮小画像、設計趣旨文、基本図面）を、制作者匿名の状態で本選審査員およびゲスト審査員に回覧する。

2. 審査員及び審査団

審査員長	熊谷 昌彦	米子高専 建築学科 教授
審査員	吉村 公男	明石高専 建築学科 教授
	木村 武馬	徳山高専 土木建築学科 教授
	三島 雅博	豊田高専 建築学科 助教授
	中村 裕文	都城高専 建築学科 講師
	森山 学	八代高専 土木建築学科 講師
	村田 一也	石川高専 建築学科 講師
	富田 英夫	呉高専 建築学科 助手
ゲスト審査員	山田 文代	(株)みずほ建築事務所 代表取締役社長
	中山 省吾	オープンネット(株) 代表取締役社長

3 審査記録

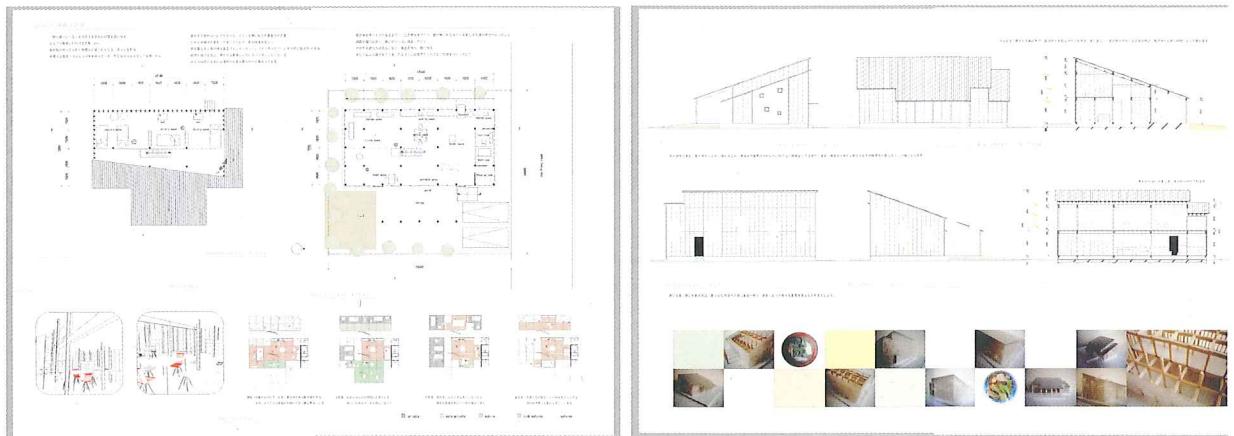
審査結果

審査結果はP. 52に記載。

入賞結果

最優秀賞	『味噌汁の家』	中尾はづき	米子高専 建築学科	5年
優秀賞	「おいしいごはん生活」	伊藤 里佳	明石高専 建築学科	5年
優秀賞	『HOUSE × SPACE × HOUSE』	野村 麻矢	石川高専 建築学科	3年
佳作	家に帰ろう。	福間伊智子	米子高専 建築学科	4年
佳作	集いの家	関 晴香	石川高専 建築学科	2年
佳作	帰りたくなる家	浜川 正薦	都城高専 建築学科	5年
佳作	SPIRAL	今野 貴弘	豊田高専 建築学科	3年
佳作	テラスと離れたある家	尾方美智代	八代高専 土木建築工学科	3年
佳作	NATURAL GALLERIES	近藤 弘幸	豊田高専 建築学科	3年
佳作	巣～ロマンの木に暮らす～	中村 友香	呉高専 建築学科	3年
佳作	PLACE	森 智之	米子高専 建築学科	5年
佳作	お気楽DOMA	和田佳奈美	徳山高専 土木建築工学科	5年

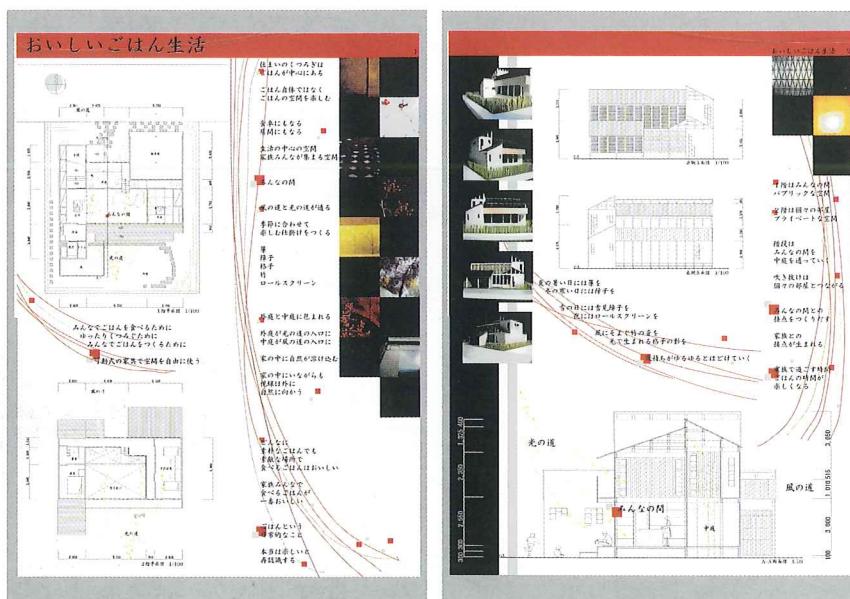
最優秀賞



『味噌汁の家』

米子工業高等専門学校 建築学
5年 中尾 はづ

優秀賞



「おいしいごはん生活」

明石工業高等専門学校 建築学
5年 伊藤 里1

1st & 2nd
prize

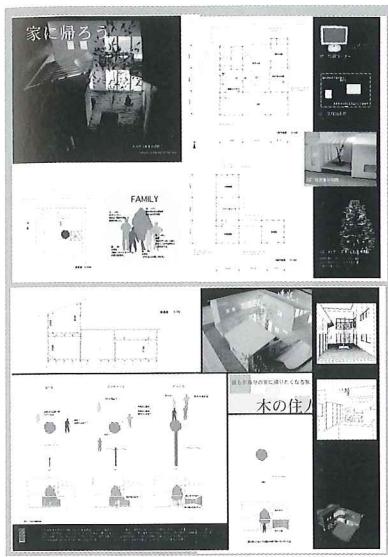
50



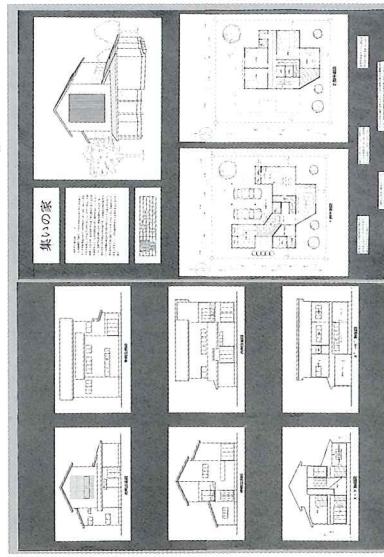
『HOUSE×SPACE×HOUSE』

石川工業高等専門学校 建築学
3年 野村 麻

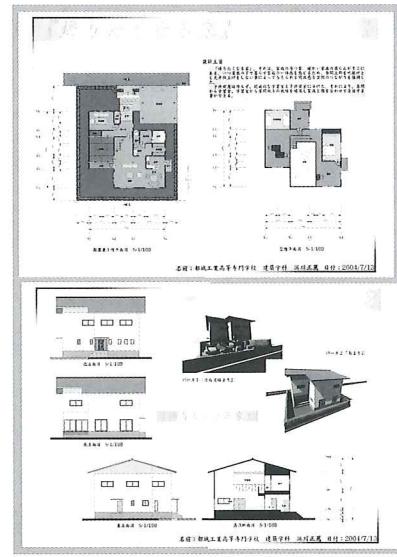
受賞作品一覧



家に帰ろう。
米子工業高等専門学校 建築学科
4年 福間伊智子

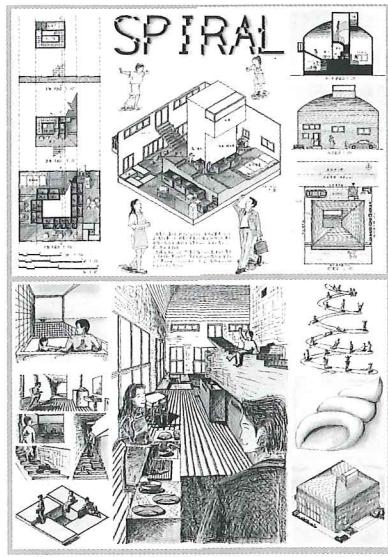


集いの家
石川工業高等専門学校 建築学科
2年 関 晴香

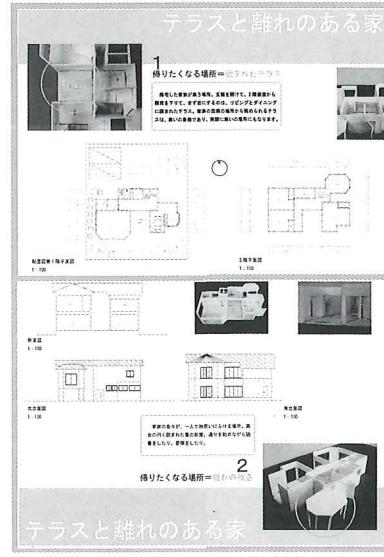


帰りたくなる家
都城工業高等専門学校 建築学科
5年 浜川 正薫

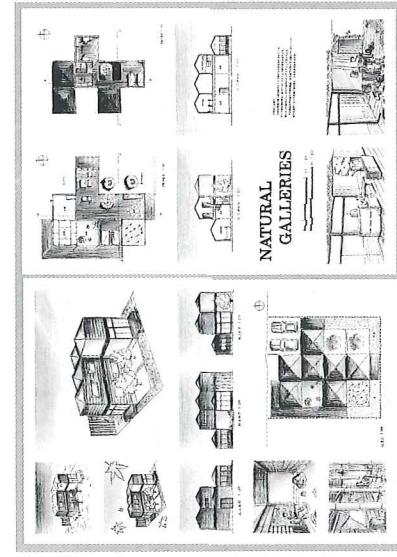
木造住居デザイン
コンペティション
セッショ n



SPIRAL
豊田工業高等専門学校 建築学科
3年 今野 貴弘

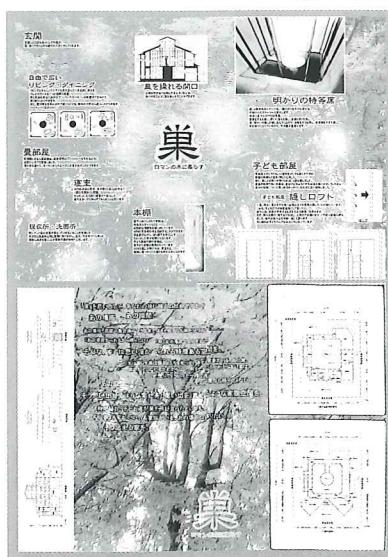


テラスと離れたある家
八代工業高等専門学校 土木建築工学科
3年 尾方美智代

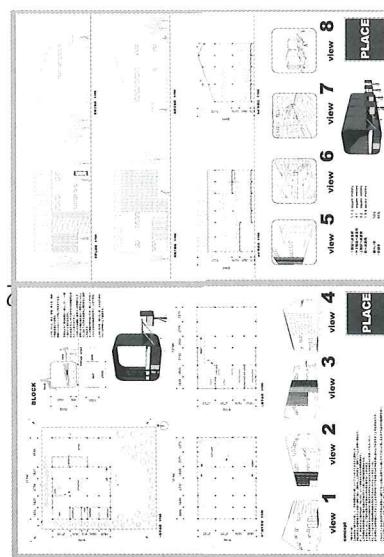


NATURAL GALLERIES
豊田工業高等専門学校 建築学科
3年 近藤 弘幸

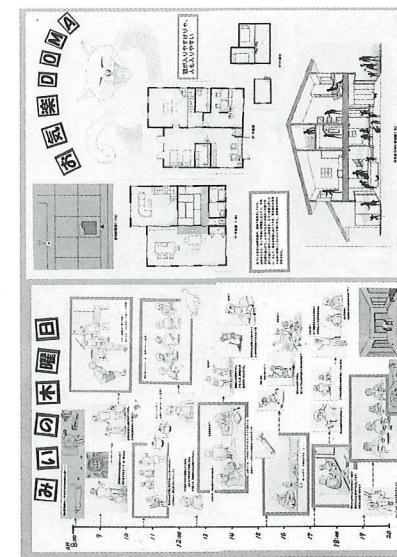
51 honore
ment



巣～ロマンの木に暮らす～
呉工業高等専門学校 建築学科
3年 中村 友香



PLACE
米子工業高等専門学校 建築学科
5年 森 智之



お気楽DOMA
徳山工業高等専門学校 土木建築工学科
5年 和田佳奈美

受賞作品一覧

第1回 審査結果

作品 No.	制作者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	合計
01	中尾はづき											6
02	今野 貴弘											2
03	和田佳奈美											1
04	閑 晴香											1
05	森 智之											5
06	尾方美智代											0
07	中村 友香											2
08	近藤 弘幸											2
09	野村 麻矢											8
10	浜川 正薦											2
11	福間伊智子											5
12	伊藤 里佳											6

第2回 審査結果

作品 No.	制作者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	合
01	中尾はづき											6
02	今野 貴弘											0
03	和田佳奈美											0
04	閑 晴香											0
05	森 智之											1
06	尾方美智代											0
07	中村 友香											0
08	近藤 弘幸											0
09	野村 麻矢											4
10	浜川 正薦											1
11	福間伊智子											3
12	伊藤 里佳											5

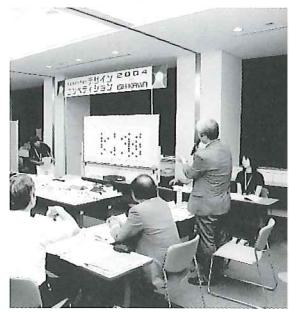
木造住居デザイン
コンペティション
セッション

審査会場風景



results

52



記録 1

最優秀賞



味噌汁の家
この世でたったひとつの味
米子工業高等専門学校 建築学科
5年 中尾はづき

●コンセプト

「家に帰りたいな」そう思うとき母の料理を思い出す。とくべつ美味しいわけでも無いのに、毎朝母が作ってくれた味噌汁がたべたくなる。きっとそれは、味噌汁は家庭一つひとつの味を持っていて同じものはもうどこにも無いから。

家もそうあればいいと思った。どこにも無い私たち家族だけの家。だから味噌汁の家をつくることにした。母の味を中心にして…。家の真ん中に母の味はある。「トントントン…」「グツグツグツ…」きょうのご飯はなにかな?時間が経つと共に、家の中は美味しい匂いでいっぱいになっている。みんなは思い思いの場所から家の真ん中へと集まってくる。

母の味が手づくりであるように、この家も手づくり。壁がないからスペースを自分達の手でつくっていく。時間が経つと共に、思いがいっぱい詰まっていく。やがて子供たちは大人になり、家庭を持ち親になる。そして自分達がそうであったように、この世でたったひとつの味をつくっていく。

(三島)

これまで匂いというのは、排出する対象であったのに対し、この提案では家をまとめる材料として扱われている点が非常に面白い。

(森山)

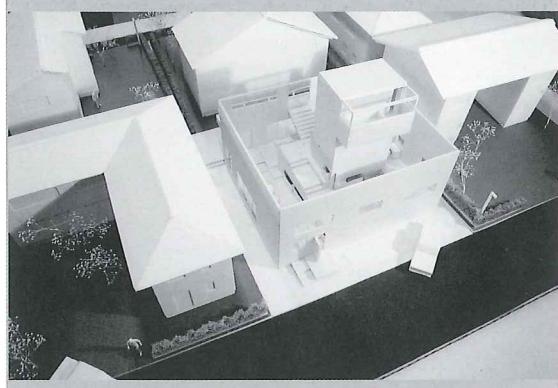
①テラス、②エントランス・ホビースペース、③LDK(上階に個人スペース)の三層構成が、オープンな1つの空間の中で実現している。勾配のある天井が、二階から①さらに②を見下ろす視線を導き、この「家」を一体化している。「味噌汁」の作る風景、食べる風景、香りなどが、「家」全体をさらに一体化する鍵となれば、タイトルに相応しい作品となるだろう。

(山中)

木造として軸組はシンプルに計画されている。印象的な大面積のガラスの外壁は、北陸の冬の気候には厳しいようにも思うが、ガラスと、光を透過するペットボトルを再利用した断熱材などをうまく工夫すれば対応可能である。しかし西日対策も兼ねて部分的に壁を設け、外観にアクセントを加えることも出来ただろう。また庭とテラスは、屋外と屋内との空間のつながりをうまく作りだしていくとても良い。

SPIRAL

家族がいるという安心感を持てるように
どんな場所からも家族を見ることが出来る家



SPIRAL
家族がいるという安心感を持てるように
どんな場所からも家族を見ることが出来る家
豊田工業高等専門学校 建築学科
3年 今野 貴弘

●コンセプト

人は家に「家族と一緒にいるという喜び、安心感」を求めている。帰りたくなる家というのは、家の中でいつ、どんな場所からも家族の姿を見ることができ、家族と一緒に暮らして楽しいと感じができる家ではないだろうか?

この家には

- ・室の配置を螺旋状にすることで動線も螺旋状になります。移動するには必ずそれぞれの室を通る
- ・室と室との境には壁を設けない
- ・様々な高さを施し、家族が一直線に重複せず家族をいつでも見ることができる

などの特徴がある。

様々な高さを施すことで場所によって違った景色が多種多様に存在する。外から見て分かるようにこの家の頂上には四角い空間が屋根から飛び出している。

これは脱衣・洗面所から螺旋状の階段で繋がっている浴室である。ここから日本海が見渡せる。外壁がシンプルであるため外からはすぐこの浴室が目に入りランドマークとなっている。室を螺旋状に配置してできた中央の空間を収納空間として利用している。

木造住居デザイン
コンペティション
セッショ

53

record

(熊谷)

内部についてはスパイラルが活かされ、視覚的にも表れているが、そのスパイラルということが外部空間、外観には特に反映されていない。またスパイラル状の動線が内部空間で様々な見え方を創り出す点は面白いと思うが、落ち着けなさそうという点で、大切にしようとしているはずの安心感が、逆に無くなってしまうのではないかだろうか。

(吉村)

プレゼン図面のインテリアのスケッチは良く感じが出ていて良い。十分な物入れや、設備コアが少し偏心しているのも良いだろう。しかし素っ裸で階段を上り下りするワイルドな感じや、親子が仲良く4人が川の字で寝る期間はそれほど長く続かないのではないだろうか。その点、少し長いスパンで考えると疑問が残る。

記録 2



木造住居デザイン
コンペティション
セッション

●コンセプト
気づくと見知らぬ野良猫が、縁側で昼寝をしていた。近所の人とも、そこで気楽に世間話しをしたり、子供が土間で遊んだり。人々のつながりが深かった数十年前にはあたり前だったこの光景を、もう一度取り戻したい。そして、誰もが気軽に出入りでき、家を新たなる発見と出会いの場にしたいという想いから、お気楽“DOMA”が生まれた。



●コンセプト
「帰りたくなる家」というテーマに対し、人を軽に呼べるような家を考えました。まず玄関で家:二つのゾーンに分けました。リビングやダイニングといった生活感のある空間は家族や親しい仲の友人と過ごせる場所として、玄関を含む離れのような空間は近所の人や突然のお客さんをむかえることができる場所として計画しました。さらに、動線を回すことによって、空間どうしにつながりができる、そつながった空間を広いスペースとして使うことがあります。こうしたスペースを利用すれば、なかなか家では出来なかった年中行事のイベントも友人や戚を呼んで催せます。そうすると、家族が家で過す時間も増えるだろうし、誰が家に訪ねてきても、お互いあまり気を使わずにすむので、一度訪れたに「また来てみたい」と思われたり、十数年後に供が独立してしまった後でも家中が寂しくならないように、その子達が帰ってきやすいような家になりました。

record#3

54

(三島)

私の知っている土間というのは、天井が吹き抜けで非常にダイナミックなイメージがあるのだが、提案されている土間スペースは天井高さが押さえられていて、吹き抜けを介した2階との接点も遮断されてしまっている。せっかくの土間スペースの立体的な良さが活かし切れていない。

(山中)

私は投票していないが着眼点がよいと思った。この作品以外は、どちらかというと家族がどのように楽しめるのか、あるいは私が楽しむか、僕が楽しむ、という観点からの提案だった。それに対しこの作品は、地域の人に、あるいはこの道路沿いの人たち、近所の人にどうやって家を開放するか、同時に集まってもらうか、という地域のコミュニティ形成に着眼点がある。ただしそのコンセプトが、あまり上手に設計には活されていない。もっと思い切って通りに解放するぐらいが良かったのではないだろうか。それでもなければタイトルのような、お気楽な雰囲気は作り出せないだろう。

(福田)

図面だけでは感じられなかつたが、プレゼンテーションで提示された模型を見て非常に綺麗だと思った。正面の格子はバランスが良いと思うが、特に戸団というか提案が関連していない点が残念だった。

(三島)

人を気軽に呼べるというコンセプト、および状況に応じて複数のスペースで招待できるという提案は良い。しかし、そのスペースへのアプローチと、ライバシーの高い浴室などへの動線が交差している点は矛盾するのではないか。また玄関へのアプローチを兼ねた駐車場の大きさ、自動車との隣接関係は、う少し検討する必要があるだろう。



●コンセプト
この家は「帰りたい家」＝「子供が帰りたい家」というコンセプトをもとに設計した。子供が好きな空間を考えたとき高い場所・隠れることが出来る場所ということを思い浮かべた。そこでこの家では2階に「BLOCK」という家族それぞれの空間を設けた。このBLOCKは寝る・考える・勉強の機能を持っている。移動させることに子供の成長や心情の変化にも柔軟に対応できる。また食堂・居間・個人空間を違うレベルに設置することにより部屋と部屋との移動が魅力的なものになるとを考えた。これらのことから家のなかで子供は家族と一緒にいたいと感じる時でも一緒にいたくないと感じる時でも自分の居場所をもつ。それは自然に子供にとっての「帰りたい家」となる。またお父さんやお母さんもこのよう子供の気持ちを感じこの家が「帰りたい家」となる。



●コンセプト
テラスは家全体を明るく過ごしやすい空間にしてくれる。また窓を開け放つと、リビングーテラス・ダイニング・キッチンという「大広間」となる。天気が良い日には、この「大広間」で家族や親類、友人達と食事をするなど、楽しい時間を過ごすことが出来る。食事などが済むと、子供達は庭で遊び、両親達は子供達の姿を見ながら寛ぐことが出来る。春はここで夜桜を楽しみ、夏は月や星を見ながら夕涼みをして楽しむ。また、秋は虫たちと夜長を楽しみ方を楽しむのもいいだろう。冬はテラスに積もった雪をリビングやダイニングから眺める、こんな楽しみ方もいいかもしれない。この様に、このテラスは「使う庭」と「眺める庭」の両方の機能を兼ねている。離れは、中二階になっており、一階部はピロティになっている。内部は三畳ほどの和室となっている。誰だって、ときには「一人になりたいな…」と思うこともあるだろう。そんな時には、この離れで一人のんびり過ごすのもいいかもしれない。

木造住居デザイン
コンペティション
セッション

(富田)
提案しているブロックが、屋内でスムーズに移動するのは少々困難だと感じられる点が気になった。

(三島)
内部空間でのブロックの提案と、屋根を含めた外観での意図、関連性が良く分からず。

(山田)
プランとしては面白い。また自分の居場所を持つことが非常に大切な要素だという提案にも納得が行くのだが、よくプランをみると、あまり反映されていない。収納スペースに関してはブロック内のベッド下に納めるということだったが、個人の持ち物には十分でも、家族としては不足だろう。つまり家族みんなでという全体としての提案が不足している。また提案内容が、やや対象年齢を限定しているように思われる。

(富田)
プレゼンテーション図面の表現の点で不足、不備がある。提案している離れの和室は、ほどよく主空間から離れており、また1階でも2階でもなく、平面的にも断面的にも中間的な場所に位置しています。これらは、提案にある「一人になりたい」という考えが、良く表現された部分です。

(中村)
離れの和室は、家族と独立して一人になれる場所として提案されているが、上下階を唯一繋いでいる階段のおどり場付近に位置していては、あまり落ち着きがないのではないか。

(熊谷)
離れの場については、もう少し計画を詰めてゆくと、よい提案になったのではないか。同時にそのことが図面で十分に表現する必要があるだろう。



本造居デザイン
コンペティション
セッション

● コンセプト

「家」を思いだして、浮かぶのは、「あの場所」、「あの瞬間」といったものであると思う。それが良いものであればあるほど帰りたいと思うのだろう。しかし、ただ寝て起きるだけの部屋の集合体のような渴いた家なら、何も思い浮かべることが出来ない。あの場所…、そんな、すぐに思い浮かべられる特長ある空間を。あの瞬間…、そう思い出せるような幸せを、思い出を、育めるような家族空間を。

家の真ん中に立てば、家中を見渡せる。家の中に秘密基地がある。家の中に本に囲まれる場所がある。家の中にロマンチックに浸れる場所がある。

家が、世界で一番リラックスできて、世界で一番自分を出すことができて、世界で一番自分を理解してくれる場所になるといい。



● コンセプト

仕事や学校、あるいは家事で人々はストレスや疲労を抱えて家に帰る。疲れた心と体を癒してくれる「やすらぎ」のある家。そんな家に人々は帰りたいと思うであろう。自然の景色は人々に「やすらぎ」を与えてくれる。この家は様々な自然を取り入れるために種類の違う庭をいくつも設けている。庭を望む窓は一枚ガラスにしており、庭の景色をあたかも額に入った絵のように見せて室内のインテリアとして取り入れている。その絵は四季の変化や時の経過天候、または庭で子供が遊ぶ様子といった様々な条件によって多様に姿を変えるため庭を眺めるのがより楽しくなる。部屋は4050mm×3600mmグリッドの置となっている。各グリッドから方形屋根ができるので凸凹として他とは違うインパクトのある屋根となっている。

record#5

56

(村田)

図面の方を見ていくと、非常に細かな箇所が特にいろいろと計画できている。しかしどうしても全体構成のレベルでの計画不足が気になる。また少々外観に奇抜さを感じる。そのバラツキにより、提案としては明瞭性に欠けてしまっている。細かいところを考える力はあるので、全体や外観とのバランスを取って詰めてゆくと、もっと良くなつたのではないかだろうか。

(山田)

印象は非常に奇抜だが、しっかりと構造計画が成されている。またその奇抜さの中にも両親の老後を視野に入れて玄関の近くに寝室を配置した点、十分な収納、実際に使用しやすいキッチン計画など、非常に細かな点にも配慮が感じられる。

(中村)

提案されているステージが他者に開かれた舞台ではなく、視線も音も遮断されたスペースであり、家の規模、階高の関係からステージはリビングダイニングからは見えにくい。逆に一階を見下ろす監視的スペースになってしまふのではないか。

(森山)

グリッドを用いながらも上手にそのグリッドのフレを作りだし、いくつかの種類の庭をつくっていく点に興味深い。しかし、その庭が抽象的に感じる。「癒し」をテーマにする場合、園芸治療法という例あるように、観るだけではなく、身近に触れられるような庭をつくる方がテーマに相応しい作品となるだろう。また庭の抽象的な印象は、外観にもそのまま現れている。実際どのように使われていくのかを一つ一つ具体的な場面を考えながら、設計を詰めて欲しい。補足として、「四季を感じる」と言うならば、木一本で四季を感じるよりも、いくつかの木や花があった方が感じられないだろうか。

(山田)

非常にプランとしておもしろく、デザイン的にもいい。しかしそくプランをみると、ダイニング、リビング、キッチンのあたりの使い方には計画不足を感じる。また洗面、トイレ、浴室、脱衣室への動線2階への外階段など、多様な動線は非常に面白い言葉だが、そのことと「帰りたくなる家」というテーマの接点に明解さが感じらなかつた。

優秀賞

『HOUSE×SPACE×HOUSE』

『みんなで楽しく食事のできる家』



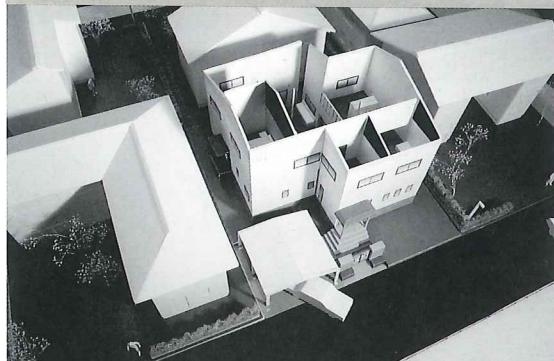
石川工業高等専門学校 建築学科
3年 野村 麻矢

●コンセプト

まず、今回『帰りたくなる家』というテーマで私が大切にしたかったのは『食事の時間』です。家族とのふだんの食事はもちろん、外からお客様を招いての食事というのもたのしめるはずです。ゆっくり食事をするために、外へは壁を多くするなどして閉鎖的に、逆に内へは開口を大きくとり開放的になるように考えました。外へ対して閉じたことにより周りに建物が建ってもプライバシーが守られます。また、内へ対して開いたことにより、この家の二つのボリュームの間のスペースを有効に利用することができます。

帰りたくなる家

家族の待つ家・暖かい団らんがある家
一つ屋根の下家族の一体感を感じる家



都城工業高等専門学校 建築学科
5年 浜川 正薦

●コンセプト

「帰りたくなる家」。それは、家族の待つ家。暖かい家族の団らんがそこにある。一つ屋根の下で暮らす家族の一体感を感じるため、居間上部を吹抜けとし、天井仕上げをしない事によって与えられる開放感と空間のつながりを強調した。

子供部屋は作らず、開放的な学習室と子供寝室に分けた。それにより、居間から学習室、学習室から居間双方の視線を確保し家族と顔を合わせて会話する事ができる。

木造住居デザイン
コンペティション
セッション

(木村)

一番魅力的な作品なのだが、中庭的な場所の扱いが未解決に感じた。開放できるトップライトの屋根の部分は、利用上の雨がしげる点では有効だが、テラス的な中庭としては、やや中途半歩が残った。

(熊谷)

家族に限らずお客様も含めて「みんなで楽しく食事のできる家」という構想はよい提案である。しかし食事を楽しむことを主たる提案にしている以上、食器棚や収納などの配置は具体的に示して欲しかった。

(三島)

東西の二つの棟に挟まれた部分が屋外とも室内ともいえない空間を形作っているが、やや全体が屋根で覆われすぎた感があり、リビングやダイニングが、その中庭的テラスに開いても、それは一つの室内に對して開いているような感覺しか与えられないのではないか。トップライトが設けられてはいるものの十分な開放感は期待できないと感じた。しかし敷地全体を建築と共に総合的に捉えた作品であり、完成度は非常に高いと言える。

(木村)

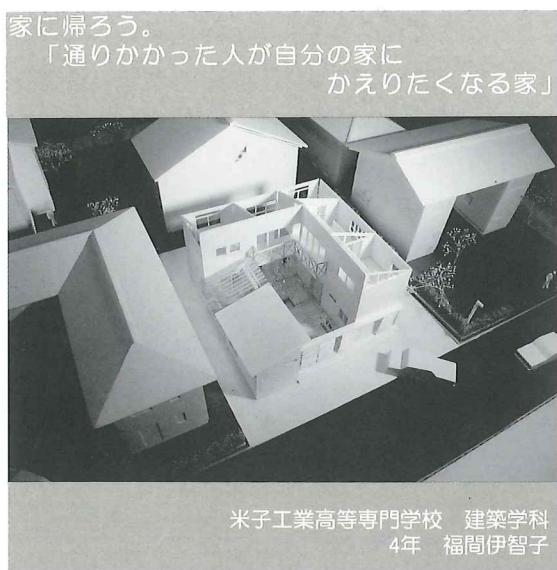
外観がどことなく建て売り住宅のような、どこにでもありそうな印象なのですが、内部における居間を中心とした吹き抜けを介して、家族がお互いの存在をほのかに感じながら生活できるように工夫された計画は好感が持てる。

(吉村)

内部のプランニングは良くできていると思います。しかし周辺との調和を重視したとはいえ、外観は提案性に乏しく、少々平凡すぎる感があるのは否めない。

(富田)

吹き抜けを中心に、家族が活動する部屋が配置されているのが特徴だが、その他を含め、おそらく構想していることは、提出された図面で十分に表現されていると思う。しかし地域特性や周辺環境、隣接する住宅との関係も含めて、提案内容を詰めてゆくと、具体性が増して、非常に力強い提案になったのではないか。もう少し広い文脈の中で、家族や住宅を捉える視点をもって欲しい。

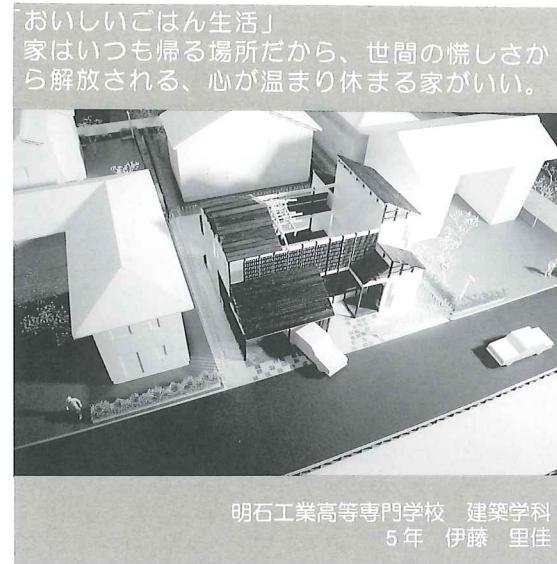


本造住居デザイン
コンペティション
セッション

●コンセプト

「帰りたくなる家」を考えた時、住人はもちろん、少し視点かえて、町にむかって影響をあたえられるような家したいと思いました。自分が帰りたいと思う家の要素「待っている人がいる家」を形にしました。

優秀賞



●コンセプト

住まいのくつろぎの中心と家族で過ごす時間の中心には“ごはん”がある。それはごはん自体ではなく、ごはんの空間”。この“ごはんの空間”を、食卓にも居間にもなる家族みんなが集まる空間、“みんなの間”にする。“みんなの間”には風の道と光の道が通り、季節に合わせて楽しむ仕掛けをつくる。夏の暑い日には簾。冬の寒い日には障子。夜にはロールスクリーン。風にそよぐ竹の音。光で生まれる格子の影。日々の変化を楽しみながらのんびりとくつろいでいると、気持ちがゆるゆるとほどけていく。また家族で過ごす時間を楽しむための仕掛けをつくる。ごはんを食べるとき、ごはんをつくるとき、ゆったりくつろぐときなど、可動式の家具で空間を自由に使う。どんなに素朴なごはんでも、素敵な場所で食べるごはんはおいしい。家族みんなで食べるごはんが一番おいしい。おいしくごはんを食べる生活。“ごはん”という日常的なことを本当は楽しいと再認識する。

(山田)

この作品は、通りから居間が見えるということを提案上重要視していたと思うが、実際この奥の方にあるLDKの姿が果たして本当に通りから見えるか?という疑問がある。そのためコンセプトである、通りがかった人もそれを見てはやく家に帰りたくなるという内容にも実感がわからなかった。

(村田)

平面、断面は、よく考えており、基本的に中庭を中心にコの字型で諸室を配置し、ひだまりの間を一旦区切るというのは面白い。二階もフリースペースをとって子供部屋を曖昧に区切ったりと配慮が行き届いている。

(中村)

主要な提案場所であるキッチンの作り方に疑義がある。それはキッチンが玄関から直接見える位置にあり、来客者からシンクなどが丸見えである点、および家事スペースがコンパクトにまとまっている反面、台所を通過しなければ浴室や洗面トイレに行くことができない点は、意図的というよりは検討不足と言わざるを得ない。

(三島)

「みんなの間」というLDKを中心とし、LDKの北側室内に「中庭」という空間が特徴的に設けられている。また「風の道」「光の道」なるものが考えられていて、自然を取り込もうとする姿勢には好感が持てる。ただし中庭はかなり閉じられており、断面図からは通風・採光に関する有効性には疑問が残った。

(山田)

プレゼンテーションのソフトの面で、とても上手に説明がなされた。ただし家族同士のいい関係があって、初めて帰りたくなるという意味の説明であつただけに、ハード面の建物だけで表現するには非常に難しい提案ポイントだと思った。

● 審査員 吉村 公男 明石高専

第1回投票で8点はコンセプトとの関連で問題点が大きいと判断し投票しなかった。「『味噌汁の家』」：全体の空間が大味に過ぎる。「SPIRAL」：木構造の提示がない。「お気楽DOMA」：土間のデザインに魅力がない。「集いの家」：中心的なリビングが狭い。「テラスと離れのある家」：離れや外構が漫然としている。「巣～ロマンの木に暮らす～」：日常的な生活の場所が犠牲になっている。「『HOUSE×SPACE×HOUSE』」：2FでSPACEが生きない。「帰りたくなる家」：リビングの使われ方に提案が乏しい。

第2回投票では次の2点を上位とした。「家に帰ろう。」：社会的方位を感じさせ、個人個人の家を想わせるという点でユニークである。「おいしいごはん生活」：食を中心とする室が内外にうまく繋がっている。残り二つ、「PLACE」は移動家具のデザインがやや概念的で、「NATURAL GALLERIES」は建物細部のデザインが未熟であり、惜しかった。

● 審査員 木村 武馬 徳山高専

木造住宅デザインセッションは総じて成功だった。「帰りたくなる家」というテーマは平易な割に、漠然として回答の出しにくい内容もある。提案（回答）は、家族の団欒や結びつき、コミュニケーションを重視するもの、それを超えた更に幅広い交流を目指すもの、具体的には「食」にそれを見出そうとするもの、などが大半を占めた。形の斬新さに比較すると、コンセプトはやや常識的な範囲にとどまり、どの提案も予想の範囲を超えるものではなかった。個人的には、もっと個性的、あつと思わせるような回答を期待していた。また、個々の作品については、空間の意図の不明なもの、計画の不自然さやディテールの詰めの甘さの目立つ作品も目についた。最終的には、コンセプトのユニークさとプレゼンテーションの完成度、その両者のバランスのとれた作品が勝ち残り、妥当な結果になったのではないだろうか。事前の資料閲覧、2段階の審査、公開審査などの運営方法は、適切であると同時に応募者審査員双方にも親切であった。

● 審査員 三島 雅博 豊田高専

全体を振り返ってみて気づいた問題点としては、当然かもしれないが、応募者審査者ともに作品の完成度に対する観点にばらつきがあったことである。作品はちょっと実現が難しそうな冒険的なものがあるとともに、一般的な市民にとって実際にわかりやすく住み易そうな現実的な提案もあった。第1次審査は各校が独自に行つたものであるから、各高専の独自性が出たのであろう。最終審査で最優秀賞及び優秀賞に選ばれた作品は冒険的であるとともに形態的に完成度の高いものであったが、結果として、その作者は2名が5年生であり、経験の差が結果に現れていたと言えなくもない。すなわち、完成度の高さが高い評価に結びついたように思える。上記の賞に選ばれなかった作品にも、完成度は高くないが建築としての可能性に興味深いものが見られ、高専生を対象としたコンペでは、今後このようなものに対する評価（アイデア賞など）があつても良いように思う。

木造住居デザイン
コンペティション
セッション

● 審査員 中村 裕文 郡城高専

木造セッションでは、応募の設計者がまだ設計を始めて間もない2年生から、5年生まで異なった学年の学生が集まつたにもかかわらず作品のコンセプトがしっかりしていたのが印象的だった。事前に図面を拝見し、疑問点を整理することが出来た。そして公開審査会当日のプレゼンテーションでは模型も加わり、より詳しく提案内容を確認することができ、短い時間で効率的に吟味することができた。全般に作品のコンセプトや詳細を通じて木造セッション参加者の生活背景や地域特性をかいだ見ることができたようだ、あらためて日本の地域の自然・社会の環境の違いを考えることができた。おそらく今回の課題テーマである「帰りたくなる家」に対して、応募者である15～20歳の学生達はこれまで生活してきた家、これまで一緒に過ごしてきた家族像が根強く関係しているのだろう。しかし一緒に暮らす親世代の気持ちや価値観を、どこまで対象化できたのかに関しては大きな疑問が残った。

● 審査員 斎山 學 八代高専

ニュータウンの一区画という中性化された敷地であったため、ほとんどの作品が今回のテーマそのものを純粹に追求し、そこから「家族」を問っていた。フレキシブルに家族関係を変えていくもの、地域コミュニティの中に家族を置いてみるもの、家族から家族の一員であることを取り出し両立させようとするもの、毎日が楽しくてたまらない家族像を描くもの、家族でありつつ家族であることを見られることを意識したもの、食や樹に家族間の媒介や象徴のような役目を担わせるものと、各自に独自の考えが現れていた。それがかたちになるプロセスでいかに説得力をもって具体的に実現しているか、つまりコンセプトが一人歩きすることなく設計案に垣間見える日常生活に結びついているか、あるいは家族としてその豊かさを暮らすことができるか、その小さなドラマの一つ一つをポイントに審査した。この「家」で暮らせば楽しいだろうな、という案に票を投じた。

59 judges
evaluation

● 審査員 村田 一也 石川高専

審査に際して、設計指導の立場から空間構成という点に特に重点をおいてみていた。提案された「家」において、それぞれの機能を担わせられた内部・外部の空間がどのように組合わされているか、そして、その組合せのあり方がそこに住まう家族の生活にどのように関係するかということが、コンセプトとともに図面にしっかりと現れているものを選ぼうとしていたように思う。さらには空間の連接が一個の住宅として現われてくる時に、その外観としての現われが空間の連接を直接に現わしているような作品を選んだつもりである。

新興住宅地の一画を敷地とし前面道路に接する以外は3方を隣地に接するという関係上、建物以外の部分（地の部分つまり外部空間）がいか様に、生活のなかに取り込まれ、建物のなかに取り込まれるかという点も重要と思われた。その点で、発表者の作品を分類すると大きく2種類に大別され、それらは建物（住宅）が内部で完結するものと建物（住宅）が外部に開いていくものであった。建物を内部で完結させすぎると外観の表情が貧素となり、建物を外部に開きすぎると生活が困難となる。そのバランスをとつて、住宅平面として巧くまとめ上げられたものに一票を投じた。

● 審査員 富田 英夫 呉高専

今回の審査基準は大きく1～3段階に分けられると思う。

まず1段階は、図面を正確に書いているかである。図面は建築を表現する方法であるから正確に書かなければ誤解を受けてしまう。

次に2段階は、時間と機能との対応である。1日、1年、10年というような色々な単位での変化に対応できるかということが問われる。

最後に3段階は、アイデアと住宅の釣り合いである。アイデアが妥当な方法で住宅になっているか、現実離れした住宅になっていないかということである。これは設計した住宅に自分が住めるか、というのが一つの基準になるだろう。

全体としては本審査における模型を使ったプレゼンテーションで新たな情報が示され、各案の魅力が示されていたが、上記の3段階から言えば、各案のアイデアを住宅という形にし、その良さを表現する力に差があり、それが審査結果に反映された。

● 審査員長 熊谷 昌彦 米子高専

今回の「木造住宅デザインコンペティション」のテーマは「帰りたくなる家」である。このテーマは、現代の家族にとって、すでに家が居場所ではなくてなっている状況に警笛をならすものである。テーマの内容に見て取れるように、「会社や学校に住み、家に通っている様相を感じる」というフレーズや「今や家は、家にいる人と、家のことは何もしない人の対立を示しているのでしょうか?」との問いかけにも表されている。そして、「家族の皆が早く帰宅して生活を楽しむことの出来る『帰りたくなる家』」の設計提案を求めている。

敷地は、具体的であり、石川県河北郡津幡町のニュータウンで、第1種低層住居専用地域の指定のある13m×18mの長方形の区画を想定している。家族条件は、夫婦2人（共に40才）と小学生4年生（男）・小学生1年生（女）の子供2人の4人家族である。その他部屋条件である寝室、居間、食事+キッチン等や駐車台数2台以上確保することが求められている。なお、垂直積雪量は1.0mである。

今回の「木造住宅デザインコンペティション」では、敷地や家族・部屋の条件のもと『帰りたくなる家』をどのように学生が解釈し、新しい考え方をもって具体的な提案としたかが審査の基準であった。

参加8高専で学内応募45作品以内で1点を選出する方法による予選（一次審査）がおこなわれ、12作品が本選（二次審査）に進んだ。参加8高専から各教員1名と学外から招聘するゲスト審査員2名からなる10名によって本選の審査を行った。

本選の審査は、2004年9月4日の津幡町役場2階大会議室で9時～12時に行われた。審査は公平公開を原則とするため、プレゼンテーション及び審査会を公開とした。審査は2回の投票と討議を経て行われた。

第1回目の投票では、審査員持ち票1人4票のもと、5作品が5票以上の得票を得て、7作品が2票以下であった。これは、各自が提案したコンセプトが、具体的な図面である配置・平面・断面・立面・模型として表現されているか否かを基準として審査した結果である。

木造住居デザイン
コンペティション
セッショング

各自審査員が意見を述べたうえで、第2回目の投票を、審査員持ち票1人2票で行った結果、中尾はづきさんが6票、伊藤里佳さんが5票、野村麻矢さんが4票を獲得した。この3名は、第1回投票においても、6票以上を獲得している点で、提案性の高さと表現力を審査員全員が認めている作品である。

最優秀賞となった『味噌汁の家』（中尾はづき作）は、「母の料理」から出る香りが家族を結びつけ、「母の味が手作り」の連想からスペースを自分たちでつくっていくというコンセプトをつくりだしている点が興味深い。全体をワンルームとして考え、各自がコーナー等を利用しながら居場所をつくる行為を認めると共に家の中のどこでも家族の存在を感じられる状態をつくろうとする点を評価した。

優秀賞である「おいしいごはん生活」（伊藤里佳作）は、「心が温まり体まる家がいい」との思いを、みんなの間を中心とした計画として表している。また、「光の道」「風の道」という自然を取り込もうとうとするアイデアも良い。コンセプトの明快さや環境配慮の姿勢に好感がもてたが、台所の位置や動線上の不都合、風の道や光の道の意味の不明確さ等が指摘された。

優秀賞である『HOUSE×SPACE×HOUSE』（野村麻矢作）は、「家族全員が食事の時間を楽しみに帰ってくる家」がコンセプトである。東西二つの棟とそれによって挟まれた空間が屋内外をあわせもつ空間を形成しており、食事空間として魅力的な空間づくりを志向している点を評価した。アイデアやデザイン性は高い評価を受けたが、建蔽率等の法規への理解を含め、収納等居住者の具体的な利用の視点からみた不具合が見られ、配慮が求められた。

『帰りたくなる家』の12作品は、概ね、人とのつながり、居場所、やすらぎ、自然、食のキーワードであらわされる。形として見ることはできないが大切なテーマを提示している。そして、最優秀作品、優秀作品は、すべて食をキーワードにして家族がつながるコンセプトであり、女性の作品であった点が特徴的であった。「帰りたくなる家」というテーマは住宅設計の永遠のテーマであると思う。今回のコンペティションを糧にして、学生がさらに切磋琢磨することを願う。

judges'
valuations #2

60

● ゲスト審査員 山田 文代

資料をいただいて、テーマ『帰りたくなる家』についていろいろと考えてみました。

- ・人間が帰りたくなる場所（家）には、その人の原風景がある。
- ・五感全てが満たされたとき、人は最も快適だと思う。
- ・使いやすさをクリアしないデザイン（スプーンから家に至るまで）は、価値が無い。

等々、先人の言葉が浮かんできました。

各々の作品の中に、4人の家族の動きを頭の中で描きながら、説明を聞かせていただきましたが、どの作品も力作ぞろいで実際迷っていました。考えをまとめる前に、説明を求められたので、欠点だけを取り上げて、良い点をあまり言えなかった事が今でも心残りです。

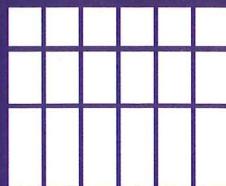
● ゲスト審査員 山中 省吾

木造の橋梁が何kgの重さに耐えるのか、というブリッジ・コンテストは、観ていてハラハラドキドキだったが、勝負は明快だ。それに比べ一般的に設計コンペは、評価ポイントをどこに置くかによって結果はまちまちになってしまう。今回の『帰りたくなる家』という住宅建築のコンペでは、具体的な提案性を評価する観点として、以下のようないくつかのポイントを重視して審査に臨んだ。誰にとって「帰りたくなる家」なのか。父か、母か、それとも子供たちか。あるいは家族みんなが帰りたくなる家なのか…。応募者（学生）自身の趣味や趣向を実現するため、それをもって「帰りたくなる」というアイデアは、いささか独りよがりであって、そこには「家族」という人間関係の捉え方が欠如している。私は、そのようなプランは、さて評価しなかった。私が評価したのは、そこ（帰りたい家）で食べたり、休息したり、笑ったり泣いたり、そして時には怒ったり悲しんだり、家族みんなが同じ思いになるような家。言葉を変えれば、家族一人ひとりを結びつけ、絆を深めるような家。そこで新しい何かが生まれるような家。私は、今回の課題テーマにおいて、そのような情景が思い浮かぶ家を高く評価した。それは、家族だけに限らず、近隣との関係も同じである。

競技部門

複合住居デザイン
コンペティション
セッション

複合住居デザインコンペティションセッション



61 comple house

セッションの目的

第一線で活躍する建築家の評価による設計デザイン能力の研鑽および公開発表によるプレゼンテーション能力の向上を目的とします。

テーマ

「まち暮らしを楽しむための複合住居」

中心商店街、旧市街地などかつては人が集いにぎわいにあふれた場所に活を取り戻すことは、日本各地で大きな取り組みとなつて今なお動いています。もう一度、まちなかへ人の暮らしを回復させるための、そしてもう一度、魅力あるまち暮らしを取り戻すための設計提案を期待します。

設計条件

- 敷地条件 : 敷地は各自で設定すること。ただし、敷地面積400m²程度(±10%)とする。法規もしくは条例上、3階建ての建物を建設することが可能な敷地とする(ただし容積率、建ぺい率は各自治体で指定されたものによる)。敷地は実際に存在する場所を想定すること(ただし、作品提出時点で設定した敷地に既存建築物が存在していても可とする)。
- 家族条件 : 各自分で家族を設定すること。ただし、設計する建物内に必ず定住することを前提とすること。
- 施設機能 : 住宅機能を有する施設とすること。複合させる機能は各自で設定すること(例:各種事務所、飲食店、小売店、アパート、地域学習教室など)。
- その他条件 : 主要構造はRC造3階建て(ただし法律内で定める耐火性能を有する場合、混構造でも可)。敷地は6m以上の道路に接していること。地下室は設けない。隣地境界線からの距離は0.5m以上とする。

応募先

- 事務局 : 全国高等専門学校デザインコンペティション実行委員会事務局
連絡先 : 〒929-0392 石川県河北郡津幡町北中条タ1 石川工業高等専門学校 学生課学生係
e-mail : descom5@ishikawa-nct.ac.jp

応募資格

応募時点で全国の高等専門学校に在籍する学生で、専攻科生等を含みます。(共同不可)

複合住居デザイン
コンペティション
セッショ

質疑応答

質疑は、e-mailのみで受け付けます。宛先は、上記事務局まで。電話による質疑は受け付けません。

応募方法

- 用紙 : A2判2枚(パネル不可)
- 図面内容 : 平面図・立面図・断面図・透視図・模型写真等必要と思われる図面および設計主旨・敷地現状等の説明文。
- 提出方法 : 所定の用紙に必要事項を記入の上、図面裏右上にのり付けをして、期限までに事務局に持参(17時迄)または郵送(宅配可)。

審査委員および審査方法

予選(一次審査)は、審査員による図面審査によって、10作品程度を選出する。本選(二次審査)は、本選会場にて、公開プレゼンテーションを行い、審査員による審査および公開講評を行う。審査員長は妹島和世(慶應義塾大学理工学部・客員教授、建築家)とする。

競技日程

募集要項

- 募集要項公表・配布 : 平成16年4月19日(月)
質疑応答期間 : 平成16年4月19日(月)~5月7日(金)
質疑回答の公表・配布 : 平成16年5月14日(金)
作品提出期限 : 平成16年7月13日(火)必着
予選 : 平成16年7月中旬
予選結果発表 : 平成16年7月下旬
本選 : 平成16年9月4日(土)

賞

- 最優秀賞(高専連合会会長賞) 1点 賞状 及び 副賞
優秀賞(石川高専校長賞) 2点 賞状 及び 副賞
佳作 若干数 賞状 及び 副賞

1.審査方法

予選（一次審査）

- 提出期限までに応募してきた作品裏面に整理番号を付した後、ランダムに並び替えて審査員に送付する。
- 審査員は、自らが設定した審査基準に従い、予選を実施する。
- 予選では期日までに本選出場8作品を決定する。また所定の用紙に選出経過を記録し事務局に提出する。
- 事務局は、選出された作品について、募集要項に示された条件（敷地面積、階数、主要構造）についてチェックを行う。
- 審査員から送られてきた予選結果をもとに、選出経過の記録も含め公開する。

本選（二次審査）

<準備>

- 予選通過者は、本選当日までに模型およびプレゼンテーション用のデータを準備する。
- 模型は、A1サイズ(594mm×841mm)に収まる大きさとし、プレゼンテーション用のデータについては、事務局が準備するPCを使用する場合、Windows XP環境にてPower Point2000もしくはWindows Media Playerで再生できるCDを提出する。但し、各自PC持参の場合は、この条件の限りではない。

<審査>

- 審査員は本選開始前に、予選の講評ならびに審査基準を公表する。
- 予選通過者は5分のプレゼンテーション、審査員から3分の質疑応答を行う。
- 審査員は全員のプレゼンテーション終了後、本選基準の項目に従い採点を行い、最優秀賞1点、優秀賞2点を決定する。あわせて、本選で発表された全ての作品について各コメントを記入する。
- 最優秀賞、優秀賞は閉会式で発表する。
- 閉会式後、作品ごとの採点が分かる形で公開する。

審査基準

- 予選基準
 ・大袈裟に開発をする提案ではなく、自然に人ととのコミュニケーションが生まれ、繋がりができることが期待できる提案。

本選基準

- まち暮らしの1つの拠点となり得る提案になっているか。
- さらに新しい魅力的な風景を作るか。
- 提案された建築のスケール感は周辺環境にとってアリティがあるか。

複合住居デザイン
コンペティション
セッション

2.審査員

審査員長 妹島和世 慶應義塾大学理工学部 客員教授、建築家

3.審査記録

予選講評

応募は188作品でしたが、いろんな案があってすごく楽しく図面を見せて頂きました。選ばせて頂いた8点というのは、1階のホールに貼ってあったのでご覧になった方もいらっしゃるかと思います。今回のテーマとなっている中心商店街や旧市街地は全国中で問題になっている場所で、とても興味深いものでした。私としては、あまり大仰に新しく開発するものではなく、もう少し、ふと人ととのコミュニケーションが生まれてきて、繋がりが出来て来るだろうなと思われる案を選ばせて頂きました。本選のプレゼンテーションで、もっと色々なものを私が見せてもらうことになるかと思いますが、それを踏まえて最終案を選ばせて頂こうと思います。

63

regulat
& resu

本選審査結果

受賞記録	作品No	タイトル	評価基準	まち暮らしの1つの拠点となり得る提案になっているか	さらに新しい魅力的な風景は作れるか	提案された建築のスケール感は周辺環境にとってアリティがあるか	合計
佳 作	①	the interpenetration planning					
最優秀賞	②	思川cafe					3
佳 作	③	無題					
佳 作	④	八百屋 野菜ビル					
佳 作	⑤	コインロッカーブギウギ					
優 秀 賞	⑥	M-GATE					2
優 秀 賞	⑦	CONNECT					2
佳 作	⑧	ヒキダシ通り/INVISIBLE "Connection"					

競技概要

入賞結果

最優秀賞	思川cafe	大橋 文彦	小山高専	専攻科	1年
優秀賞	M-GATE	坂野 温	石川高専	建築学科	3年
優秀賞	CONNECT	貞重 亜沙美	吳高専	専攻科	2年
佳作	(無題)	永島 隆行	小山高専	専攻科	1年
佳作	the interpenetration planning	犬塚 恵介	豊田高専	建築学科	5年
佳作	ヒキダシ通り/INVISIBLE "Connection"	西村 匠弘	豊田高専	建築学科	4年
佳作	八百屋 野菜ビル	金築 正洋	米子高専	建築学科	4年
佳作	コインロッカーブギウギ	倉本 真衣	米子高専	建築学科	5年

■思川cafe



プレゼンテーション

この課題に取り組むに当たって、栃木県小山市の小山駅前で計画を立てようと町を歩いてみました。駅前の商店街は一つ大きなデパートがあり、その周りに小さな商店街が沢山散らばっています。よく見ると寂れた商店街ですが、頑張っているレコード屋、小さな自転車ショップ、若い人たちが始めたショップ、そして古くからずっと営業しているお店等があって、町の中にも頑張っている人々は居るんだ、ということを歩いていて感じました。この大きな商業施設に対抗するために、このデパートの巨大な駐輪場の壁面の隅の駐輪スペースを敷地に選びました。頑張っている人々を応援するような地域拠点や情報が集まってきたりするような拠点が、こういう小さな商店街には必要ではないかと思い、日記のような形で毎日更新していくようなホームページ(ウェブロゴ)を備えた地域サロンとしてのcafeを作ろうと思いました。

配置計画について。寂れた感じのある商店街に対して、きれいなファサードで店舗を作っていくのではなくて、キャラクターを持った店舗を作ろうと思い、少し正面から角度を振って建物を配置してみました。すると四隅にオープンなスペースができるできます。ここを、駐輪スペースや駐車スペース、庭や、一里塚、シンボル・ツリーなどを配置してランドスケープ的に使おうと思いました。断面計画について。1階はcafeとして使い、スッキリ・フロアのように上がっていきます。1.5階は玄関ホール、2階は家族の空間、2.5階はユーティリティ、3階は個人の空間そして屋上のひまわり畑につながっていきます。屋上のひまわり畑や、突き出たベランダによって、店のオーナーやその家族達が「思川cafe」を町にプレゼンテーションするような、そういうスペースがいくつか用意されています。

通りから「思川cafe」を見た様子について。角度を振ってあるので、少し塔の様に見えます。通り沿いに一里塚が盛ってあります。平坦で起伏の何もない小山という土地では、塚を盛るということは非常に意味あることで、昔から古墳や一里塚などは目印や憩いの場になっていました。そこで小山の原風景を思い浮かべる様な一里塚を憩いの場として計画しました。一里塚は、この奥の庭カフェのスペースに対して目隠しにもなり、境界の様にもなっています。敷地周辺ではストリート・ミュージシャンもいるので、床に腰掛けながら演奏を聞いたり、雑談をしたり、コーヒーを飲んだりできるスペースになればいいと思っています。駅前ということもあり自転車の町なので、三角形に切り取られた駐輪場に、好きに、アーティスティックに自転車を止めて欲しいと思います。特に高校生達に。

個人と個人とが出会い、時代の集合意識を作り出す、自由なコミュニケーションの磁場として「思川cafe」は、キャラクターを持って小山に溶け込んでいけたらいいと思います。「思川cafe」が基地となり、地域のためのメディアとなるように計画しました。

質疑応答

最優秀賞作品

妹島：この作品も敷地の選び方が上手いと思いました。ものすごく大きなデパートと小さな店舗との間を上手く使っているところに好感を持ちます。計画ではデパートの壁まで取り込んでいますし、建物の角度を振っているのも、ちょうど大きなスケールと小さなスケールの間のところです。また駅に近いので割と人がもともと通る可能性がありますが、このような建物の配置によって、その周り自体が、道のような、広場の様になっています。ただふらふら立ち寄って、1階のカフェでお茶を飲まなくても、外でただ誰かと喋っている様な情景が浮かびます。1階部分は良く出来ているし、2、3階部分は気持ち良さそうだなとは思いますが、住宅についても、もし何か提案や考えがありましたら、もしくは何か思っていることがありましたら意見を聞かせて下さい。

大橋：デパートなどの連絡通路からの視線に対して、切り取られた窓はなるべくデパート側に向けない様にしました。南面しか開けたところが無いので住宅に関しては閉じた印象があるかも知れません。しかし裏手のユーティリティの部分を上手く使って、家族のスペースみたいなスタイルが上手くできないかと思いました。

妹島：それで半階上げて別の部分をつくる訳ですね。分かりました。

講評

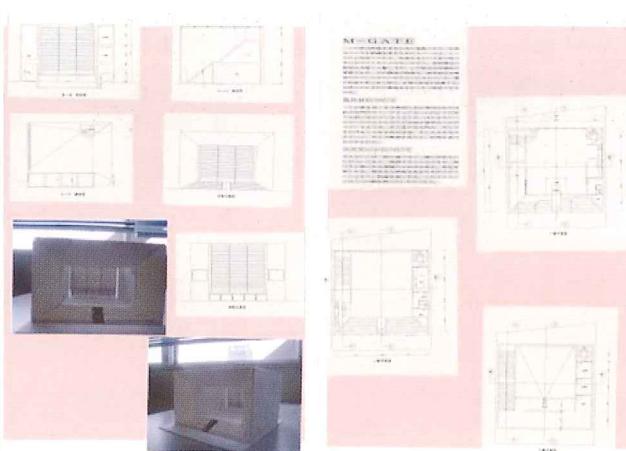
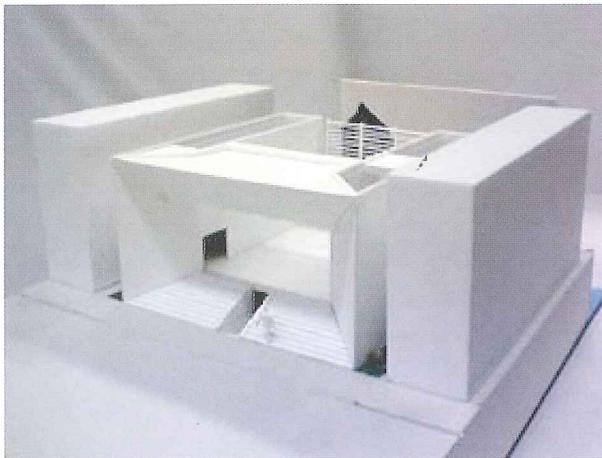
大きなスケールと小さなスケールが交じりあうエリアに対して、ヴォリュームの置き方が魅力的である。敷地全体の使い方も良い。いろいろな人が気楽に立ち寄れる情景が浮かぶ。全体をまち暮らしとして捉えられている。

複合住居デザイン
コンペティション
セッション

1st prize

64

■ M-GATE



プレゼンテーション

はじめに、この家の建っている場所の説明をしたいと思います。敷地は石川県河北郡津幡町の加賀爪にあります。周りは商店街です。裏には、津幡川が流れていて、その対岸にはお寺が見えます。僕はまずこの家の外観をこだわりました。正面から見て門のように見せたくてこのような形にしました。吸い込まれて行くように見せるために、手前の開口が大きく、奥が小さくなっています。この門型をきれいに見せるために、建物を全体的に地下1mに下げました。建物をきれいな箱のように見せるために出来るだけ窓はつけていません。側面には窓ひとつありません。光は天窓と1FLの川沿いの面にある窓から取り入れます。

この家は4ブロックに分かれています。通りから見て左側の壁面部分が全部階段になっています。1階はリビングです。2階は客席になっています。通りから見て右側の壁面部分が生活スペースとなります。3階は映写室です。

次に1階の説明をします。ここは広いリビングです。ここでは、客を招いてパーティを催したり、トレーニングマシンを置いて、運動をするのも良いのではないかでしょうか。広いリビングには、唯一の窓があります。ここからも良い景色が見えます。景色を見ながら朝ごはんを食べると良い一日が始まるでしょう。1階には、家中のものが入るほどの大きさの収納が用意されています。次は2、3階の説明をします。この広場では、映画を見ます。思い思い好きな様に座ってもらえばよいと思います。道路から右側は、生活スペースになっています。夫婦のプライベート空間で、他の人達が入ってくることはありません。気持ちよく生活できることを第一に考えています。左側は階段です。幅が広くて真っ直ぐに伸びています。巨大な天窓から差し込む光は、太陽と空を肌で感じ、階段を上る時、爽快な気分になるでしょう。階段の下には、キッチンがあります。ここで、料理を作り広場で食べてもらおうと思います。

3階まで階段を上って行くと映写室があります。この映写室は、夫の空間です。夫はロボットを操縦しているかのようにこの映画館を操るのです。このスクリーンは、開閉式です。このギアが曲がってパネルが動きます。スクリーンを開けると後ろの景色が見えます。この景色を活かして、昼間はここを町民の憩いの場として提供したいと思います。そして夜になりこのスクリーンを閉めると、ここは映画館になります。広場の上を見ると、天気のよい日は満点の星空も見えるでしょう。この季節だとお月見をするのも良いのではないかでしょうか。

さらに映画を見ながら食事も出来ます。普通、映画館で他人が会話していると迷惑ですが、食事をしながら映画を見るときは皆も喋っているので、会話していることが自然に感じられると思います。僕は映画館で映画を見ると疲れます。ソファーに座ってくつろいでいるつもりですが、くつろげません。しかしこの映画館では皆おのの好きな形で座ればいいので、周りを気にせずくつろげると思います。ここは見る人たちが自由に過ごすことのできる映画館です。そして映画が終わってみな余韻に浸っていくのです。

質疑応答

妹島：この作品は、周りの皆のリビングルームみたいなイメージで作られていて、面白いと思います。住んでいる旦那さんと奥さんが多分、非常にマニアックな映画好きと料理好きという設定で、それを追及していった結果、自然に周りへ開いた場所が出来るというのがすごくよくまとめられていて面白いと思います。本日プレゼンテーションを拝見しましたが、1階は意図的に落としたと説明されていました。確かに建物のプロポーションはきれいになっていると思いますが、1階の広いリビングの天井が少し低いかなという感じを受けました。低いのは多分、上に大きな場所があるから良いのだろうけどその低い良さみたいなものをもう少し家具の置き方か何かで、厳密にいえば大丈夫なのかもしれないけど、工夫できると思います。先の映像の印象では、天井が低いのがむしろ圧迫感になっているように思います。

坂野：済みません。あれはキッチンの模型を高く作り過ぎてしましました。模型では家具が大きくなり過ぎました。

妹島：この広場みたいなところは、一応上にガラスの天井がかかっているのですか。

坂野：いや、何も無いです。

妹島：じゃあ外ですか。なるほど、どこの場所も面白そうですね。映写室に上がるだけの階段だったら、本当はみんなに大きいものは要らないのだろうけど。そこから既に趣味の空間みたいになっていて、よく出来ていると思います。

講評

複合住居デザイン
コンペティション
セッション

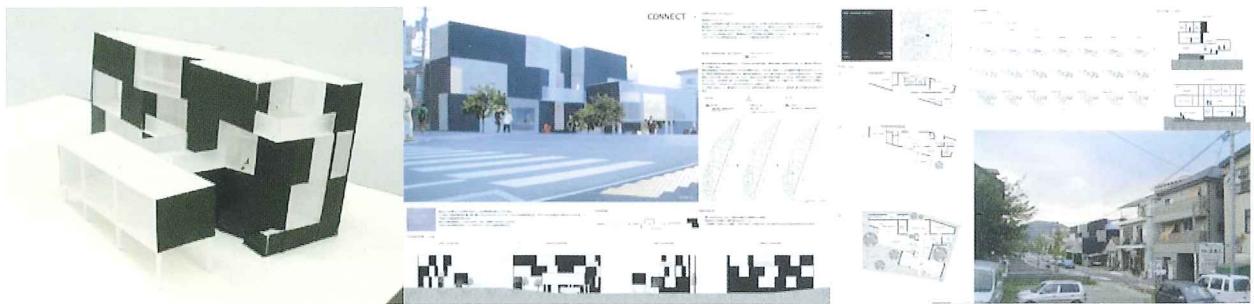
65

2nd pr

優秀賞作品 1

地域の人のみんなのリビングルームとして使えるだろう。一方で、雨が降った日など使われなくとも良いスペースになってしま

■ CONNECT



プレゼンテーション

SHOPPING DISTRICT（商店街）について説明します。商店街とは、潮の満ち引きのように、賑やかになったり、静かになったりするリズムを持っている一つのコミュニティーです。昔の広島県呉市広商店街は今の倍の距離があり、その中央にある胡子神社は商店街の守り神として、最も栄えていた場所でした。現在の商店街は年齢層の高い地元の人々のための場所となっています。商店街の中央では、道が拡張され、さらに移転してきた大学にも繋がる新たな道ができ、若者が集まりやすい環境となっています。ここを新たな核（町の中心）として、商店街の人々だけでなく若者も集まる場所とすることで、商店街に新たな活気を生み出したいと思いました。敷地の交差点に接している場所には、新しく店ができ、きれいな景観となっていますが、このなかで一つ廃れているビルがあります。写真は、毎年夏に広商店街で行われる、土曜夜市の様子です。商店街の各店が夜店を出し、商店街全体がとても賑わっています。人々が集まる要素があるものの、この廃れたビルのせいで有効に利用されません。

PLAN（計画）について説明します。私はこの計画に闕を組み込みました。闕とは外部と交流をする場所という概念で、商店街のどの建物にも闕が組み込まれています。この場所には、人々がとどまり交流を深めるよう、闕をさまざまな要素のあるカフェにしました。

さらに呉はレンガの町として有名で、商店街の道もレンガ道です。レンガの特性である、1つのものが下の2つ以上のレンガに連結し保っているという相互関係を人との繋がりや空間の繋がりと考え、レンガをモチーフとした複合住居を計画しました。

平面図について説明します。1階にはシアター、インターネットカフェ、バーがそしてカフェがあります。シアターは通りのどの場所からでも見えるように配置しました。バーからは、その奥にある道路側のカフェの様子を見ることができます。さらにレベル差が違うため、面白い空間となっています。そしてシアター横の階段とカフェ・キッチン奥の階段がオーナーのエントランスになります。2階には家族がくつろぐリビングダイニングなどあり、ゲストルームも設けています。3階は、個人のプライベートな部屋があり、共有部分の廊下には家族だけのカウンターを設け、商店街の景色を見ながら家族の仲を深めます。

立面図について説明します。黒い部分が壁で、白い部分をガラスとし、レンガをイメージしています。こちらは断面図です。バーの上はオーナーのテラスになっています。カフェシアターは階段状になっており、好きな場所から見ることができます。IMAGE（イメージ）について説明します。実際に建った時のイメージ写真です。Aから見たのがこちらです。周りの町並みにうまく浸透しています。提灯のある方向が商店街です。Bから見たイメージです。ここに人々がとどまり、学校帰り、買い物帰りにこのカフェで今日のお喋りが始まります。Cから見たイメージです。商店街に人々が集まる日、ここにも新たな賑わいの場所としてカフェに人々が集まります。店街の中心に人々の交流の場を作り、人々の繋がりを深めることで商店街に新たな活力を生むことができると思います。

質疑応答

妹島：Aの視点からの写真というのが町並みにうまく浸透している、と説明されていましたが、寧ろB、Cの視点からの写真は既存の商店街と住宅が混じったような、例えば、バルコニーや色んなものがごちゃごちゃ混じりながらできているところに特に惹かれます。新しい計画でも、上手に混じりあったような感じが作り出されていて、外から小さなシアターが見えたり、内側からはカフェが見えたり、そういうようなスケールの連続感と、単純にし過ぎないでいくつかの要素のものを組み合わせるという二つの手法は、商店街の中につくっていく際に上手な提案になっていると思いました。分かりやすいプレゼンテーションだったので質問は特にありませんが、住宅からあまり外には出られないのですか。3階の小さい三角みたいなテラスはどうですか。

貞重：はい、3階のここは子供だけのテラスになっています。

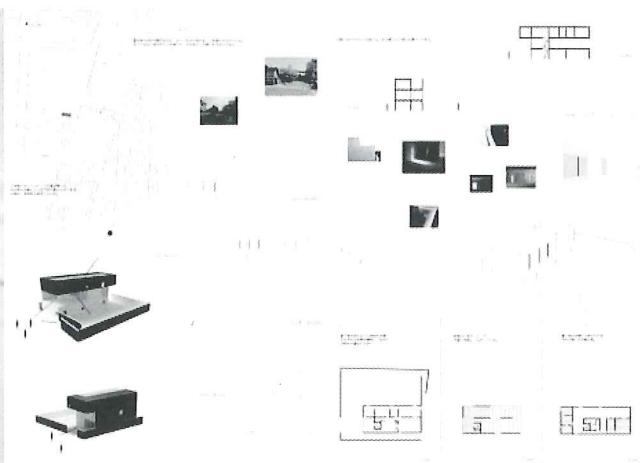
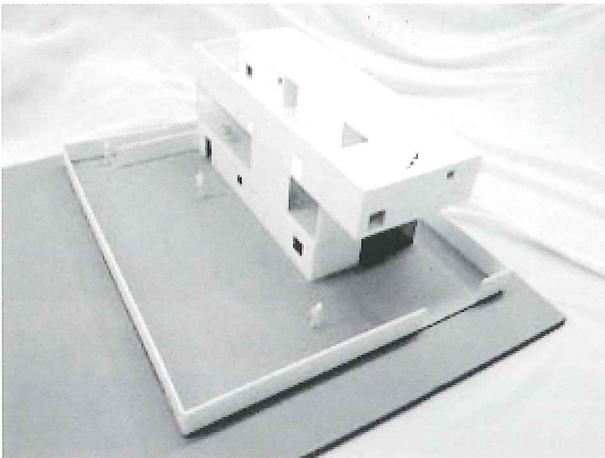
妹島：この形は敷地なりに決まっているのですか。

貞重：敷地に平行して配置していますが、ここは広く取りたかったので、縦に置いて開いているように斜めにしました。

妹島：空きを取って、そこに固めているのですね。

講評

既存の商店街の中に新しい建物なのに非常にうまく溶け込んだ計画であると思う。商業スペースにもう少しアイデアがあつても良かったのではないかと思う。



プレゼンテーション

今回の計画で私は、栃木県小山市に住宅を設計しました。敷地は小山市の中心市街地である小山駅西口の近くです。敷地の周辺状況として、駐車場などが多く、建物の密度はありません。住宅の居住者の家族構成は、夫婦、子ども二人に設定しました。機能は居酒屋です。この住宅の設計で気を付けたことは、外の環境と積極的に繋がる家をつくることです。外の環境、つまり他者であったり、太陽とか視線とか空とかそういう日常的なことをどんどん暮らしの中に入れていこうと考えました。この住宅の最大の特徴は3層に分かれている各層ごとに、異なる暮らしのスタイルを持っていることです。

断面図からも明確に分かれていることが分かります。1階部分は居酒屋に訪れる人と家族のための空間になります。その特徴として、床全体が土間の様になっていて、部屋と部屋の間に開放部が設けられていますが、建具がないため部屋と部屋が何となく繋がっていける様な曖昧な空間になっています。機能としては、道路側が商業・居酒屋の機能が強くて、反対側が居住空間の色が強いのですが、例えば普段は居酒屋みたいな感じで使っているところが、ある時には奥さんの習い事の発表会が出来る様にも考えられています。

1階部分です。キッチンから商業スペースの方を見ると開口部が設けられていたりして、何となく繋がっていける様になっています。奥には部屋があります。

2階部分は家族のためのリビングになります。2階の大きな特徴は、視線という点で外に密接に繋がっているところです。プライベートよりも、ある程度見られてもいいように計画しています。ガラスと壁に囲まれた内部空間では、窓のガラスが開くと中と外が曖昧に繋がる様になつた空間といっています。

最上部は個人の空間と庭になっています。夫婦の空間、子供の空間、外の空に開かれたテラスがあります。部屋は二つに分けられて、部屋の前室では本を読むことができる様になっています。テラスでは、窓が開くと中と外とが繋がり、大きな部屋になります。

質疑応答

妹島：1階に、大きな庭や通りみたいなものが低い壁や塀みたいなもので構成されていますが、それに関して、誰がどの様に移動し、また何処から人が入ってくるのか、ということについて説明して下さい。

永島：この庭は、壁に囲まれていますが、部屋の中の延長と考えています。大きく開くのではなく、壁としてそこに立たせて、つまり部屋の延長の様に壁を立てて、外部の人の庭だけではなくて、両方のための空間としています。

妹島：居酒屋へは何処から入りますか。

永島：居酒屋は、正面の通り（東側）から入ります。壁沿いにアプローチします。

妹島：家族の玄関はどうなっていますか。

永島：裏（西側）にも非常に小さな路地があるのでそこから入ってくるか、庭を通って来ます。

妹島：図面左側の引き違いになっているところが家族用のエントランスですか。

永島：はい、そうです。

妹島：一つ一つのプランはすごく良くなっていますが、私が一番惹かれたのは、1階のこの入り方です。図面右上の壁沿いからちょっとと入って来ると、相当広いけど割と壁で閉じている庭に出ます。庭は、体験することは出来そうですが、窓越しに見えるだけの場所の様にも感じます。魅力的だけど実際は部屋と同じように現れるのですか。それともあまり使わないのでしょうか。

永島：広さとしてはかなり広いので、空き地みたいな感じに、子ども達がボール遊びをしたり、パーティを外でやったり、そういった感じの、でも完全には外に開いていなくて、閉じています。

妹島：ところでこの塀の高さはどの位ですか。

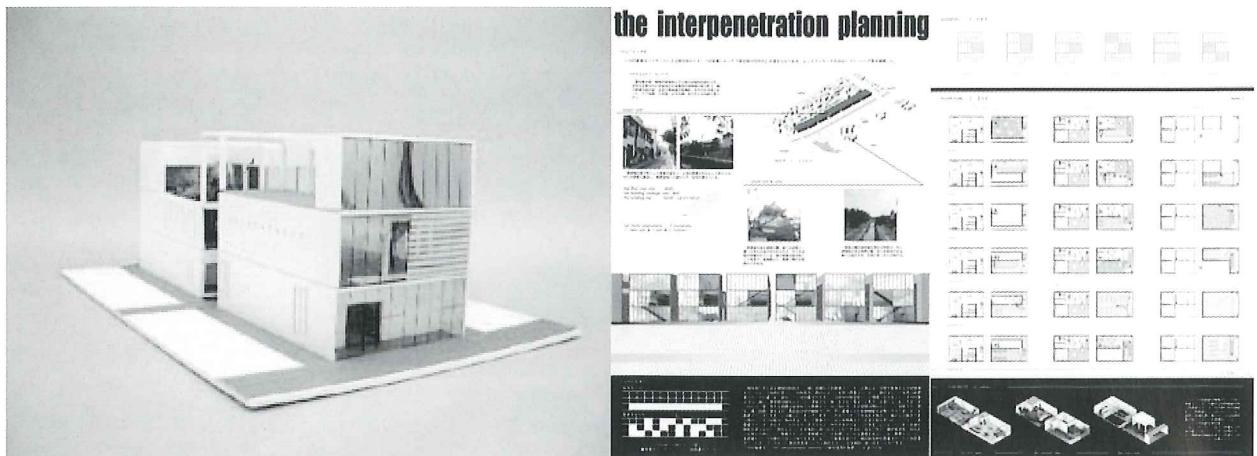
永島：1500mmです。

妹島：もう少し高そうな気がしますけど、1500mmなら男の人は十分顔が出せますね。この案で具体的にどうなっているのかと思いましたが、この1階の庭というのに一番惹かれました。特別「中からそのまま繋がってきます」といった繋がり方ではなくて、独立しているけれども、何となく関係が生まれています。さらにエリアに対しても繋がっている様な、切れている様なそういうった場所というのは、考えてみると面白い場所だと思います。

講評

大きな庭に興味を持った。居酒屋に入る前にその空間に入るわけだが、使われるわけではない。外部から切られながら連続性もある。もう少し説明がほしかった。2F、3Fのプランはもっと違っていた方が効果的であろう。

■the interpenetration planning



プレゼンテーション

インターフェネントレーション・プランニング(相互浸透計画)とは「ファサードにおける商業スペース、非商業スペースの相互浸透、建築物と周辺環境との相互浸透」とします。プロジェクトエリアは愛知県岡崎市でかつて商業の中心として栄えた城下町・康生町を選定しました。敷地選定の理由として、衰退化しているため活性化を目標にしやすいこと、川を挟んで正面に緑豊かな岡崎公園を眺望できる良好な環境であることが挙げられます。

次に計画案について説明します。今回の課題では店舗の内容を考えずに建築のイメージがどれだけ商店街を訪れる客に良いイメージを与えられるかを考えるためファサードのイメージに注目しました。既存の商店街のファサードは、1階に営業の場となる商業スペース、2階以上に商業スペースに付属する事務所や倉庫もしくは住宅などの、非商業スペースとなっている場合が多く、商業スペースに倉庫の暗いイメージや住宅の生活感が重くのしかかり、商店街全体を何となく暗く、重いイメージにしています。そこで、インターフェネントレーション・プランニングでは商業スペースと非商業スペースの割合を1対1とし、ファサードを相互浸透させ、バランスを保ちながらランダムに配置することで暗く重いイメージを抑え、さらに非商業スペースの暗いイメージや生活感を表に出さない様にマスクをかけることで商業スペースの明るいイメージが全面に表れるようになっています。またこの6パターンを基本（1ブロックにつき敷地が400m²）として、これらを繰り返すことで商店街全体に明るいイメージが浸透していくと考えています。

パターン1を代表として説明します。ファサードは、非商業スペースの2階部分に木製のスリット、商業スペース部分にミラーガラスを設けます。ミラーガラスには岡崎公園の自然が反射し商店街を訪れた客の目にになります。一方住人はスリットにより客の視線を気にせず、岡崎公園の自然を楽しむことが出来ます。木製のスリットの内部には中庭があり、樹木により客の視線を遮断しますが、住宅ではスリットの間から緑が見えます。このような相互環境を築くことによって非商業スペースの暗く重いイメージにマスクをかけるだけでなく、商店街に岡崎公園の自然を浸透させ、周囲の環境との調和をはかりました。

続いてはプランの説明に入ります。家族構成は祖父母、夫婦、子供二人という二世帯住宅に設定しています。正面道路側が商業スペース、奥側が祖父母のための住居スペースです。2階には道路側が1階とは別の店舗を設けた商業スペース、奥には夫婦と子供のための住居スペースを設置しました。3階は子供室が配置されています。また6パターンの各ブロックの間や住居スペースとの間には、人の通れる路地的空間を配置しました。メイン道路からは一歩中に入れば違った雰囲気をもつ路地空間になるのです。住居スペースの出入り口に濡縁を設置したのも、路地を歩いている人とコミュニケーションをとるきっかけをつくるためです。コミュニケーションをはかることで隣人との関係を築くことができ、商店街のイメージが改善され活性化に繋がります。

質疑応答

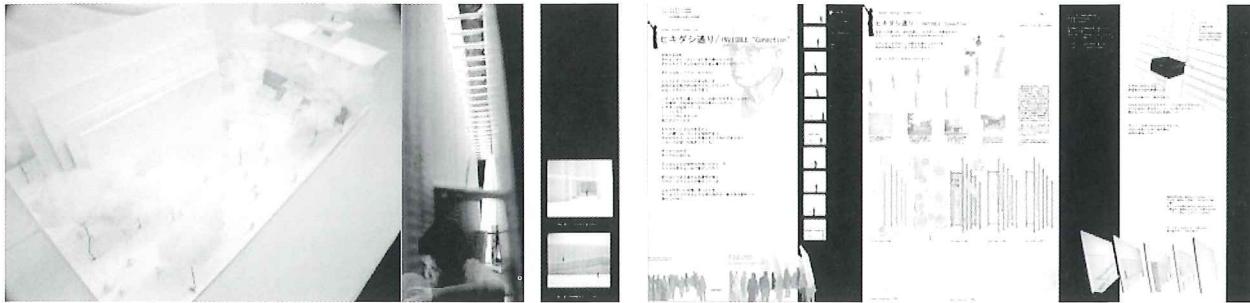
妹島：大変分かりやすいプレゼンテーションだったと思います。私は実際にその場に行ったことは無いですが、敷地の選び方がすごく上手いと思います。割と小さなスケールのファサードが商業と非商業を示す部分に細かく分かれていますが、全体としては大きな面作っていますが、小さなスケールの積み重ねで作られているので、こうゆう場所にすごく馴染むと思います。一点ご説明では非商業つまり住宅の部分が前面へ出ないようにと言っていたかと思います。確かにそのままライバシーが露出してしまうと難しいのかもしれないけど、むしろこの計画で私が評価しているのは商業空間と非商業空間が上手い具合にミックスしている、積極的にミックスしているところです。しかし、あまり生活観みたいのを出したくない、という説明に聞こえました。寧ろ、路地とか、ファサードにしても、二つを上手く分けながらも近づけてつくっている点が、評価できるかと思、いますが、そのことについていかがですか？

犬塚：今回の計画では、敷地が400m²と広いこともあります。住居スペースを奥の方に設けましたが、基本的にはランダムに配置することで、上からの生活感の重さとか商業に必要性の無い暗さ、商業の明るさをもっと前面出したいと思い、このような形にしました。非商業スペース側に木のスリットを設けたり、あるいは商業スペース側をミラーガラスにすることで、視線を感じずに住宅を積極的に前に持ってくることもできる計画かと思います。

講評

従来のイメージに対する新しいイメージの提案はすばらしいが、それとプランに少しづれを感じる。もう少し住居空間商業空間とがまじり合っていても良いのではないだろうか。

■ヒキダシ通り／INVISIBLE “Connection”



プレゼンテーション

町には沢山の人たち。買い物している人、働いている人、歌っている人、踊っている人、急いでいる人、のんびりしている人。いろいろな人がいるけれど皆んな知らない人ばかり。活気のある町ってどういう町だろう。人が沢山集まる町。いや人と人が繋がっている町。その繋がりが町を楽しくしてくれる。わくわくするような場所、どきどきするような時間、ここは静かなふしきな出会いの空間。旧東海道の宿場町として栄えた磐田市の見付通り、見付通り商店街。今でも多くの人がここを訪れる。ここは小路と呼ばれる細い路地がいくつもあり、その一つに宮小路と呼ばれる小路がある。この小路には町のアイデンティティとなっている旧見付学校と呼ばれる日本最古の木造洋風校舎が静かに佇んでいる。あるとき一人の老人がこの場所にヒキダシ通りを作った。

何故かは分からないがヒキダシ通りを作った。その通りには五枚の壁があり、狭い路地のような空間となっている。通りを歩く人々はふとこのヒキダシ通りに導かれていく。図面左1列分が住処となっていて、右4列分がヒキダシ通りとなっています。壁には一面に引き出しが並んでいる。このヒキダシは宝物を入れておく場所。どのヒキダシを使ってもいい。そして誰のヒキダシでも自由に開けてみることができる。ヒキダシの奥の部分はパンチングメタル、木、ガラスの三種類の素材で作られている。これによって、光や風をヒキダシから取り込んだり、またおじいさんの住居側からヒキダシの中を見て、見守ることができる。光や風などの自然を取り込むヒキダシ、暗くて中が見えないヒキダシ、どうやっても開けれそうにないようなヒキダシ。人々は好きなところに自分の思いをしまう。人々はヒキダシを通して人の思いと出会う。ここにいると一つ一つのヒキダシが語りかけてくる。それは物にも心があるから。物には色々な物語があり、それがその人にとって大事なものであればあるほどいろいろな思いが詰まっている物から伝わる、物だから伝わる。

ヒキダシからは一体何が出てくるのだろうか。思い思いに物を通して人と人とが繋がり、思い思いの時間を過ごしていく。人々は会わないけれど宝物を通して静かな人とコミュニケーション。そんな人との繋がりがあつてもいいのではないだろうか。初めは人が多いけれど知らない人ばかりだった町。ヒキダシ通りによって町には見えない出会いが尽きることはない。町の暮らしを楽しく、都市には直接でない静かな繋がりをつくることも1つの方法ではないだろうか？おじいさんはこのヒキダシ通りで人と人との静かな出会いを見守りつづけていくだろう。宝物の番人として。

質疑応答

妹島：ヒキダシはおじいさんも使うし、一般の人も勝手にヒキダシを開けて中を見たり自分のものをヒキダシに入れたりという使い方をしても構いませんか。それと建物がなぜ全体として斜めに倒れているのか、またなぜ五列のうち4列全部ヒキダシに使われているのか、そのことについて説明して下さい。

西村：斜めになっている理由は、後ろの旧見付学校という地域のランドマークとなっている学校を隠さないためです。その学校は地域のアイデンティティ的な存在になっているのでまっすぐ建てるより半分隠れてしまうので、敢えて斜めにすることによって学校を見せつつ通りから流れてくるようにしました。また4列全てをヒキダシにしているのは、色々なヴァリエーションを用意するためです。例えば、迷路の様に階段を上って隣に行ったり、2階3階に上ったり、また閉じた暗い空間が好きな人もいれば、高いところも好きな人がいるだろうし、低くて皆によく開けられそうなところがいいって言う人もいると思い、色々なヴァリエーションをつくりました。

妹島：どうしてヒキダシが1列だけではいけないのか、というのが私の疑問です。住宅部分1列とヒキダシ通り1列があるだけなら、倒さなくても後ろの建物が良く見えるはずですが。

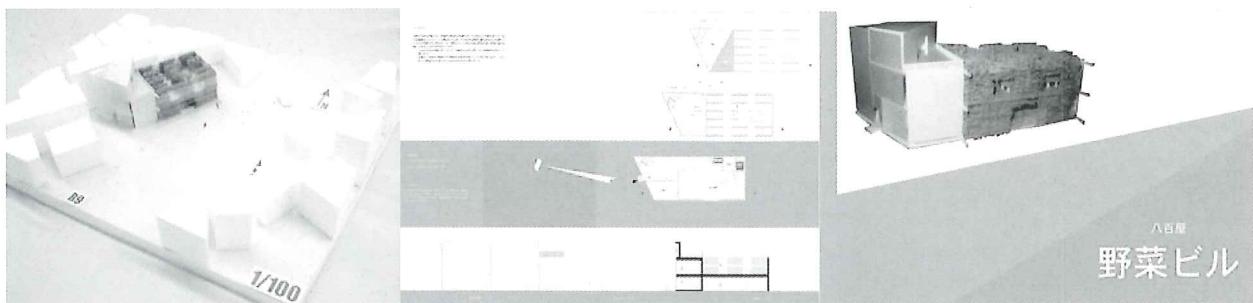
西村：兎に角、数え切れないくらい沢山のヒキダシを入れたいと思いました。広い空間ではなくて、細いひっそりとしたような通りが作りたくて、細くしたのですが、1列だけだと。それで沢山あってもいいかと思って、4列にしました。

妹島：私も細いのは賛成ですが、1列だけでも下から上までヒキダシだったら相当な量になるはずです。4つの通りがあるよりは1つの通りがあるって、それを気に入った人がいると、何処か別の家と家の隙間にまた自分のヒキダシ通りをつくろう、というような形で広がっていく様にイメージしていました。ヒキダシがここまで強くなってくると、静かな場所というふうに説明されていましたが、一寸にぎやか過ぎるのではと思います。本当にさり気なく細くて、はじめは使われなくてもいいけども、でもだんだん口コミで少しづつ知れわたって、興味がある人が来て一寸使ってみたり、一寸見たりして帰るみたいな。発想として私は面白いと思います。だけどもそれにしては4列繋げたのは少々大きさかな、と感じました。

複合住居デザイン
コンペティション
セッショ

69
honorable
mention

■八百屋 野菜ビル



プレゼンテーション

僕は野菜のビルという八百屋の複合住宅を設計しました。敷地は、鳥取県米子市の米子駅に近い国道沿いの敷地を選定しました。この辺りは米子市の中でももっとお洒落な場所です。東京でいう表参道みたいな場所で僕は鳥取の表参道だと思っています。数々の店が建ち並んでいて、そこに沢山の人が集まります。ブランドの店も多く、そこに集まる人たちはその商品の質を分かって買っているつもりで満足しているかもしれません。しかしそれは結局、名前などに誤魔化されて自分の価値観で買い物をしていない気がします。僕に言わせればそんなのはお洒落ではない。自分の価値観で買い物をすることが本当のお洒落ではないでしょうか。自分の目で見極めて野菜をもぎ取りそれを買う。土臭さ漂う有機的なこの野菜ビルを街の中に置くことは今の無機質なこの都市に対する一種の挑戦でもあります。

複合住居デザイン
コンペティション
セッショ

プランについて説明します。住人は50代の夫婦二人暮らしという設定です。図面オレンジ色の部分が居住空間で、灰色の部分が複合施設の空間です。住居プランは2LDKになっています。住人は扉を通って、この施設に直接アクセスします。3階平面図の説明をします。3階は夫婦の寝室があり八百屋の2階には蛇腹式の開閉可能な屋根がついて、野菜を育てる上で太陽の光や雨などを調節します。そして雨の日でも客が買い物できるようにします。断面図について説明します。プランターが二段になっています。模型の写真を見てもらうと分かりますが、道路正面部分がガラスのカーテンウォールになっています。これは、風除けの役目もあります。しかしショーウィンドウとして、野菜ビルになる四季の野菜を街行く人にも見てもらい、それぞれの季節を感じてもらうためにも、ガラスのカーテンウォールにしました。

次に野菜の購入について説明します。夏には、トマト、ピーマン、ナスなどの夏の野菜が育ちます。客はプランターになっている野菜を自分でもぎ取って買います。もぎたての野菜が買えるのと、自分で収穫することで安全も一緒に買える、という利点もあります。冬には、大根、蕪など冬の野菜が育ちます。客はそれを引っこ抜いて買います。買った野菜は1階のレジで料金を払います。このように野菜ビルはオシャレな街の中で、本当のオシャレを楽しむことができる建物だと思います。

norabile
nation #4

70

質疑応答

妹島：野菜というのはアイデアとしてすごく好きで、いいなと思います。確かに図面の中では、周りに住んでいる人たちで栽培を手伝った人は安く買える、という説明があったと思います。このように周りに住んでいる人たちに使われているものが、この様な場所や風景をつくり、かつ客として自分でもぎながら新鮮な野菜を買えるのは魅力的だと思います。しかし本当に野菜が育つような場所をつくるというのは難しいと思います。野菜はすごく魅力的ですが、住宅との関係というのをもう少し説明していただけませんか。

金築：この住宅に住んでいる50代の夫婦二人が野菜ビルを育てています。客とのコミュニケーションとして、先生の言われたように客がこの野菜の栽培を手伝うことで、安くしてもらうという特権があればいいな、と考えています。客が手伝うことでのこの野菜ビルに来る客とこの住宅に住んでいる夫婦とのコミュニケーションがとれると考えました。

妹島：住宅と畑や客室部分は建築のプランでは完全に切れているのですか。

金築：はい。

妹島：2階はリビングですね。リビングの窓から野菜は見えますか。

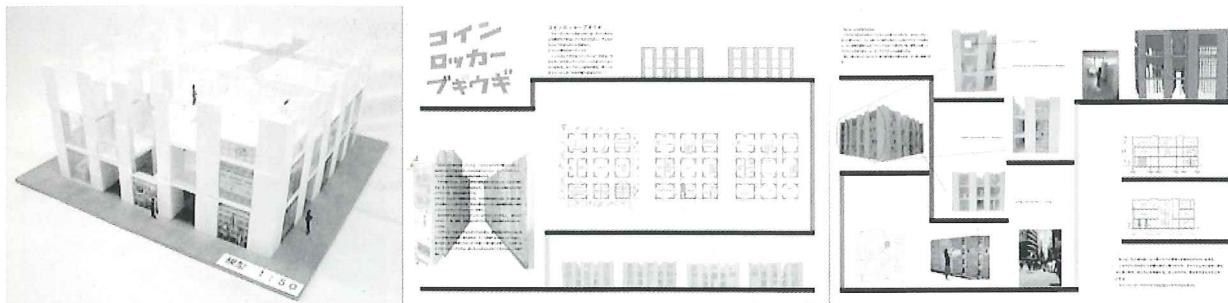
金築：はい。

妹島：兎に角、2つつくついているけど、完全に切る考え方ということですね。

講評

野菜が立面を作り、八百屋もある。アイデアはおもしろく、美しい。もっと野菜の場所が全体として使われたほうが良かったのでは。

■コインロッカーブギウギ



プレゼンテーション

コインロッカーを思い浮かべてみて下さい。コインロッカーは、コインを入れている間そこが自分だけの特別な空間になります。右にも左にも、上にも下にも、誰かのその人だけの空間が隣り合う。それなのに普段の荷物を預けるだけのコインロッカーでは出会いも何も起りません。そんなコインロッカーがもったいない気がしました。もっといろんな可能性があるんじゃないかな、そう思ってコインロッカーブギウギを考えました。大阪の賑やかな町の中にコインロッカーに住む人がいる。でも、あの小さな箱の中に入って生活するのではありません。そこには人が入れるサイズのロッカーや、物を入れるとショーケースになるロッカーがある。これはコインロッカー付き戸建住宅なのです。

場所は道頓堀の戎筋が交差する角地で毎日沢山の人で賑わう。人が多ければ、その分だけ人それぞれの持つリズムが混ざり合い、互いに沢山の刺激を受け合うと考えたので人通りが多いここを敷地としました。

そこに3層の複合住宅が建ちます。赤色の部分が町の人が使うロッカーの部分、青色の部分が住人の空間で、その住民がこのコインロッカーの管理をします。

ここには普通のロッカーと同じくらいの大きさでガラス張りの、モノを入れるとショーケースになる小さなロッカーから、数人が入って使える大きなロッカーまで、大小様々なロッカーがあり、誰でもコインを入れるだけで手軽に使いたい空間を借りることができます。道に面してガラス張りになっているので中に入れた物や、中でしている動作自体が宣伝になります。管理人がそれらの宣伝する人とそれらを見に来る人とを繋ぎます。例えば、見に来た客が宣伝されたものを気に入ったら、その管理人はコインロッカーの中から物を取り出して、売る事が出来ます。管理人と客の間には、それを作った人の話や、その人のもつ店の話、他にもこんなものを作っているんだよ、等と話が弾みます。その他にもいろんな可能性があるでしょう。ときには人間ドラマが生まれます。

少し使用風景を覗いてみます。中で作業をする。料理が趣味な人が料理を作る。友達と勉強をする。ロッカーの中の物を買いながら管理人と話をします。沢山の人で使うロッカーの風景。誰かにプレゼントを渡したい時、この町で買ったプレゼントを預けておき、再び渡したい相手と来てプレゼントを渡し、驚かせる。少し暖かいドラマが生まれます。もう会いたくない相手に物を渡したい時、ロッカーに入っていることを伝え、取りに来てもらうと管理人がロッカーを開けて荷物を受け取る。少し苦いドラマになります。このようにここでは町を行き交う人々の沢山の人間ドラマが生まれます。そのリズムが心地よい時も、少し苦い時も管理人の心を刺激する。管理人はそれをここで毎日生活していくためのエネルギーに変えていきます。コインロッカーブギウギは使う人も、見る人も、住む人も、管理人も、誰もが町暮らしを楽しむためにある！

複合住居デザイン
コンペティション
セッション

71 honoremto

質疑応答

妹島：町の暮らしを本当に楽しめそうだというのが良く分かります。住宅とパブリックなコインロッカーが組み合わさっていると思います。その住宅部分というのは、例えばキッチンなども作業のコインロッカーと呼んでいる部分に分解されているのですか。その辺をもう少し説明して下さい。

倉本：これは1階の図面ですけど、コインロッカーになる部分は、お客さんだけが使える部分です。これがコインロッカー部分で住居部分はコインロッカーという風な使い方をせずに、普通に住居部分になっています。

妹島：お客様が使うコインロッカーの方も作業のロッカーや部屋などの大きさになるものもあるし、本当のコインロッカーが入っているコインロッカールームもあるといった感じですか。ではその住宅は、お客様の動線空間を含んでいる様ですが、その動線空間には出なくとも、住民は家の中で生活できるのですか。

倉本：はい。お客様の使う階段と住人の使う階段が別になっていて、住居部分とコインロッckerが仕切られています。2階も3階も同じようになっています。

妹島：なるほど。分かりました。模型を見ていると、ほとんどの住宅部分の部屋はバラバラにされて、コインロッckerとして使われる部屋と組み込まれ一体化されているところが面白いと思いました。しかし、どうなっているのか疑問でしたが、よく分かりました。

講評

コインロッckerを拡大解釈したことがおもしろい。小さな場所自体もコインロッckerのように使えたらおもしろい。細い通りが少し暗くなるのではないかという点が少し気になった。家に離れがあるともう少し2つが交じり合ったのでは。



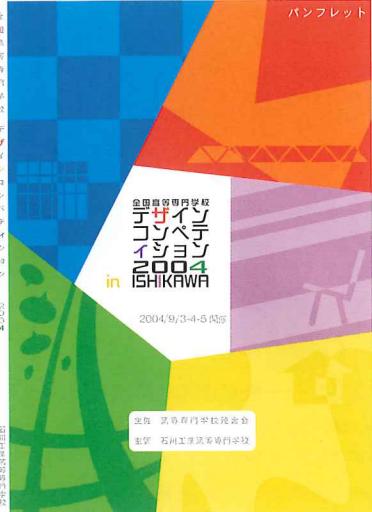
◆ デザコン開催予告ポスター

(裏)



◆ デザコン大会当日パンフレット

(表)



作者：中島 弘陽 石川工業高等専門学校 建築学科 5年

ポスターは開催地である石川県の歴史的イメージを九谷焼に求め、その丸い器の形を基調に、その色彩を各セッションの象徴色に当てはめ、黒背景でまとめてシックな印象にした。パンフレットは一段階明るい色とモチーフを取り入れ、ポップな感じにまとめた。

資料

専攻科2年

池上茂雄 寺尾章子

専攻科1年

池上岳志 市川博基 大沢裕美 川田俊之 酒井修平 小西伸治 樋本梨沙

環境都市工学科5年

相川晃平 池村太伸 内田陽介 亀田裕子 北口航 熊谷恵太 高裕子 竹津ひとみ 田中志野 中田卓

長田将吾 中橋良亮 西谷友幸 東野友樹 平田恵梨子 美作世紀 村井早紀

石岡紘太郎 上野実由紀 大嶋実友紀 折坂智美 柿本千明 角美佳 川島亜由美 北川靖 北橋佳世子
北村陽子 小林佳代 白銀友明 住田薰 高安育美 多田莉沙子 中島弘陽 平田圭亮 細木珠恵 本田祐一郎
横山明菜 吉田紗世

建築学科5年

杉野竜一 土肥毅大 深町啓太 三浦幸太

環境都市工学科4年

浅田真名実 今村元彦 大石智衣 大橋幸生 長田涉 上律子 新古好美 高桑美穂 高村希鈴 田中友規

建築学科4年

田中理絵 土田純寛 出口智也 中谷綾香 野田真士 橋本由梨 早崎ななみ 平岡広海 堀畑奈央

建築学科3年

増谷和恵 松井智子 馬淵大宇 山越朝美 山本章人 吉岡宏 吉田栄美 吉田加奈恵

環境都市工学科2年

牛島華織 大江理紗 笠桐伊代 金子香 北川亮 小坂恵利 斎藤友紀 坂江将太 島口嵩史 島崎由起

建築学科2年

丹保有佳里 鶴見哲也 寺井豊 戸部美玲 永瀬亞衣 西村拓則 橋本真奈 東川佳世 福島秀哉 二木みどり

建築学科1年

平畠直諒 美作羽衣 宮脇加奈 森美葉子 山口美希 山田博司 山本麻加弥 山森勇治 横井久美子

吉川准平 吉野恵美 若林朋代

丑屋智志 小伊勢大輔 柏田憲惠 角一平 久田恵生 福田屋龍 宮下昌士 山田眞大

奥野すみれ 加野史奈 神薗小春 北山達也 木村和哉 田中貴幸 田中稔浩 中條恵 土田香奈

川侑希 河内佑介 河原沙佑莉 島井智矢 嶋口亮介 多田啓太郎 出口拓磨 中野大規 福井啓亞 前亜里紗

南川愛貴 幸村美沙

● 地域交流シンポジウム ● ものづくりワークショップ

● 構造デザインコンペティション ● 木造住宅デザインコンペティション ● 複合住居デザインコンペティション

委員長	金岡千嘉男	開催主管校校長	石川工業高等専門学校
委員	浦島三朗	北海道地区	苫小牧工業高等専門学校
	丸岡晃	東北地区	八戸工業高等専門学校
	尾立弘史	関東信越地区	小山工業高等専門学校
	熊澤栄二	東海北陸地区	石川工業高等専門学校
	八木雅夫	近畿地区	明石工業高等専門学校
	田村隆弘	中国地区	徳山工業高等専門学校
	太田貞次	四国地区	高松工業高等専門学校
	中村孝至	九州地区	都城工業高等専門学校

全国高等専門学校デザインコンペティション事務局（開催主管校：石川工業高等専門学校）

デザコン開催委員会

委員長	金岡千嘉男	校長
副委員長	前田勉	副校長（教務主事・教授）
	熊澤栄二	建築学科 ・助教授
委員	畠時男	環境都市工学科 ・教授
	富田充宏	〃 ・助教授
	豊田剛	〃 ・講師
	高野典礼	〃 ・助手
	石渡博	建築学科 ・教授
	船戸慶輔	〃 ・助教授
	村田一也	〃 ・講師
	内田伸	〃 ・助手
	原健四郎	庶務課長
	神田一朗	会計課長
	西出良一	学生課長

開催主管校組織

校長	金岡千嘉男
副校長・教務主事	前田勉
校長補佐・学生主事	小泉徹
校長補佐・寮務主事	堀田素志
専攻科長	鳥居卓爾
図書館長	高島要
環境都市工学科主任	畠時男
建築学科主任	石渡博
事務部長	岡田東彦

セッション及び事務担当

地域交流シンポジウム	佐藤英代（建築学科）、豊田剛（環境都市工学科）
ものづくりワークショップ	村田一也（建築学科）、高野典礼（環境都市工学科）
構造デザインコンペティション	船戸慶輔（建築学科）、富田充宏（環境都市工学科）
木造住宅デザインコンペティション	内田伸（建築学科）
複合住居デザインコンペティション	熊澤栄二（建築学科）
事務部	西出良一、小坂與繁、畠山啓子、坂本隆之、干場佳美（学生課）

資料

事務部

〒929-0392 石川県河北郡津幡町北中条タ1

石川工業高等専門学校

建築学科 熊澤 tel 076-288-8180 e-mail kuma@ishikawa-nct.ac.jp
学生課学生係 坂本 tel 076-288-8033 e-mail gakusei@ishikawa-nct.ac.jp73 edi
no

学内スタッフ

事務局統

学科スタッフ

●環境都市工学科

教授	布本博
	出村禧典
	畠時男
	小泉徹
	竹本邦夫
	西澤辰男
助教授	富田充宏
	重松宏明
講師	豊田剛
助手	鈴木洋之
	高野典礼

●建築学科

教授	金木健
	石渡博
	北田幸彦
	河内浩志
助教授	中村昭英
	熊澤栄二
	佐藤英代
	船戸慶輔
講師	村田一也
助手	内田伸

デザコン学生組織

●デザコン学生委員

sd	川田俊之	1AC
	馬淵大宇	4A
sy	吉岡宏	4A
	小林佳代	5A
ws	丹保有佳里	3A
st	三浦幸太	4C
	柏田琴恵	2C
wh	美作羽衣	3A
	山本麻加弥	3A
ch	上野実由紀	5A
	住田薰	5A
	土肥毅大	4C

●デザコン記録編集

デザイン	中島弘陽	5A
編集	北村陽子	5A
	住田薰	5A
	吉岡宏	4A
協力	池上茂雄	2AC
	川田俊之	1AC

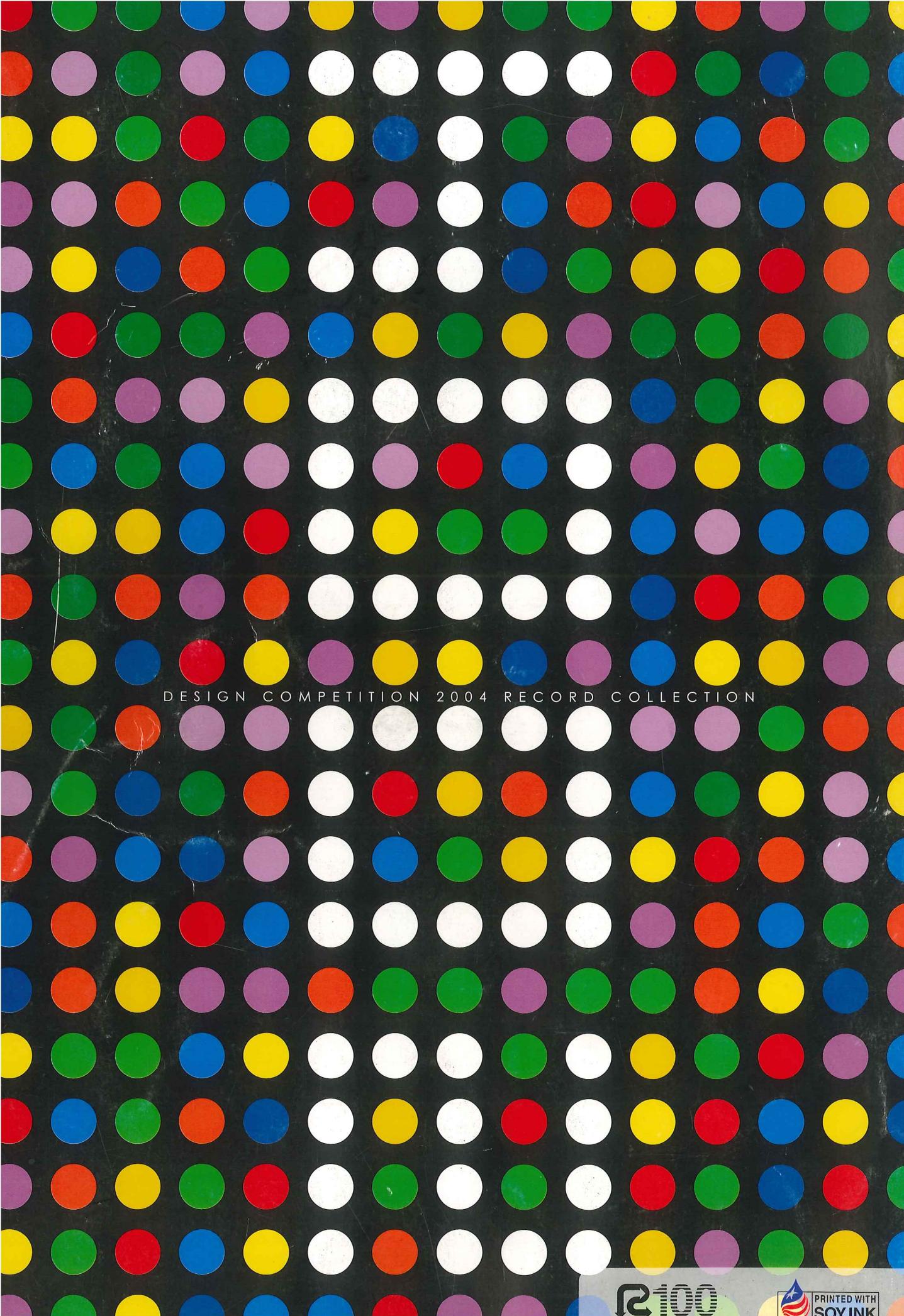
【略記号】

sd: 学生統括
 sy: 地域交流シンポジウム
 ws: ものづくりワークショップ
 st: 構造デザインコンペティション
 wh: 木造住宅デザインコンペティション
 ch: 複合住居デザインコンペティション
 AC: 専攻科
 C: 環境都市工学科
 A: 建築学科

第1回全国高等専門学校デザインコンペティション記録集

発行 高等専門学校連合会 平成17年1月

編集 石川工業高等専門学校
金岡千嘉男 熊澤 栄二



DESIGN COMPETITION 2004 RECORD COLLECTION

R100

PRINTED WITH
SOY INK